醫學博士 藤浪剛一 著

醫家先哲肖像集

刀江書院刊

648-159

謹みて醫學博士文學博士
富士川游先生の坐右に本
書を捧呈す

醫家先哲肖像集

目次

一　序文　一―二六

一　圖像　二七

（上は図版ページ数）

奈良平安時代

第一　僧行基　二八―二九頁

第二　僧觀勒　三〇

第三　僧鑒眞　三二―三三

藤原時代

第四　丹波康頼　三四―三五

第五　丹波康頼（別圖）　三六―三七

第六　丹波雅忠　三九—三八
第七　出雲廣貞　四〇—四一

鎌倉足利織豊時代

第八　僧　忍性　四三—四二
第九　越後丹介　四四—四五
第十　安藝守定　四七—四六
第十一　田代三喜　四八—四九
第十二　曾谷慶裕　五一—五〇
第十三　曲直瀨道三　五二—五三
第十四　施藥院全宗　五五—五四
第十五　曲直瀨正琳　五六—五七
第十六　曲直瀨正純　五九—五八
第十七　御國意齋　六〇—六一

德川時代

第十八　曲直瀨玄朔　六二—六三
第十九　堀杏庵　六四—六五
第二十　岡本玄冶　六七—六六
第二十一　施藥院宗伯　六八—六九
第二十二　野間三竹　七一—七〇
第二十三　藏曼公　七二—七三
第二十四　向井靈蘭　七五—七四
第二十五　山脇玄心　七六—七七
第二十六　井上玄徹　七九—七八
第二十七　井上玄徹（木像）　八〇—八一
第二十八　今大路玄淵　八三—八二
第二十九　嵐山甫安　八四—八五
第三十　杉山和一　八七—八六

第三十一　本木良意　八八—八九
第三十二　鳩野宗巴（初代）　八九—九〇
第三十三　松下見林　九〇—九一
第三十四　楢林鎮山　九一—九五
第三十五　寺井玄洞　九六—九七
第三十六　吉田自庵　九八—九九
第三十七　貝原益軒　一〇〇—一〇一
第三十八　稲生若水　一〇一—一〇二
第三十九　越智平庵　一〇三—一〇四
第四十　山脇玄脩　一〇五—一〇六
第四十一　後藤艮山　一〇六—一〇七
第四十二　香月牛山　一一〇—一一一
第四十三　松岡恕庵　一一二—一一三
第四十四　香川修庵　一一四—一一五
第四十五　野呂元丈　一一六—一一七

第四十六　奥村良竹　一一八—一一九
第四十七　山脇東洋　一二〇—一二一
第四十八　井上稚川　一二二—一二三
第四十九　御園中渠　一二四—一二五
第五十　青木昆陽　一二六—一二七
第五十一　吉益東洞　一二八—一二九
第五十二　賀川玄悦　一三〇—一三一
第五十三　賀川玄廸　一三二—一三三
第五十四　平賀源内　一三四—一三五
第五十五　瀬丘長圭　一三六—一三七
第五十六　山科厚安　一三八—一三九
第五十七　憲美三白　一四〇—一四一
第五十八　建部清庵　一四二—一四三
第五十九　松平君山　一四四—一四五
第六十　山脇東門　一四六—一四七

第六十一　淺井岡南　一九六―一九七
第六十二　三浦梅園　一九八―一九九
第六十三　田中張海　一九九―二〇〇
第六十四　賀川有齋　二〇〇―二〇一
第六十五　本木仁太夫　二〇一―二〇二
第六十六　楢林鎮山　二〇二―二〇三
第六十七　宇田川玄隨　二〇三―二〇四
第六十八　吉雄耕牛　二〇四―二〇五
第六十九　本居宣長　二〇五―二〇六
第七十　前野蘭化　二〇六―二〇七
第七十一　和田東郭　二〇七―二〇八
第七十二　柚木太淳　二〇八―二〇九
第七十三　橘元周　二〇九―二一〇
第七十四　畑黄山　二一〇―二一一
第七十五　橘南谿（宮川春暉）　二一一―二一二

第七十六　小石元俊　二一二―二一三
第七十七　小野蘭山　二一三―二一四
第七十八　緒方春朔　二一四―二一五
第七十九　多紀安長　二一五―二一六
第八十　海上隨鷗　二一六―二一七
第八十一　竹内新八　二一七―二一八
第八十二　山本封山　二一八―二一九
第八十三　吉益南涯　二一九―二二〇
第八十四　村井椿壽　二二〇―二二一
第八十五　池田瑞仙　二二一―二二二
第八十六　杉田玄白　二二二―二二三
第八十七　杉田玄白（木像）　二二三―二二四
第八十八　三輪東朔　二二四―二二五
第八十九　原南陽（木像）　二二五―二二六
第九十　木蘭汀　二二六―二二七

第九十一　片倉鶴陵　二九八—二九九
第九十二　片倉鶴陵（木像）　三〇—三〇
第九十三　大槻玄澤　三一—三一
第九十四　多紀柳浣　三二—三二
第九十五　華岡鹿城　三三—三三
第九十六　川越衡山　三四—三四
第九十七　伊澤信怙　三五—三五
第九十八　各務文獻　三六—三六
第九十九　畑柳泰　三七—三七
第百一　中神琴溪　三八—三八
第百二　賀川蘭齋　三九—三九
第百三　宇田川榕齋　三九—三九
第百四　山脇東海　三九—三九
第百五　奥劣齋　三九—三九

第百六　華岡青洲（別圖）　二九九—二九九
第百七　橋本宗吉　二九九—二九九
第百八　竹中南峰　二九九—二九九
第百九　最上德内　二九九—二九九
第百十　江馬蘭齋　二九九—二九九
第百十一　百々漢陰　二九九—二九九
第百十二　山脇東圃　二九九—二九九
第百十三　岩崎灌園　二九九—二九九
第百十四　小森桃塢　二九九—二九九
第百十五　平田篤胤　二九九—二九九
第百十六　宇田川榕庵　二九九—二九九
第百十七　高良齋　二九九—二九九
第百十八　小川汶庵　二九九—二九九
第百十九　岡節齋　二九九—二九九
第百二十　宇津木昆臺　二九九—二九九

第百二十一　宇津木昆臺(木像)　二六八—二六九
第百二十二　小石元瑞　二七一—二七四
第百二十三　齋藤方策　二七五—二七六
第百二十四　高野長英　二七七—二七八
第百二十五　高野長英(別圖)　二七九—二七九
第百二十六　中川修亭　二八〇—二八一
第百二十七　石坂憲國　二八二—二八三
第百二十八　觀足万里　二八四—二八五
第百二十九　河津省庵　二八六—二八七
第百三十　楢林宗建　二八八—二八九
第百三十一　堀内忠亮　二九〇—二九一
第百三十二　土生玄碩　二九二—二九三
第百三十三　新宮凉庭　二九四—二九五
第百三十四　新宮凉庭(木像)　二九六—二九七
第百三十五　原老柳　二九八—二九九

第百三十六　永原三折　二九九—三〇〇
第百三十七　多紀元堅　三〇一—三〇二
第百三十八　吉益北洲　三〇三—三〇四
第百三十九　賀來佐一郎　三〇五—三〇六
第百四十　杉田梅里　三〇七—三〇八
第百四十一　難波立愿　三〇九—三一〇
第百四十二　山本亡羊　三一一—三一二
第百四十三　館玄龍　三一三—三一四
第百四十四　緒方洪庵　三一五—三一六
第百四十五　大槻俊齋　三一七—三一八
第百四十六　箕作阮甫　三一九—三二〇
第百四十七　鳥野宗巴(七代)　三二一—三二二
第百四十八　賀川蘭臺　三二三—三二四
第百四十九　花野井有年　三二五—三二六
第百五十　飯沼慾齋　三二七—三二八

第百五十一　三宅艮齋　三六―三七
第百五十二　桑田立齋　三八―三九
第百五十三　日高凉臺　三九―三九
第百五十四　鹽田順庵　三九―三九
第百五十五　廣瀨元恭　三九―三九
第百五十六　伊東玄扑　三九―三八
第百五十七　川本幸民　三八―三八
第百五十八　本間棗軒　三八―三八
第百五十九　竹内玄同　三八―三八
第百六十　森立之　三八―三八
第百六十一　櫻田直助　三八―三八
第百六十二　今村了庵　三八―三八
第百六十三　林洞海　三八―三八
第百六十四　淺田宗伯　三八―三八
第百六十五　小島尙質　三八―三八

索引

醫家先哲肖像集

一

東京帝國大學醫學部圖書之印

西洋の書肆の店頭に、醫家の肖像畫或は手術、或は診察、或は研究室の光景を描いた板畫などを飾いてゐるなどは日本に見られない學界の小景である。歸朝の折、此等の繪畫を求め設けば、好箇の記念にもなり、又土產にもなる。ミュンヘン醫事週報が比較的近代の大家肖像を附錄として讀者に頒つてゐるなどは、學者の面影を偲ぶ上に、良い資料となるものである。

西洋でも、日本でも學者は多く重厚の態度を持してゐる。隨つて世間も亦た篤く、これを遇するものであるが、唯泰西に於ては、社會にユーモアの氣分が富んで居るから、學者を尊重する一方、巧みに學者の性癖を捉へて、これを寫し、能く天眞爛漫たる半面を世に紹介する。しかも、それが決して學者に對する禮を缺くに至らないのである。我國に於ては、この點とかく生一本の調子に陷り易く、學者を見るに、動もすれば

超世間的態度となるの傾向がある。それでは學者氣質の半面觀を描き得るが、未だ全貌に渡らないの憾があつて、如何にも窮屈である。

學者の傳記、學術の歷史に關する著書は、泰西には可なり多分に在る、我が國に於ても、高僧武將偉人學者名匠の傳記逸話を纏めた書籍は多い。今さし當り、我が記憶を辿つても、日本高僧傳、元享釋書、近世偉人傳、常山紀談、近世叢語、近世畸人傳等が、すぐ頭に浮ぶ。又肖像を圖錄したものには千德圖錄、先哲像傳、前賢故實等を數へ上げることが出來る。

我が國に於ては、古くから世代の壽像を作らしめて、これを子孫後昆に傳ふるの風がある。そしてこれは必ずしも武家、寺家などに限らず、弘く行はれた風がある。孫に大名、重臣、高僧、學者、畫家等の肖像畫は、家門の緣故から、又畫家の關係から、割合に世間に知られてゐるものが多い。而して、能くその子孫に傳承せられ、或は由緣ある寺院等に保管されてゐるものは、何かの機會に於て展覽せられ、觸目することも出來るが、その畫像を纏めた肖像集の如きは、或一部の外、概して公刊せられてゐないやうでありそれも眞影を集めたものは乏しいやうである。

二

先哲の傳記を繙き、或は名家の遺墨を觀るときは、その人の風格、その人の雅趣、その人の氣品を懷ひ、愛慕尊崇の念そゞろに禁じ難きを覺えるのである。しかし、これだけでは、まだその人物の全貌を窺知するに足りないのを遺憾とする。しかも、若しそこに、その人物の影像があつて、親しく之れに對ふことゝなれば、また格別の感情が新たに湧き來つて、眞にその人に接するが如き思ひあらしめるのである。而して、嘗てその人の行狀記から想像した面影は、寫眞によれば案外の風姿であつたことに驚くこともあり、或は輕妙洒脫の筆蹟から考へた先哲は、意はぬ氣骨稜々たる容貌の持主たりしに面喰ふこともある。おもふに、行狀記、筆蹟などから、その人の風丰を偲ぶは、恰も烟雨の懸つた山容を見るが如く、單簡一たび晴れて、山景の眞を現はせば、峯嶺更に別樣の觀あつて、面目こゝに全きが如くである。要するに、肖像なき傳記は、未だ眞にその人の人格風姿の全貌を傳へざる低調の非難を免れがたいのである。

我が醫學の發達の歷史を、回溯的に明治初代の洋醫飜譯時代から、江戸幕府の末期に於ける蘭醫流行、蘭藥の輸入、同中期頃の漢醫學の爛熟期、それより江戸初期の南蠻醫藥の片鱗に觸れた洋醫搖籃時代、慶長・天正時代の漢醫學の勃興期、足利・鎌倉時代の民間藥療法、藤原・平安時代に於ける呪術治療、奈良期に於ける僧醫時代と回顧すれば、その間に幾多の傑出したる醫星が燦然としてその座位を占むるを看取するのである、云ふ迄もなく、此等先哲は何れも時代の先覺者である。そして、その修習したる學說と經驗したる博大の知識を以て、醫學の進歩に一歩づつその足跡を留めて、次代への指針を遺し、我が醫學の誇として當時の杏林に陸離たる光彩を放つたのである。かくて時代を劃したる學術も、次代には更に精微となり、周密となり、盡くることなき我が醫學の進歩は、源淵たる支那醫學よりも遙に發達進展して、見るべき業蹟の顯揚せることは、實に著大なるものである。又更に蘭醫學を咀嚼消化して、漢蘭折衷學が新たに唱へらるゝに至るなど、我が先哲の底知れぬ學問の深さと苦心の大いさとは、まことに痛切に感ぜられるのである。さうして、この力はやがて明治の洋醫勃興に於ける原動力となつたのである。今日我が醫學が泰西諸國と比肩して、毫も學術的進歩に劣らざるものは、畢竟先哲の學問が捨石となり、その苦心が遺傳したからである。

玆にそれ等を思ひ廻らせば、先哲の鴻大なる學恩に對して、限りなき敬慕の情に堪へ難いのである、

四

我が醫家先哲の傳記書は必ずしも少くはない。指を屈すれば、山本善美の海內醫林傳、宇津木昆臺の日本醫譜、畑惟龍の皇國醫林傳、賀島近信の皇朝醫史、山科元幹の本朝醫蹟、萬年純の皇國醫系、安藝道恕の歷世尙藥略傳、淺田宗伯の皇朝名醫傳、松尾耕三の近世名醫傳などが數へられるのであるが、更に寛永醫家系圖傳、寛政重修諸家醫譜の如き官撰のものをも加へ得るのである。而して、明治大正の時代に至りては、醫史學の研究頓みに、その歩を進め、鑽仞の學人相集り會するの氣運益盛なると共に、先哲の傳歷所關の著述愈々多からんとするは、聖代學界の爲めに慶賀に堪へざる所である。かくて刀圭家傳記の研究は隆盛を致してゐるが、遺憾に思はれるのは、此等醫家先哲の肖像を集めて劍閣に附したものが未だ曾て見當らない事である。自分は嘗に松平樂翁公が、谷文晁に命じて描かしめた知友畫像集を、東京帝室博物館に覽て、心私かに公の友情篤き遺德を偲びつゝ、その書を繙き、當代知名の先覺の風姿に對して、

飽かぬ情懷に耽つたことがある。

先にも述べた如く、我が國には古くから、畫像を家に傳へる慣はせがあり、醫家に於ても同じく壽像を作つたものが相當に多いのであつた。醫家は一つには社會的位置が比較的良かつた爲め、又他には生活も豐かであつたことから、自然肖像を描かしめるにも都合がよかつた譯である、乃ち醫家にありては、隨分世代に亙つて描かしめた肖像が傳はつてゐるのである。尤も師弟間の情誼から、弟子は師の像を携へて家に歸り、その家に傳へるといふやうなこともあるから、醫を業とするものゝ多いだけ、他に比すれば醫伯の像は世間に流布したものも稍〻多いのであつた。然し「石碑不及口碑存」底の高踏主義から、畫像などに無頓著であつた名家もある例へば、蘭醫の大家桂川甫筑の一家、又は奈須玄虫、坪井誠軒などが畫像を遺さなかつたことは周く知られてゐる所である。さりながら、後世からいへば、醫史考證の上から、又尊崇の情を滿たす上から、先哲の風姿に接することは望ましい事であり又大切なことである。隨つて到底それに接し得ざるものがあれば、學界にとつての憾事の極みである。

五

今日醫家先哲の畫像の遺されてゐる數は、しかし餘り多くはない。嘗て、富士川游先生は中外醫事新報に名醫傳を執筆せられたことがあるが、それには先生が遺族からの寄贈による寫眞を添へられてゐる。そして、更に又、同先生が一々遺族を訪ねられて、家藏の肖照から覆製せられた畫幅もあるが、それ等は決して多數ではないのである。

富士川先生の蒐集當時、卽ち明治の中頃には、醫門舊家が相當に門戸を張つて家業を繼いでゐたから、家傳の肖像も見ることが出來、又傳寫も出來た。既に明治維新による改革と共に沒落した醫家も相當に在つて、それ等の家藏品は夙に失はれて居つた。然し、時と共に凋落し來つた家も、尙明治中頃には微かながらも存したのであつたが、今日に至りては、その沒落一段激しく、富士川先生が當時訪れられた舊家も、最早や跡かたさへ殘らないのを知つて、自分は少からぬ失望を抱かしめられた。またよし訪ね當て得た處で、期待した資料は絕無となり、豫て聞き及んでゐる畫像すら不明になつてゐるのも多いのであつた。殊に大正十二年九月に於ける東京大震火災の厄は、幾多醫學界の舊家を燒いた。栗本家、喜多村家、杉田家、片倉家、今村家等名門の家は失くなり、家藏の什具は悉く烏有に歸した。このことは、資料に乏しき畫像の益々

少くなつた大きな原因である。杉田玄白の畫像・木像・片岡鶴陵の木像、岡勁齋等の畫像は余の記憶に依るも、この災厄を以て失はれたものである。

醫家に生れた自分は、父が祖父の月忌に、畫像を展べて、自ら像前に酒瓶を供へ、少年の自分にも共に禮拜せしめられたことを覺えてゐる。そして、その時は何時も、祖父の師に當る人の像や、又我が家が華岡流の外科を汲んで居た關係から、華岡青洲の肖像をも併せて床頭に列ね懸けてあつたのである。この家例の裡に育つた爲か、自分は何となく畫像に對して、こよなき尊重愛惜の情念を持つことゝなり、次第に先哲の肖像を蒐集する機緣を釀成したのである。大正の大火災に遭つた自分は、蒐集品を悉く失つたが、更にその後再び着手してから、いつとなく今日までに壹百六十餘種の畫像を藏するに至つた。之を纏めて刊行したものが、この醫家先哲肖像集の一編である。

大正の火災に遭つた自分の辛い經驗から、失はれ易い先哲の肖像は早く纏めて置かねばならぬと思ひ立ちながら、荏苒歲月が徒らに經過するのみで、遂に今日に及んだのであつた。もとより自分の蒐集は、決して滿足すべきものでなく、尙集成と稱するには餘地が甚だ多いからである。即ち鷹取秀次・中條帶刀・栗崎道喜・古林見宜・味岡

三伯・岡本一抱・名古屋玄醫・黒川道祐・後藤梅庵・永富獨嘯・北山友松・宇少翁・中西淡齋・望月鹿門・山田圖南・三宅意安・戶田旭山・丹羽正伯・河口信任・荻野元凱・目黒道琢・田村元雄・太田長元・服部玄廣・栗本瑞見・小川笙船・衣關順庵・蛭田克明・奈須玄盅等主擧すべきものさへ百餘を算へるのである。しかし、それ等は到底容易に蒐め得るものではない、偶々その人に擬すべき肖像を發見することもあるが、それが果して信ずべきものかの眞否の鑑識は洵に覺束ないのである、又名門の遺裔にして、今所在の不明なるため訪索の便を獲ないものも多い。本朝醫道から觀て大切な先哲の肖像若干を收め得ざることは恰も齒の拔けたやうなものであるが、さはれ、よくこれを補うて完きを得る日は期し難いのである。仍りて姑くこの醫家先哲肖像集一編を刊し、若し、他日機あれば拾遺の編を出すを可なりとし、一先づ玆にこれを上版することにしたのである。

六

泰西に於ても、醫家先哲の肖像は多く遺つて居り、傳記書も相等に出版されてゐる。泰西の畫像は、近世に至つては餘り象徵的の裝飾を加へないが、中世紀頃には寓喩を加へた畫像の多くを觀たのである、そしてそれがその時代の特色であつた。即ちそ

の先哲を飾るべく、その先哲の履歴に因んだ表象を以て畫像の周邊を裝ふのである。故に若しその寓喩の意味表象の事實を知るときは、その先哲の面目を一層躍如たらしめるものもあるのである。絢爛にして豪華なるルネサンス藝術期に至りては、畫像は人間的現實よりは寓喩の象現による聯想の觀念に重きを置くの傾向を長じ、主體よりも附屬物に重要性を有せしむるものがあつて、その場合主客顚倒の譏を免れないのであつた。而してまた、寓喩的の象現は、時に畫像の人物を偶像化せしめる嫌ひを生じたのであつた。

かゝる寓喩の象現とは、例へば病者を看護する意味から鷄を以て臨床家を現はし、又昔の强心藥であつたから、鈴蘭を以て本草を意味せしめ、龍が疫病を祓ふの意を寓し、蝶が世を去る靈魂を表象し、蛇が「蛇の如く賢かれ」の語の如く賢明を意味するの類である。又醫神アスクレピオスの象徴動物であることから、轉じて醫學の象現となり、又モーゼがイスラエルの民を蛇禍から救ひ出した古典によつて禍災を表示するが如き色々の場合もある。また、鳩は病院の標章であり、鶴は保健の表示であつた。此等の寓喩を理解して中世期の畫像に對する時は、一段の親しみを持つことが出來るのであるが、然し、近世に至りては、その反動思想から、畫像は單一化して描かるゝこ

とになつた。それは他の藝術と同樣である。

七

我が國に存する畫像には、時代を劃すべき表示的描法はなかつた。常に全幅唯その人を飛躍せしむるの餘裕を殘す手法で、東洋藝術の純味を持つてゐるから、附屬的の裝飾は殆んど無いのであつた。若しまた裝飾のものがあつた處で、それは畫像の卽興的の手法であり、餘興的の仕草であり、畫面の釣合から施された配置に過ぎないから、泰西の畫に示すが如き象現の意味は無いのである。

然しながら、我が畫像には讃詞の題せられたものが多い。これは泰西畫に見る銘記とは全く意味の異つたもので、之れも東洋藝術に副ふ一異彩である。

今試みに、醫家の自署した讃詞の二三を拾つて見よう。

曲直瀨翠竹院道三は、元龜・天正の頃、輩穀の下に在つて、李・朱の醫學を正統に傳へ、これを天下に弘めて、我が醫學中興の祖とせられた人である。そして、その方術には雲上の御歸依深く、典藥頭の榮を荷ふに至つた。しかのみならず、彼はまた豐公始め幾多の武將から一世の崇仰を受けたのであつた。その道三が七十歳の時に畫かしめ

た像に題したのは、

一个門下生、幼而學、自少至壯侍子局傍、以玄朔爲諱、以東井爲字也、功磋以授、普救之德、琢磨而附講讀之業、故今也欲使啓迪後人、而令營廼屋、竊以不遠千里、而負笈索師、縞素登席、香輪茅蓋、而告病受藥、貴賤就門、是卽有朋自遠方來、亦不樂乎、德不孤、心有隣之謂也、莫倦莫辭、時因丹青、名工狩野貞延、圖子頑像、以責俗偈、不得默止、

說服談治、術日新、生涯、手卷跋風塵、姪孫傳、施求奇効、程授靈方、彫動唇、

天正第五丁丑年、臘月　一溪叟道三、書于翠竹庵中、

といふ讃詞であつた。道三既に大に名を成したるも、尙醫道を守り、仁を施して驕らず、讀書工夫、奇效を求あて倦まざるものがあつた。この氣概は天下の名醫たる品位の存する所である。而して、一たび是を語すれば、無限の教訓、吾人の怠惰を戒むるに足るのである。

曲直瀨玄朔は道三の孫であつた、そして、祖父の遺業を繼けて、益その道に精進し、子弟門人、その麾下に來るもの無慮五百に達し、一家醫流の旺盛當代の譽とせられた。彼は、自ら肖像に

辛勤醫業救天傷、意在衆人自己忘、老去得頤神妙術、安心是藥更無方。

嫡孫典藥頭玄鎮、命畫工模寫、子悋乞、求賛語、不克辭、謹以汚楮上云、爾、

寛永八辛未歲、孟夏吉辰

東井叟玄朔　八十三歳

と題した。

玄朔年若きとき豐臣秀次の事に座し、常陸に流適し、辛勤すること數年、後ち京都に還り、道三の教を守りて倦まず、その間に多くの著述を遺した。後ち江戸幕府に召されて寵任甚しく、姓を今大路と改め、世代醫官の筆頭となり、大名格を以て遇せらるゝに至つた。玄朔毫も驕らず益醫道に精進し、妙術を體驗し、遂に老去得頤神妙安心是藥更無方と喝破せし所、到底庸醫の想ひも及ばざる心境であつて、思趣清爽、腋下に凉風の颯々たるを覺える。

越智平庵は名門の出である。彼の祖父正淋が家には數千卷の醫書が藏せられた。養安院藏本として世に喧傳せられるのは是れである。しかし、正庵は徒らに蠹魚の間に空理を求めんよりは、早く出でて救療の術を修むるを良しとし、八王子在にあつてその道に努めた、そして後ちに法印となつた。

傳眞是非異寫照何、所照只覺添眼華、捲發他一咲、

はその肖照の題詩である。

平庵は淡白な性質で、得る所の金帛は手に隨ひて散じ盡し、毫もこれを惜まないのであつた。題詩も乃ち一味の禪意を帶び幹達高潤の性格を表し、脈々たる生氣を發してゐる。

貝原益軒は、自ら書して曰く、

平生心曲有誰知常畏天威欲勿欺存領沒寧歸不克朝聞夕死豈不悲幼求斯道在孤憤德業無成夙志乖八十五年爲易事讀書獨樂是生涯。

と、益軒先生にして始めて謂ひ得べき所である。その意よく徹し、穢心忽ち消盡し邪思を淨化す、眞に教訓の逸品であり、朗々誦すべきものである。

吉益東洞は一世の豪傑である。豪邁の氣宇、その篤く信ずる所に向つて主張を抂げず、三十餘年の努力、遂に醫界をして、その風に靡かしむるに至つた。彼は門人の乞ふがまゝにその照影に題した。

死生有命救疾之慎萬病一毒毒去無疾。

まことに自說を述べて餘蘊なきもの、簡素瀟洒、よく東洞の風格を躍然たらしめてゐる。

田中張海は吉益東洞の高足である。東洞が萬病一毒の學說を吐いてから、學者の論議は沸いて盡きざるものがあつた。蓋し德川時代漢醫學の爛熟期を之れによつて一劃したのである。張海は吉益派の驍將として反東洞派を駁し、論旨を徹底せずんば已まなかつた英委は、今日醫界の論爭と、その趣を同じうしてゐる。此鬪爭に燃えつゝ張海が自ら肖像に題した。

旅館窮陰燈影寒疾醫方術樂甄算放曠奇士泣途極反復人情奈路難驚北幾乎期伯顏豐城何日遇雷看壯心未去皆堪笑箕踞空歌伏櫪歎。

年年爲客灌三津況復今春逼誕辰雪讓衰容雙白鬢梅呑瘦骨半紅脣齡同伯玉不能化志學越人難得眞小子誤比千載樹顯將貞節護斯身。

の長詩を看れば、その志節の剛强なる、その識見の卓絕なる、想ふに餘りありといふべきである。彼が鬱然として一世の冠冕たりしもの、また所以なきではない。

村井椿壽は、吉益東洞門四天王の一人とも稱すべき學者である。彼は業を修めて熊本に歸り、父見朴に繼いで、その帷を垂れ、東洞の學派を汲んで毫も他に讓らず、衆醫を屏息せしめて、九州を風靡し、吉益派の探題職と稱すべきものであつた。椿壽は、しかし一面では音曲の愛好者であつた。彼は別に琴山と號し、襟懷清逸そゞろに雅趣

を弄んだのである。晩年脫俗の境に入つた彼は、自ら肖像に

狂貌拙形似焉似焉天下後世笑焉咲焉

の語を題した。言論堂々筆戰鋭く敵の心膽を寒からしめた當年の椿壽と同人かと疑はしめる。彼れと張海とを比すれば、實に面白い對象である。

百々漢陰は豪邁耿介の士である。彼は我が醫方の漢土醫學の糟粕に過ぎず、未だ純然たる本朝醫道の本體を見ざるを慨し、又常に醫道の頹委を戒めた。

畫虎模龍終不成志高才劣歲空徂同思六十年來跡紙故堆中一白魚
形軀委土作塵虛神向冥々翔有餘佛與閻王非我友烟霞佳處別謀居
三句絕筆命如綫且暮定去歸九泉要認余吟魂所在紙園長樂梨微邊

は肖像の自題である。佛與閻王非我友の詞、結句と併せ見て、その風懷を想ふべきである。

橘元周は江戸幕府の醫官、世々法印に叙せられた名門の出である。彼は頗る溫厚篤實の人であつた。その自ら肖像に題して

克己復禮近取我門非醫勿視非醫勿謂

橘　元周題

といひしものは、蓋し醫家の格言として上乘の所作、日常之を守らば誤なしとすべきである。

華岡青洲は佛心鬼手の化身である。一たび刀を取つて腕を揮へば病魔を斷ずる間春妙術の技は、我が外科學の誇である。彼の發明したる全身麻醉藥は、世界に向つて今猶萬丈の氣焰を吐き得るのである。

竹屋蕭然鳥雀喧風光自適臥窓村唯思起死回生術何望輕裘肥馬門

は彼が肖像の題詩であつた。

青洲は紀州平山の僻村に門戸を構へたが、百里の途を遠しとせず、診を求め療を乞ふもの常に門戸に滿ち、又華岡流の外科術を修得せんと欲して、笈を負ひ來つた醫生は、其數幾千たるを知らない程であつた。華岡は卽ち正に日本外科學の本山であつたのである。彼れ青洲が門外より一歩も出でず只管發明したる外科手術に精進して止まなかつた學者的良心には、今日尙吾人の襟を正さしむるものがある。想ふに此題詩を三唱し、自ら省みて、我が行徑を恥ぢざるもの果して幾人かある。利達榮華は何人も欲する所のもの、轉結の兩句、眞に凡俗の針砭である。

本間玄調は、華岡青洲の門人中傑出した優物である。自ら肖像に題して曰く

吾所主張亦活物窮理尚軒岐而去必盡信其書惡糟而未必盡排其術博採諸五大洲中日試月驗一次歸于活人即是神州之醫道耳。

と。玄調は實驗科學者であり、自說の主張者でもあつたが、又愛國者でもあつた。一世の大家たりし彼の學識思想は、尙今日青年學者の眷々服膺すべきものを含蓄することを感ず。一にも二にも泰西の亞流を以て甘んずる拜歐學者には、胸に三尺の秋水を擬せらるゝの趣があるであらう。識者此人を稱するに單なる外科醫者を以てせざるは、正に故ありといふべきである。その識見、その情熱、永く後世に範を垂れるものと仰がねばならない。

新宮凉庭は、名儒齋藤拙堂から「醫而儒、山人而士丈夫」と評せられたが、この評は至當である。彼は決して一定の規矩を以て律することの出來ない人物であつた。彼の家業は大に行はれ、彼の家益々殷富となり、蓄財は數萬に至つた。しかし、彼は自ら奉ずること儉素で、繭席敝るゝとも年を經て換へないといふ風であつた。しかも時偶々連年の凶作に遭ひ、四民困弊するを見て、凉庭は救助の策を諸侯に獻じ、又私財を拋つて國用を援けたのであつた。彼はまた順正書院を東山南禪寺畔に建てゝ四方志學の徒を迎へた。彼が肖像に題した

鳩居恰似坐低簷天出奇才忌大功醫國忠言嫌苦烈呈文氣脈欠流通芙蓉不及松柯勁蚯蚓却哈蛛網工痴也頑乎任相笑散人只合老山中

の含蓄ある詩趣は、惻々として人の肺腑を衝くの概があるものと謂はねばならない。

鬼國山人の面目躍然たるを見るのである。

箕作阮甫は、西醫學者として江戸幕府末期に異彩を放つた一人である。自らその像に題書して曰く

病骸不復惹閑愁絕望功名心自休憐殺雙肱似蟹腕幸欣兩眼弊蟲頭雲烟低作蒼蒼雨霜露結成天地秋尙友古人無日夕泰西之國每相求

と。箕作家はその後多くの洋學に通じた鉅材を出した。阮甫の志成れりといふべきである。一詩、學者の氣格崇高なるを感じて止まないのである。

以上僅かに自ら題したものを擧げて見たが、各自の面目それぞれ躍々として詞表に溢れ、吟誦するに從つて、極りない高風淸趣を覺えるのである。

八

更にまた他の畫像に贊語を題せんとするは、一層難事である。贊者よく、彼の生涯

に熟通し、彼の人物を洞察し、彼の手腕を精知したるものに非ざれば、彼の眞面目の一端にだに觸れ得るものではない。唯その人を得る時は、能く生氣を傳へ面目を活す絕妙の趣があるのである。

奈須玄盧は一世の曲物であつた。江戸幕府醫官多紀家の權勢にも屈せない高踏脫俗の學者であつた。彼の祖は初代曲直瀨道三に就いて醫學を修めた、道三は足利末代の醫田代三喜より李・朱の醫學を受けた學者であつた。玄盧は夙にその三喜の學德に傾倒して居つたのである。彼は一日野州古河に遊んで三喜の木像を一向寺に拜し、之を寫して

拯濟短折齊之壽城儼然遺像永仰醫德

と贊した。三喜の樂方は、弘く關東に傳へられてゐる。醫人にして祀られたものは僧鑑眞と三喜のみであらう。三喜の學德知るべきである。

井上靈叟は玄朔の門人である。彼は幕府に召されて法印に叙せられ、交泰院と稱した。その學、その技、當時彼に比すべきものなかつたのである。師玄朔は乃ち彼の像に

醫業辛酸八十年、骨清神爽說天全、陰功那直滿千數、却去蓬萊作地仙。

右

前典藥頭道三先生、題我小影之辭也、褒揚甚賞、小子玄盧、屢請予書、此因弗揣老醜、漫塗抹與之、於乎汝不視我形貌、而視我精神、不學我軌儀、而學先生之活法、則庶乎獲十全矣、

天和壬戌之歲冬之孟

九々老翁呵手書于交泰院中

と贊した。靈叟の風格を傳へて、正に餘りなきものである、この師ありて、この弟子ありと謂ふべきである。

鳩野宗巴は、一代の風雲兒であつた。彼は南蠻の密航船に乘じ、外國に赴きて醫學を修め、後飄然として歸國し、九州を漂遊する間に細川侯に召され、外科醫の腕を揮ふに至つた。長仙濤師は、彼の肖像に

醫得覺神農道緣深、參宗相顏雖滅去、心月照骨容、

元祿十丁丑年閏二月八日之早朝、端然而逝、壽世五十七歲

覺峰道桑老居士

大雲山僧長仙濤謹讚

と贊した。佛僧の讚としては或は佳ならんも、一代の風雲兒に對する著語としては

模糊たる雨山を見るが如く、物足りない感がないでもない。

東洞は醫傑である門人村井椿壽はその肖像に

憶昔南陽子哀憐濟蒼生洋洋遙嘉言舊章誰復賡離照若天經成緯自光瑩亦似警軍帥凜凜列霆旌相敵欲決勝龍劍匣中鳴執之威姻魑持之計術平哀哉千餘載天下失權衡曉我　日東邦破像出人英　東洞夫子賢弘道守其貞厥姑生中國翹頸入帝京游洛思波洽身老在　王城玉帛不招俊獨主四方盟覓國生玉質麗水出金精睥睨千歲上目瞪一堂堂驅逐和緩儔欣慕扁張名經方遠不作竊比我老彭雖有靈方貴何必問滄瀛憑矣炎炎世恬憊無所營唯存鍼與艾足以養眞情靈鼎久不馨斯事遂紛更索隱且行怪後人各力爭人何不鼎食覺梅失和美偉哉經方策玉振與金聲一劈金匱訣獨手得奇扁皎如懸玉鏡長亘萬古明吾生西鄙邑私淑存寸誠昔曾踏東海凄然拜墳塋乃是醫門傑匡爲王者氓其人與骨朽揩淚盈盈吾儕尙方士懷古寸心傾

壬寅暮春於東都龍邸

東肥邨井炳書時年七十

と讚した。時に椿壽は高齢七十歳であつた。自像に飄逸の語を題した高踏的の風格の持主も、師の像には端嚴壯重、恩情の切々身に逼るものあるを寄題し、人をして襟を正しうせしめるのである。東洞の學說はもとより炳焉たるものであつたが、しかし未だ圓熟せざりし所もあつた。しかも、その門下に俊髦輩出し、よく師說を紹述して世の疑惑を解き、東洞の學名、かくて顯揚せらるゝに至つた。

賀川玄悅の肖像に、皆川淇園は題書して

民之將生時或折劇翁善察曲盡化兆眉肆瑕厥理救之危悉設術著論述法遺則方策之傳天地罔極民之賴全何唯兆億唱嘻大矣翁之功德

と贊稱した。

我が國、支那醫學を傳へてから、流通既に久しいのであつたが、その學ぶ所多くは漢土醫方の糟粕に過ぎないものであつた。享保以來人物輩出し、醫道も大に面目を改めたが、賀川家の產術、華岡流の外科術を除いたならば、果して眞の本朝醫道の面目を發揮したものがあつたであらうか。賀川子玄の功德は、日本醫學のあらん限り忘れることが出來ない。民之賴全何唯兆億嘻大矣翁之功德とは眞を得た讚語である。

佐倉侯堀田正衡は自ら大槪玄澤の肖像を描き、僕の父正敦は、これに

敷島のやまとにはあらぬ蘭の花國の香さへや世にほふらむ

の讚歌を副へて贈つた。そして、時の人々は、いたく之を玄澤の光榮とした。

帆足萬里は、その師三浦梅園の像に

峨有之山高峰軼雲降生先生英傑超羣洞覽天地殫極鬼神條理之說數十萬言闡發幽賾以覺斯民
屢辭聘命抗志守玄道像肅給想見其人

戊辰二月　　帆足萬里　拜讃

と贊した。三浦梅園は醫にして條理學を創した學者で、群儒と復然其見を異にし、儼として一家の說を建てた傑出した學者である。帆足萬里は梅園の學理を承けて更に窮理學を講じ泰西學術に出入した。蓋し梅園に繼いで其學を大成したのである。萬里は梅園を尊崇して措かざりし人、梅園に讃詞を寄するもの、始めて眞人を得たりと謂ふべきである。

伊達宗光は高野長英の像に

學術走西域雙眸略五洲看吾業就後天下仰餘流

高野長英先生作題眞影上

辛卯六月　　南洲書

と贊した。長英のことは今更謂ふまでもない。讃詞の至當なる、何人もまた異議ない所であらう。

九

傳記と肖像とは車の兩輪の如くである。兩者相待ちて、始めてその人物を躍動せしめ、その風格を思慕せしむるに足るのである。我が國に肖像集公刊の少ないのは、國情から來たものであらう。しかも、その肖像畫に依つて、如上本質的の眞意義の外に、時代の委相を知り、又畫風の時潮を知ることも出來るのである。吾人は世間博達の士が種々なる方面に於ける肖像畫集を出されんことを望んで止まない。なほこゝに刊行する肖像集は、專ら眞本から傳へたものであることを附言して置きたい。

また、前述せる如く、醫家先哲の肖像は今後猶努めて搜索しなければならない。若しこれに關して敎へらるゝ所あらば、實に著者の至幸とする所である。冀はくは遺を拾ひ闕を補つて、後篇を出す日の遠からずして來らんことを。編者は足を翹てゝ切にこれを望むものである。

本書の裝畫は結城素明畫伯の彩筆を辱うし、また題簽の文字は岡鹿大人の揮毫を煩はした。尙肖像畫の傳寫については、東京帝室博物館の鷹巢豐治君の筆勞を惜しまれざりし芳志と、寫眞撮影板には菅保男氏の多大の犧牲を拂はれし情誼とを特記

し、併せて共に深甚なる感謝を捧げる。

昭和十一年初夏五月

藤浪剛一

圖像

第一 僧行基

泉州大鳥郡ノ人天智天皇御宇七年ニ生マル年十五出家ス天平二十一年二月二日寂ス年八十二

第二　勸　　勒

百濟ノ人推古帝御宇十年十月我ガ朝ニ貢來シ方術天文地理ノ書ヲ獻ズ、時ニ僧正ニ遷バル。

第三　僧鑒眞

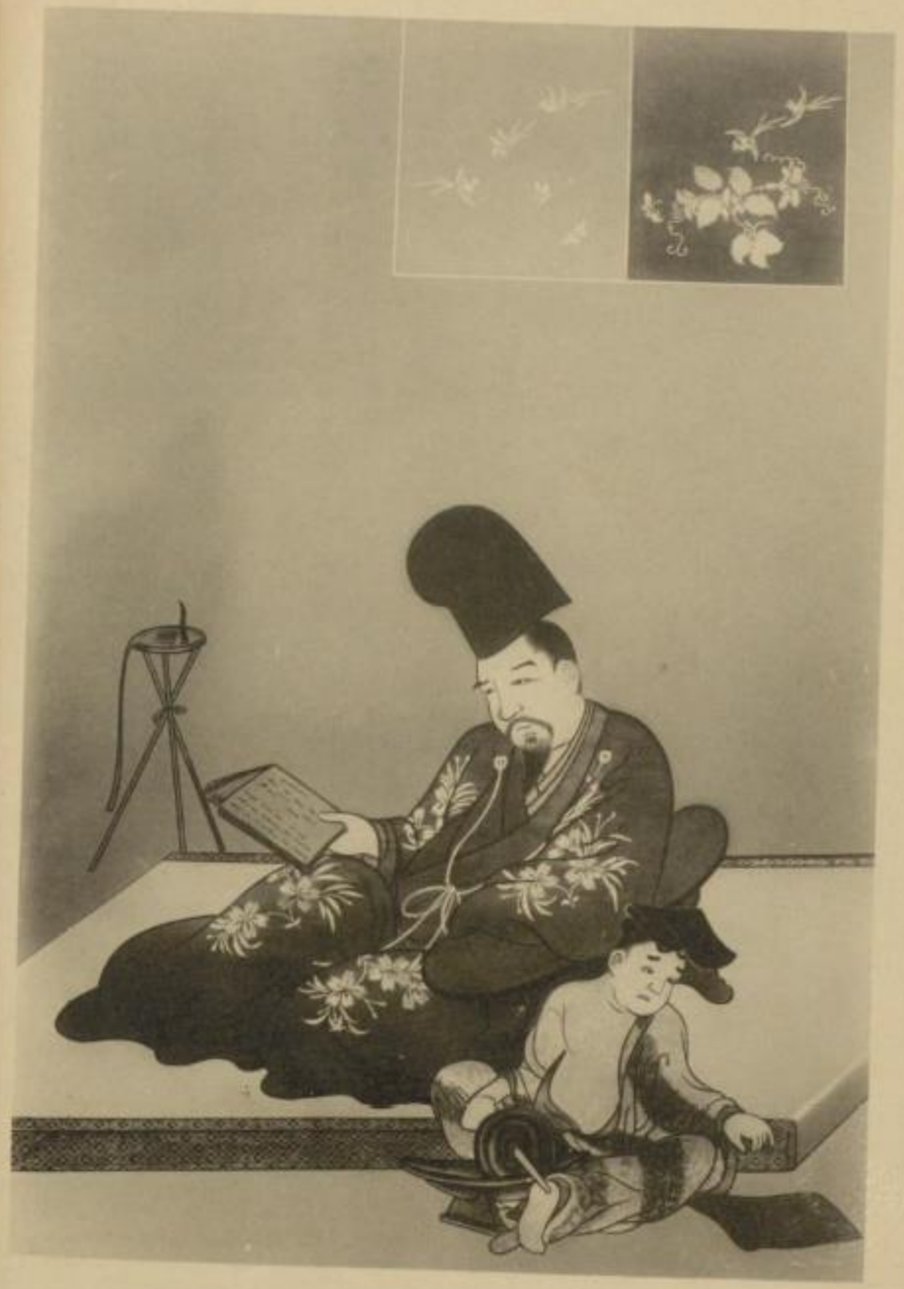
唐ノ揚州江陽縣ノ人。年十四大雲寺ノ僧智滿禪師ニ附シ出家シ、後チ長安實際寺ニ戒ヲ受ケ、天寶元年大明寺ニ在リテ衆徒ノ爲メニ律ヲ講ズ。天平五年我國ノ榮叡、普照等、遣唐使丹墀眞人廣成ニ從ヒ唐ニ留學シ鑒眞ニ從遊ス因テ勸メテ東遊セシム、固ニ辭ヒテ僅ニ身ヲ以テ免レ、後チ再ビ東發スルモ漂流ス、更ニ三次東遊ノ志ヲ得ズ。天平勝寶五年十月、我國使藤原清河大伴胡麻呂ノ船ニ上リ弟子法進等八人之ニ從フ、六年正月二十六日大宰府ニ入リ、二月一日難波ニ到ル、東大寺ヲ館トス。八年五月勅シテ和上ニ拜シ、和上鑒眞禪師ト稱ス、寶宇二年大和上ノ號ヲ賜ヒ僧綱ノ任ヲ停メ新田部親王ノ舊宅ヲ戒院トス、則チ後ノ唐招提寺ナリ、七年五月六日物化ス、年七十七。鑒眞學問該博、志行高潔ニシテ一時ノ師表タリ、聖武天皇以下戒ヲ受クルモノ甚ダ多シ。鑒眞兩目明ヲ失スレドモ、强記人ニ絶ス、其背誦スルヲ以テ雌黃ヲ下ス。天下其書ニ信頼スト云フ。鑒眞又醫藥ノ事ニ通ジ殊ニ本草ニ精シ、本朝ノ諸藥物其眞僞ヲ知ラザルモノ多シ、鑒眞ニ勅シテ眞僞精粗ヲ辨定セシム、鑒眞鼻ヲ以テ之ヲ別チ一モ錯誤スル所ナシ。韓廣是就イテ學ビ藥物ノ眞贋ヲ分辨スルノ術ニ通ズ。後皇太后弗豫、鑒眞藥ヲ獻ジ大ニ效驗アリ、因リテ大僧正ヲ授ケラル。當時我邦已ニ本草ノ學アリ而シテ未ダ四土ノ藥品ニ精フスルコト能ハズ、鑒眞爲メニ之ヲ辨定スルニ及ビテ邦人之ニ倣ヒ斯道益盛ケタリ、世ニ鑒上人藥方ヲ傳フ。又其像ヲ祀ル、俗祀セクル、モノ鑒眞ト田代三喜アルノミ。

第四　丹波康頼

丹波矢田部ノ人、其先ハ漢靈帝ニ出ヅ、靈帝五世ノ孫ヲ阿智王トロフ、應神天皇ノ時歸化ス、天皇之ヲ大和國檜隈郡ニ封ジ以テ使主トス、其子都賀ニ二子山末・志努アリ、志努別ニ家ヲ成シ出デテ丹波國ニ居ル。康頼ハソノ五代ノ孫ナリ、特ニ醫術ニ精造シ、丹波宿禰ノ姓ヲ賜ヒ、累進シテ鍼博士左衛門佐兼丹波介ニ至ル。天元五年醫心方三十卷ヲ撰ス、其書隋唐方書ヲ摭拾シ、稱シテ本邦方書ノ府庫トナス、永觀二年書成リテ奏進ス。醫心方ハ稀世ノ珍ナルノミナラズ、其中ニ支那ニハ既ニ佚亡セル逸書遺典ヲ收メタルヲ以テ、之ニヨリ當時隋唐醫學ノ眞相ヲ窺フベキ絶世ノ鴻寶ナリ。又以テ諸生ヲ課試ス、長德元年四月十九日歿ス、享年八十四。

第五　丹波康頼

史傳　前ニ出ヅ。



第六　丹波雅忠

康頼ノ子宣明ソノ子忠明雅忠ヲ生ム、長元七年典藥頭ニ試シ、右衛門佐ニ補ス、永承中丹波介トナル、任滿チテ還ル。時ニ後冷泉天皇不豫、雅忠ニ命ジテ藥ヲ上ラシム效アリ、丹波權守ニ遷ル。又關白藤原某ノ病ヲ治シテ效アリテ、施藥院使ニ補セラル、專ラ施藥院當道ニ任ズルコトハ雅忠ヨリ始マルト云フ。承暦四年高麗王妃病ム、王書ヲ太宰府ニ送リ厚幣ヲ以テ良醫ヲ求ム、時ノ人雅忠ヲ以テ選ニ擬シタレドモ、朝廷其書辭ノ禮ヲ失フヲ咎メテ之ヲ却ケ、太宰府ヲシテ報牒セシム、內ニ雙魚難達鳳池之月、扁鵲何入鷄林之雲ノ語アリ。之レヨリ世ニ雅忠ヲ日本扁鵲ト稱ス。永保元年、雅忠晉唐方書ニ說イチ救急方ヲ撰修シ醫時抄ヲ著ハス、寛治二年二月年六十八ニシテ歿ス。

第七　出雲廣貞

播津ノ人ナリ、侍醫ニシテ中外記典藥助奥作權掾ヲ兼ヌ、延暦二十四年天皇弗豫、廣貞御藥ヲ奉ジテ效アリ、曾一等ヲ進メラル。大同三年勅ヲ奉ジテ安部眞直ト共ニ大同類聚方一百卷ヲ撰ブ。又別ニ命ヲ蒙リ、唐制ニヨリテ藥升大小ノ量ヲ定ム。廣貞後チニ內藥正ニ擧ゲラレ、宿禰ノ姓ヲ賜ハル。貞觀十二年歿ス。

第八　僧　忍　性

字ハ良觀建保五年大和磯城島ニ生マル。年十六額安寺ニ入リ出家ス、悲田院ヲ修シテ貧人ヲ救ヒ病者ヲ憐ミ、奈良般若坂ニ病舍ヲ建テヽ癩人ヲ收容ス。又飯倉ニ舘ヲ設メ病者ヲ集メ施活ス。北條時宗上人ノ爲ニ桑谷ニ療病舍ヲ作ル。二十年間ソノ救濟憐施スルモノ五萬七千二百五十人ニ及ブ、時ノ人醫王如來ト呼ベリ、嘉元元年七月十二日寂化ス、法齡八十七。

第九　越後丹介

鎌倉時代ノ人不詳馬醫ヲ以テ著ハル。

第十　安藝守定

其祖安藝平氏ニ出ツ因テ氏トス。延文三年足利義詮ノ家紀良子嫁ス、之ヲ擬シテ男ヲ擧グ是ヲ義滿トス、因テ其邑ヲ割テ封ジ、又尚藥ニ奏シ、嘉慶中從四位上ニ敍シ、大醫亮ニ任ゼラル。子孫業ヲ繼グ、宮中産ヲ治スル皆安藝氏ニ屬ス。初メ守定二條家ノ家司タリ、春日神社ニ詣シ通夜祈ル所アリ、時ニ一女子來リ治ヲ求ム、守定爲ニ鍼ヲ施シ藥ヲ與フ、女ノ病頓ニ除カル、喜ンデ恩ヲ謝シ曰フ、妾ハ猿澤ノ龍女ナリ、厚惠ヲ受ケテ報ユル所ナシ、妾ニ靈方アリ以テ贈ラント一卷ヲ遺シテ去ル、治産方ナリ。旁ニ龍鱗三片ヲ留ム、守定之ヲ異トシ、其方ヲ試ミルニ驗アリ、遂ニ女科ノ名ヲ得ル、之ヲ婦人科專門家ノ始トス。ソノ子貞守、亦女科ヲ以テ名アリ。

第十一　田代三喜

田代三喜名ハ導道、字ハ祖範、範翁、支山人、意足軒、江春庵、菩提ノ號アリ、父ハ俊綱ト曰フ、寛正六年四月八日武州川越(又ハ越生)ニ生マル。年十五ニシテ方伎ニ志シ、妙心寺ニ入リ浮屠トナリ、又足利校主利陽ニ就テ醫ヲ學ブ。長享元年明ニ渡リ李東垣朱丹溪ノ術ヲ月湖及ビ恒德ノ孫ニ受ケ、留學十二年、業成テ明應七年三十四歳、醫書ヲ携ヘテ歸朝シ鎌倉江春庵ニ居リ、後下總古河ニ移ル、時ニ永正六年ナリ。三喜ノ名聲益々四方ニ宣揚シ、世古河三喜ト稱ス。天文六年二月十九日歿ス、年七十三(或ハ七十九ト云フ)。古河長谷村一向寺ニ遺像アリシガ、明治年間燒失ス。像祀セラルモノ古來鑑眞ト三喜トアルノミ。

著ス所ニ、捷術大成、印可集、諸藥勝術、當流和極集、直指篇、夜談、義藥種、種名、醫案口訣三喜十卷書アリ。

第十二　曾谷慶祐

牛隅軒関翁ト稱ス、世々瘍科ヲ業トス。慶祐ニ至リ、牛井春園軒ニ從ヒ、大方眼ヲ學ビ内外ノ治ヲ善クス。

第十三　曲直瀬道三

名ハ正盛又正慶トモ云フ字ハ一渓・雲知苦齋又査靜院ト號ス、永正四年九月十八日京都柳原ニ生マル。年十三相國寺ニ入リ喝食トナリ梅皓ト稱ス、年二十二東遊シ下野足利學校ニ入ル、時ニ田代三喜武毛ノ間ニ往來シ、李朱ノ醫法ヲ說ク。先生享祿四年十一月始メテ三喜ト柳津ニ會シ、其說ヲ與聞シ講究十年ニシテ京都ニ還レリ、時ニ天文十四年ナリ。先生學會啓廸院ヲ洛下ニ立テ後進ヲ誘掖ス、其名知ラザルモノナシ。天正二年啓廸集八卷ヲ說稿シ叡覽ニ供ス、天皇大ニ嘉賞シ玉ヒ、羣竹院ノ號ヲ賜ヒ、又份策旌ニ勅ゼテ其書ニ序セシメ玉フ、時人之ヲ榮トス。晩年享德院ト改ム、文祿四年一月四日病ンデ歿ス、年八十九、京都十念寺ニ葬ル。

著ス所ニ全九集授蒙案切方齋證藍墨醫工指南針灸集要須慎類集試驗鈴衛類養生論假字素女論事林書古圓自他光海論可有錄老師雜話記切紙針灸穴解正心集立辨類增補鉢炙論自誡袖說鈴代記錄夜談記小柴覺自製錄俗寸雜要永日九九茶話本草能卷アリ。

第十四　施藥院全宗

德運軒ト號シ、又藥樹院法印ト稱ス、幼ニシテ叡山ニ入リ僧トナル、後チ還俗シテ曲直瀨道三ノ門ニ入ル。豐臣秀吉ノ信重シ、後チ法印ニ敍シ、施藥院使ニ任ズ。先生秀吉ニ謀リ請フテ施藥ノ所ヲ禁闕ノ南門ニ建テ、藥局ヲ開キ普ク四方ノ民人ノ疾病ニ苦ムモノヲ治療ス。全宗從五位下侍從トナリ正四位ニ進ミ、又昇殿ヲ許サル。慶長四年十二月十日病ンデ歿ス、年七十四又曰ク六十九京都十念寺ニ葬ル。

第十五　曲直瀬正琳

幼名ヲ又五郎ト云フ、字養庵、玉翁ト號ス。本姓一柳、若冠ニシテ翠竹院正慶ニ贅ヲトリテ學ブ、正慶妻スニ女孫ヲ以テシ、曲直瀬ヲ名乘ラシム。文祿元年十二月二十八日法印ニ敍セラル、同四年浮田秀家ノ家奇病ヲ得、先生藥ヲ處シテ驗アリ。秀家朝鮮ノ役ニ會シ、秀吉彼ニ命ジ、醫書ヲ獲テ之ニ贈ルベシト、秀長、朝鮮ニ於テ收獲スル所ノ書數十箱ヲ以テ悉ク先生ニ與フ。先生ノ家世々奇書ニ富メルヲ以テ名アリ。寛保二年ノ大火ニ遭ヒ其大半ヲ烏有ニ歸セリ。

慶長五年後陽成天皇不豫、先生召サレテ藥ヲ上リ殊效アリ、院號ヲ賜フ、依テ子孫ニ至ルマデ養安院ト稱ス。同十年德川家康ノ召ス所トナリ、同十三年關年東上ス。慶長十六年八月九日途ニ病ンデ其家ニ歿ス、年四十七、紫野大德院塔中玉林院ニ葬ル。

第十六　曲直瀨正純

本姓岡野井、父ヲ德安ト曰フ、醫ヲ曲直瀨道三ニ學ビ、後其女壻タリ、故ニ曲直瀨氏ヲ冒ス。慶長十三年ニ法印ニ敍セラレ、亭德齋ノ號ヲ賜フ、年四十七ニシテ歿ス、歿年詳ナラズ。

第十七　御薗意齋

名ハ常心通稱源兵衛續ハ其號ナリ。打鉞ノ術ヲ以テ知ラル、名家ニシテ、意齋ハ實ニ其流中興ノ祖ト稱セラル。正親町後陽成ノ兩天皇ニ聘仕シテ鉞博士トナル。

元和二年十二月病ンデ其家ニ歿ス。

著ス所ニ、醫家珍寶鍼灸秘穴、鍼灸全論、神巫秘傳アリ。

第十八　曲直瀬玄朔

名ハ正紹、通稱道三、東井ト號ス、天文十八年京都ニ生マル。幼ニシテ父母ニ離ル、故ニ正慶養フテ己ガ子トナス、天正年九年昇殿ヲ聽サレ、翌十年正月法眼ニ敍セラレ、同年十一月勅旨ヲ奉ジテ道三ト改ム、同十四年十二月法印ニ進ミ、延命院ノ號ヲ賜フ、後チ延壽院ト改ム。後チ關白秀次ニ仕フ、秀次自殺スルニ方リテ常陸國ニ配流セラレ、佐竹義宣ノ許ニ在リテ常山方ヲ著ス。慶長三年後陽成天皇不豫、諸醫治スルコト能ハズ、因テ召サレテ上洛シ藥ヲ獻ジテ立ニ愈ユ。慶長四年屠蘇白散ヲ幕府ニ獻ズ、以後毎年以テ佳例トス。寛永八年十二月十日病デ歿ス、年八十二、澁谷廣尾祥雲寺ニ葬ル。

著ス所ニ、新撰雜方藥性能毒傳心方法醫方總墨常山方アリ。

第十九　堀杏庵

名ハ正意、字ハ敬夫、杏庵ト號ス、又杏隱トモ云フ。近江ノ人、曲直瀨正純ニ醫業ヲ受ケ、又藤原惺窩ニ從フテ經書ヲ學ビ、藤門四傑ニ數ヘラル。尾張德川頼敬ニ聘セラル、法眼ニ進ム。寛永中江戸ニ來リ將軍秀忠ニ謁ス。弘文院ニ入リ諸家系譜ヲ編修ス。寛永十九年十一月二十五日卒ス、享年五十八。

第二十　岡本玄冶

初メノ名ハ宗什、後チ諸品ト改ム、玄冶ハ其通稱ナリ。京都ノ人、年十六曲直瀬玄朔ノ門ニ入リ方術ヲ學ブ、學業ノ成トナル、玄朔ソノ女ヲ以テ妻ス。元和四年法眼ニ敍セラル、九年德川秀忠ノ醫官トナリ翌年東下ス。寛永五年法印ニ進ミ啓廸院ト號ス。寛永十三年朝鮮國使ニ接シ談論大ニ美譽セラル、十四年家光病ミ先生ノ藥ニヨリ治ス、采地千石ヲ賜フ。正保二年四月二十日病ンデ歿ス、年五十九、淺谷廣尾祥雲寺ニ葬ル。著ス所ニ、燈下集玄冶配劑口解玄冶方考家傳預藥集增補濟民記通俗醫源壓舟傷寒方規矩アリ。

第二十一　施藥院宗伯

江州ノ人、三雲三郎左衛門資隆ノ子ナリ、施藥院秀隆夭死シ嗣ナキヲ以テ、宗伯出デテ家業ヲ繼グ、豐太閤ノ侍醫トナリ法眼トナル。慶長四年法印ニ敍シ施藥院使ニ任ズ。

寛文三年七月二十七日其家ニ歿ス、年八十八、京都寺町十念寺ニ葬ル。

著ス所ニ、藥要集アリ、宗益ノ著スモノ先生之ヲ增補修正シテ世ニ公ニセリ。

第二十二　野間三竹

名ハ成大字ハ子莢柳谷又靜軒ト號ス、玄琢ノ子ナリ。慶長十三年ニ生マル、父ノ舊ヲ以テ法橋ニ叙シ、寛文初年御醫トナリ法眼ニ進ミ、壽昌院ノ號ヲ賜グ。延寶四年八月十七日病ンデ歿ス、享年六十九歳。

著ス所ニ、北溪合璧古今考、沈靜錄、古今逸士傳、學醫通論、醫學類篇、修養篇、四時幽賞、俗語錄、病餘反古錄、竹窓漫筆、席上談、桑華紀年、本朝言行錄、本朝詩英、群馬考、堅海錄、孤燈錄、備忘錄、讀書得閑編、復營集、類書アリ。

第二十三　戴曼公

名ハ竺杭州仁和縣ノ人、萬曆丙申二月十九日生マル。少シテ孝子業ヲ學ビ、雲林鶴廷賢ニ從ヒ盡ク其術ヲ傳フ、後明亡ルヤ我ガ長崎ニ到ル。時ニ承德二年ニシテ公年五十ナリ。

周防吉川侯ノ請ニ應ジテ長防ノ間ニ往來ス、其臣池田嵩山書ヲ曼公ニ學ブ、曼公其爲人ヲ審ニシ勸メテ痘治ノ術ヲ授ク、永應二年延元和尙東來シ大ニ法威ヲ振フ、曼公乞テ出家ヲ求メ、和尙ノ坐下ニ歸シ薙染シ、名ヲ性昺ト改メ、字ヲ獨立ト曰フ、天外一間人、又天外老人ト號ス、而シテ醫ヲナスコト舊ノ如シ。云タ物ヲ濟ハ是レ佛心、道本廣大、在ラザル所ナシ、其治成方ニ規々タラズ、而モ驗ヲ得ルコト多シト云フ。

寛文十二年十一月初六日遂ニ寂ス、春秋七十七、長崎聖壽山中ニ火キ、弟子慧明其骨ヲ護送シテ、宇治黃檗山ニ葬ル。

著ス所ニ、痘疹治術傳、痘人治痘傳、痘疹百死形狀傳、痘科鍵口訣、方論、正面定位圖、面部四位八隅圖、面色顯證圖、三十六面圖、脣舌常鈇、病脣十八品、病舌三十六品、五死舌圖アリ。

第二十四　向井靈蘭

始ノ名ハ玄松、晩年元升ト更ム、字ハ崇柏又以閑、自ラ觀水子ト號ス、其室ヲ靈蘭ト名ク。慶長十四年二月二日、肥前神崎郡淀村ニ生マル、父高市病アリ長崎ニ移ル。先生年二十二、始テ書ヲ讀ミ遂ニ醫ヲ以テ業トナシ、俗ニ從テ薙髮ス。先生獨學刻苦、遂ニ其蘊奥ヲ窮ム、筑前黑田侯病アリ招テ治セシメ效アリ、俸七百石ヲ以テ召スモ應セズ。四十六歲其姑ヲ失ヒ、萬治元年先生五十歲妻子ヲ携テ京都ニ入リ家ス、直チニ伊勢大廟ニ詣テ廟前ニ於テ髮ヲ束ネ又俗服ヲナラザルヲ以テ羽織衣ヲ創テ自ラ醫服トナス。京都ニ在ルコト日久シテ其術大ニ行ハル、先生年六十。加賀ニ赴キ家臣ノ病ヲ治ス、侯招カントスルモ老衰事ニ堪ヘザルヲ以テ辭シテ受ケズ。延寶五年十一月朔日病ヲ以テ家ニ卒ス、享年六十九、總テ十一日京都洛東鈴聲山ニ葬ル、元祿六年故アリテ其南ニ改メ葬ル。

著ス所ニ、和名本草廣求經驗秘方アリ。

第二十五　山脇玄心

道作ト稱シ、文祿三年近江、山脇村ニ生マル、後チ父松雪ニ從ヒ京都ニ移リ、慶長年中、今大路玄朔ニ入門シ、醫道ヲ學ビ、後チ稲知山有馬家ニ仕ヘ、更ニ又美濃德永家ニ仕フ、又京都ニ醫業ヲ開ク。元和六年禁裏ニ召サレ侍醫トナリ、元和九年法橋ニ、寛永十四年法眼ニ、同二十年法印ニ敍シ、養壽院ノ號ヲ賜ハル。後水尾明正後光明後四靈元ノ五朝ニ奉仕ス。後水尾天皇御讓位後モ日々參內ス、勅命ニヨリ養壽錄ヲ著述シテ獻上ス、老年ノ節頭巾鳩杖ヲ賜リ、參內院參ノ節、宮中ニテ用品使用ヲ許サル。先是德川南龍公疾アリ道作ヲ請ント欲ス、上皇遣ラズ、曰ク朕一日モ道作無カル可ラズ、道作在ラザレバ朕ガ心安カラズト。延寶六年十月八日歿ス、壽八十二。

著ス所ニ、勅撰養壽錄原病式集解醫方捷徑アリ。

第二十六　井上玄徹

靈叟ト號ス。慶長七年六月四日周防山口ニ生マル。年十三出デテ廣島ノ人井上豐後ノ家ヲ嗣グ。壯年京都ニ出テ醫業ヲ曲直瀬玄朔ニ受ケ、精妙ヲ得。正保四年十一月初メテ家光將軍ニ京都ニ謁シ、遂テ侍醫トナリ、俸三百苞ヲ賜フ。寛文四年十一月會津保科侯喀血ヲ患フ、玄徹命ヲ受ケ方ヲ處シ、侯ノ病忽チ癒ユ。五年十二月二十九日法眼ニ敘セラル。寛治三年男玄快ヲシテ繼ガシメ、自ラ老ヲ告ゲテ退ク。寶暦五年東福門院不豫、玄徹命ヲ奉ジテ京都ニ入リ藥ヲ獻ジテ效アリ。天皇ソノ勞ヲ賞シ玉フ。六年六月江戸ニ歸リ法印ニ敘シ、交泰院ノ號ヲ賜フ。古ヨリ一診ノ報酬銀三千挺アルモノ玄徹ト井關常甫トアルノミ。玄徹又喜デ子弟ヲ教導シ門弟千ヲ以テ數フ。

貞享三年四月十九日病ンデ其家ニ沒ス。年八十五。地ヲ淺谷廣尾祥雲寺內師玄朔ノ墳側ニ相シ、遺言シテ此地ニ葬ラシム。

第二十七　井上玄徹（木像）

史傳　前ニ出ヅ。

將軍家奏前太醫令延壽院玄淵橘先生
貞享三丙寅五月二十二日壽五十一

第二十八　今大路玄淵

名ハ親僕諱ハ玄淵字ハ靜終寛永十三年三月十日江戸ニ生マル、慶安四年十二月十九日典藥頭ニ敍セラレ兵部大輔ト稱ス、貞享三年五月二十二日中風ニ罹リ急死ス、年五十一。

著ス所ニ、魚目明珠、拿珠方、唐範寄解、寶餡方、入門私考、龍金方、時齊文抄、時齊日抄、一壺集、錦嫋子、杜樹廣見、素問考、鄙談奇談、醫小傳、讀書浸筆、斗藪抄、煎熬漫錄、柚裏亭、神藻便方、搗毫日抄、奏所筆錄、茅山草評、多聞奇方、向友堂詩抄、古文後集、考歷史日本考、陸放翁詩抄、醫求、醫淵アリ。

第二十九　嵐山甫安

名ハ甫安又春寛、初メ剣田李庵ト云フ、平戸藩剣田三郎兵衛尉ノ二男ナリ。寛文元年二十九歳藩命ニヨリ長崎ニ行キ阿蘭陀外科學ヲ修ムルコト二年ニシテ平戸ニ歸リ、寛文四年藩ニ召サレ、延寶八年祿百石ヲ受ク。後病ヲ得、摂州有馬ニ湯治シ、京都ニ出デテ貴紳ノ治療ヲ施シ、法橋ニ敍セラル。姓ヲ改メテ嵐山甫安トス。蓋シ、治療ノ巧妙花ヲ以テ譽フベキトノ勅旨ニヨルト、元祿六年十一月三十日歿ス、享年六十一。著ス所ニ、發國治方類聚アリ。

第三十　杉山和一

伊勢ノ人、慶長十五年生ル。目盲ノ故ヲ以テ家ヲ義弟重之ニ讓リ、江戸ニ出デテ山瀬琢一ニ學ブ。先生鈍性ニシテ技進マズ、遂ニ其師ニ逐ハル。後チ相州江ノ島辯天神社ニ詣フ、斷食籠ルコト三十七日、夢ニ神アリ、一物ヲ授ク。熟視スレバ管ト鍼ナリ。之ニヨツテ創メテ管鍼ヲ造リ、其術ヲ施ス。後チ京都ニ赴キ、入江豊明ニ師事シ、斯術ノ蘊奥ヲ窮ム。偶々綱吉公病アリ、和一ヲ召シテ鍼ヲ施メシム。效アリ、時ニ貞享二年正月八日ナリ。元祿五年五月九日關東總錄檢校トナル。同七年五月十八日、病ンデ其家ニ歿ス。享年八十五。本所林町彌勒寺ニ葬ル。

著ス所ニ、療治三大概集、醫學節要集、證鍼三要集アリ、之ヲ杉山三部書ト稱ス。

第三十一　本木良意

名ハ榮久、庄太夫ト通稱ス、平戸ノ人、早クヨリ蘭語ニ通ズ。寛永十七年蘭人ノ長崎ニ移ルヤ、共ニ赴キ萬治二年平戸ニ歸ル。當時長崎ニハ未ダ通詞ナキヲ以テ率行馬川與兵衛ノ依囑ニヨリ寛文四年更ニ長崎ニ居ヲ定ム、同八年大通詞トナリ、三十二年間ノ精勵ヨク其責ヲ盡シ、元祿八年辭職スルト共ニ新タニ通詞目付ニ召出サレ剃髮シテ良意ト改名ス。元祿十年十月十日病ンデ歿ス、時年七十。

第三十二　鳩野宗巴(初代)

長州ノ人、中島ヲ姓トス、武ヲ棄テ醫トナリ、長崎ニ寓ス、萬治ノ初年竊ニ和蘭結ニ投ジ南蠻ニ航シ、ポストカノ門ニ入リ醫ヲ學ブコト三年、歸朝スルヤ名ヲ諸國巡覽ニ托シテ潛匿ス。偶々南蠻醫アルマンス蘭醫カスパルノ二人幕府ノ許可ヲ得テ醫業ヲ長崎ニ開クニ會ス、宗巴往テ弟子トナル。此際肥前侯愛飼スル所ノ鳩足ヲ傷ク、之ヲ治ス效アリ、侯賞シ姓ヲ鳩野トセンコトヲ勸告ス。地方ノ人鳩ノ宗巴ト呼ブ、茲ニ自ラ鳩野ヲ冒ス。細川公客禮ヲ以テ聘ス、大阪藩邸ニ在リテ傍ラ業ヲ開ク。元祿十三年歿ス、學峰道藩老法師ニ當ス、俗人ニシテ老法師ヲ稱スルハ多クハ人ヲ敎ヒタルヲ彰スルナリ。

第三十三　松下見林

名ハ慶鶴字ハ諸生、四峰山人ト號シ、見林ト通稱ス、浪華ノ人、寛永十四年一月元旦ニ生マル。年十三、古林見宜ニ贄ヲ執リ醫學ヲ修ム、京都ニ在リテ醫ヲ業トスル傍經書ヲ講ゼリ。後チ高松侯ニ筮仕ス、延寶年間、戸田越前守忠昌朝廷ニ奏シテ法印ノ位ヲ授ケント欲ス、先生辭シテ受ケズ。元祿十六年十二月七日歿ス、年六十七。

著ス所ニ、瘟氣論疏鈔、習醫規格、古林見宜翁傳アリ。

第三十四　楢林鎮山

名ハ時敏、通稱新吾兵衛、鎮山ハ其號ナリ、慶安元年十二月十四日長崎ニ生マル。幼ニシテ和蘭人ニ就テ其文字ヲ學ブ、年十八、擧ゲラレテ小通詞トナル、貞享二年六月大通詞ニ擢セラル。元祿元年蘭醫ホツフマンノ來朝ニ遇ヒ、醫學ノ疑難ヲ質シ、同五年八月年五十一、通詞ノ業ヲ子榮理ニ讓リ剃髮シテ榮休ト改メ外科ヲ以テ業トス、楢林流外科茲ニ興ル。

寶永八年三月二十九日病ンデ歿ス、享年六十九。

第三十五　寺井玄渓

元祿十三年、赤穗城主淺野長矩ニ仕フ、江戸ノ變起ルニ及ビ、大石良雄ニ從ヒ江戸ニ赴カント謂フ、良雄喜バズ、醫人ノ君ヲ交フレバ、後世、倏繁ヲ驅率シ以テ方技ノ徒ニ及ブト謂ハン、而シテ軍伍ノ間醫官未ダ管テ從ハザル所ナリト、玄渓遂ニ止ム。子玄德ヲ江戸ニ送リ諸士ノ疾ヲ護ラシム。正德元年歿ス。

第三十六　吉田自庵

名ハ昌金、自庵ハ其號ナリ、筑前太宰府ノ人、本姓坂田、幼ニシテ、長崎ニ赴キ、吉田自休ニ就テ南蠻外科ヲ學ブコト多年、自休已レガ子トシ、其業ヲ嗣ガシム、依テ吉田氏ヲ冒ス。元祿四年六月江府ニ仕ヘ、時ニ年四十八、同六年十二日法眼ニ敍セラル、奥外科トナル、寶永七年七月仕ヲ辭シ、正德三年四月病ンデ歿ス。

著ス所ニ、三國流外科傳、醫外科眞傳アリ。

第三十七　貝原益軒

名ハ篤信、字ハ子誠、通稱久兵衛、益軒ト號シ、又損軒ト號ス、筑前ノ人、寛永七年十一月十四日生マル。先生年十九、武州河崎宿ニテ親侍シ、柔齋ト號シ、醫トナラントシテ向井藍園ニ學ブ。寛文八年三十九歲東槎シテ久兵衛ト云フ。恒ニ濟生ニ意ヲ傾ケ、後生ノ碑銘トシ、著スル所ノ書多クハ國字ヲ以テシ、田夫野卒ニ便トス。先生年七十九、大和本草ヲ撰ス。之レヨリ先キ元祿十三年先生年七十一、老ヲ告ゲテ仕ヲ致ス、翌月俸ヲ賜ヒテ其老ヲ優ス。正德四年、手足痲痺シテ八月二十七日家ニ沒ス、年八十五、筑津金龍寺ニ葬ル。明治四十四年六月正四位ヲ追賜セラル。

著ス所ニ、大和本草、日本釋名、本草綱目、和名目錄養生訓等アリ。

第三十八　稲生若水

名ハ宜義字ハ彰信木下貞幹ヲ師トシ、儒醫ヲ以テ金澤侯ニ仕フ、初メ長崎ノ盧草禎本草ヲ講究シ、藥性集要ヲ作リ、同邑瓢山德潤ニ授ク、德潤大阪ニ往キ其學ヲ唱フ、若水從テ之ヲ受ク。唐物類纂一千卷ヲ著ハス、又正德年間本草綱目ヲ校正シ、其誤脫ヲ補入シ、附スルニ結髦歷別集ヲ以テス。正德五年七月五日、京都北小路ノ家ニ歿ス、年六十一。

著ス所ニ唐物類纂、詩經小識、左傳名物考、本草圖畫、本別集、物產目錄、我土產目錄、採藥獨斷、桑和物產品目、炮炙全書、孝女傳、結髦歷別集、非本草綱目拾甫、食物本草、胡枝錄アリ。

第三十九　越智平庵

名ハ正球ニ正璋ニ作ル、無方居士ト號ス、同齋ハ其別號ナリ。寛永十年正月十九日江戸ニ生マル、寛文七年父玄理歿シ、先生其家ヲ嗣グ、年二十八。近郊ニ行キ、田野醫藥ニ迄シキモノニ其業ヲ施シテ練習シ、八王子ニ三年留レリ。延寶元年召サレテ歸リ、二年直醫トナリ、七年法眼ニ敍シ、天和二年十一月十八日侍醫トナリ、元祿元年法印ニ敍セラル、采地千九百石ニ至ル。

享保六年十一月先生老ヲ以テ其職ヲ辭スルニ當タリ、黄金一千枚ヲ賜ハル、同九年七月家ヲ其子ニ讓ル、同十一年十二月十三日歿ス、年八十五。麻布天眞寺ニ葬ル。

第四十　山脇玄脩

道立ト稱シ、三宅宗理ノ男ナリ、永應三年ニ生マル、山脇玄心ニ養ハル、由テ山脇氏ヲ冒ス。延寶四年法橋ニ、翌五年法眼ニ叙セラレ、同六年十二月家督ヲ襲グ。享保十二年十月二日歿ス、年七十四、京都誓願寺ニ葬ル。

著ス所ニ本草附方分類、醫方嚆矢アリ。

第四十一　後藤艮山

名ハ建字ハ有成、俗稱左一郎、一ニ養庵ト號ス。寓治二年七月二十三日江戸常磐橋ノ傍居ニ生マル、艮山幼ニシテ聰明性至孝ニシテ父母ニ仕ヘテ忻歡ヲ盡ス。是ノ時江戸頻年火災アリ、十一年間ニ七タビ燒カル、父京都ニ移リ安居ヲ求メント欲ス、艮山乃チ父母ヲ奉ジテ京都ニ來ル、時ニ二十七。艮山慨然トシテ歎ジテ曰ク、我レ儒タンカ醫元ニ兄タリ難シ、已ムナクンバ即チ醫乎、豪傑ノ士先鞭ヲ著クルモノアルナシト。茲ニ於テ、讀一貫文ヲ費トシテ名古屋玄醫ノ門ヲ訪フ、玄醫其費ノ薄ク、家貧ニ合ハザルヲ以テ見エズ、艮山憤懣門ヲ出デ玄醫鼠輩人ヲ知ラズト罵ル、艮山之ヨリ奮起勤勉、醫ヲ業トシ、廿年間盛ニソノ術行レ、診ヲ乞フモノ其門ニ滿チ、弟子凡ソ二百人ニ及ベリ。

之ヨリ先キ、醫人皆髮ヲ剃リ僧衣ヲ著ケ僧官ヲ拜ス、艮山之ヲ憎ミ、幡然髮ヲ束ネテ縫掌ヲ服シ、舊姓ニ復シ、後藤佐一郎ト稱ス、後チソノ風儀ヲ慕フモノ多ク、醫人ノ束髮スルモノヲ後藤流ト稱セラル。

艮山ノ學ハ古方學ニシテ、一氣留滯論ヲ唱ヘ、瞑氣ニ因ルベキヲ治法ノ綱要トセリ。又艮山ノ病ヲ治スルニ灸ヲ用ヒ、溫泉ヲ利シ、熊膽ヲ好メリ、世俗呼デ湯熊灸庵ト曰ヘリ。

第四十二　香月牛山

名ハ則眞、字ハ啓益、筑前ノ人、少クシテ貝原益軒ニ學ビ、又鶴原玄益ニ從フテ方伎ノ書ヲ受ク。壯ナルニ及ビテ中津侯ニ仕フ、居ルコト十四年、後京都ニ遊ブ、居ヲ二條ニトシ、刀圭ヲ業トス。先生妻妾ヲ蓄ヘズ、子ナシ、門人則道ヲ嗣トス。元文五年歿ス、年八十五。

著ス所ニ、養雪餘話、牛山方考、醫學鉤玄、婦學醫叢、婦人壽草、小兒必要記、老人養草、習醫先入アリ。

第四十三　松岡恕庵

名ハ玄達、字ハ成章、別ニ怡顏齋ト號ス、平安ニ生マル、初メ山崎闇齋ニ從ヒ、伊藤仁齋ニ學ブ、稍生若水ニ就テ本草綱目ヲ問ヒ、該通セザルハ無シ。當時物產家萩藩常之進アリ、時ニ鳴ル、而シテ先生ノ藥學遙ニ其上ニ出ヅ、當時服部南郭ノ儒名一時ニ播キ生徒甚ダ多シ、因シテ先生ノ本草ヲ講ズルヤ南郭ノ講筵ニ匹敵シテ門外市ヲ成セリト云フ、時人推シテ本草ノ大家トナス。

先生天寶淳朴儉素自ラ處ス、其男善吾幼ヨリ長ズルマデ絹衣ヲ用ヒズ、其袴ハ麻布ヲ用フ。門生見ルニ忍ビズ好袴ヲ贈ル、先生之ヲ見テ曰ク吾レ仁齋先生ノ講席ニ侍スル時、束脩猶幼ニシテ白木綿ヲ衣、白綿袴ヲ着ク、善吾ノ染衣ヲ着クルモ猶且奢ナリト、終ニ之ヲ着セシメザリキ。延享四年病デ其家ニ歿ス、其子善吾嗣ク。

先生ノ著ス所多シ、千金方藥註五卷本草一家三卷用藥須知三卷用藥須知後篇四卷用藥須知續篇三卷食療正要四卷日用食性捷徑一卷本草彙言編要四卷、稽耄餘三卷、樣品一卷、梅品一卷、蘭參品一卷、竹品一卷、苔品一卷、菊品一卷倉々言二卷、毛詩名物參解四卷アリ。

第四十四　香川修庵

名ハ修徳字ハ太冲、修庵ハ其號ナリ、播州姫路ノ人、後チ轉ヲ京都ニ占ム、業ヲ伊藤仁齋ニ受クルコト五年業大ニ進ミ門下推シテ高等トナス。又醫ヲ後藤艮山ニ學ビ、其奥義ヲ窮ム、夫ノ素靈ノ說ヲ腹シ以テ一家ノ言ヲ立ツ其意以謂ラク聖道醫術共本ヲ一ニシテ二致ナシト、遂ニ其堂ヲ名ケテ一本ト曰フ。藥劑行餘醫言ヲ著シテ以テ師說ヲ推衍シ、醫道益々闡ク、溫泉及ビ炙炳ノ治效ニ於テ最モ詳ニ致ス。條庵儀恪至性アリ、幼ニシテ父ヲ喪ヒ朝起毎ニ躬ラ祠堂ヲ酒掃シ、拜謁一ニ生ニ事ルガ如ク、老ニ至ルマデ變ラザリキ。寶暦五年播州ニ赴キ、京ニ還ラントシ、二月十三日病ンデ丹波古市邑ニ歿ス、年七十三。

第四十五　野呂元丈

名ハ實夫、字ハ元丈、迺山ト號ス、字ヲ以テ稱ス。元祿六年伊勢ニ生マル、木姓高橋氏、出デテ野呂三省ノ嗣トナル、山脇玄修ヲ師トシ、旁ラ並河天民、稲生若水ニ就ク、尤モ本草ヲ好ム、若水門下出藍ノ目ナリ。後チ江戸幕府醫官トナル、又石藥ヲ長石ノ二州ニ採リ其探討海内ニ遍シ、更ニ清國ニ遊バント請フ許サレズ、居常快々タリ。頭瘍ヲ疾ンデ寶暦十年三月十四日歿ス、芝高輪泉岳寺ニ葬ル。

著ス所ニ狂犬咬傷治方佛石石碑考、和蘭陀本草和解アリ。

第四十六　奥村良竹

名ハ直、南山ト號ス、貞享元年越前府中ニ生マル。良竹年十三、山崎良伯ニ就キテ醫ヲ學ビ、居ルコト四五年、後チ去テ大阪ニ赴キ藥商ニ寄タリ居ルコト八年、良伯ノ子某歿ス、良伯齢老ヒ孫幼ナリ、乃チ書ヲ寄セ良竹ヲ招テ歸ラシメ、其孫良彌ヲ教育セシム。良竹既ニ醫家ノ大義ニ通ズ、是ニ於テ研鑽益々力メ名大ニ聲リ、府中本多侯三女アリ、俱ニ疱ニ罹リ勢頗ル危シ、良竹藥ヲ進メテ效アリ、既ニシテ良伯歿シテ良彌既ニ齢冠、良竹乃チ家有スル所ヲ推シテ悉ク之ニ與ヘ、單身出デテ居ル、府中侯祿セントス、良竹謝ス。良竹ノ父年老ヒ、良竹ニ謂テ曰ク、男兒四方ノ志アリト、然レドモ負米俸微亦皆親ノ爲ニスト、貴人ノ體命スル所豈終ニ辭スベケンヤト、良竹乃チ其命ヲ拜ス。府中侯ノ女若倉藩公ニ適ク、良竹從テ京ニ入ル、既ニシテ歸國ス、治效益々著シク聲名遠ク走セ、四方ヨリ來リ學ブモノ沙ヲ乞フモノ日ニ頗ル多シ。良竹著書ヲ好マズ、人或ハ勸ムルニ書ヲ著ハスヲ以テス、良竹微笑シテ曰ク醫家道先德論ジテ具レリ、舉ゲテ之ヲ行フノミ、何ゾ名ニ拘ルコトヲナサントヤ。

寶曆七年ノ春、良竹卒然疝ヲ病ミ、常ニ床蓐ニ在リ、而シテ子弟ト方ヲ講ジ學ヲトシテ已マズ。十一年八月暴冷ニ傷ミ、九月三日遂ニ逝ク、年七十五、平吹村先塋ノ傍ニ葬ル。

第四十七　山脇東洋

諱ハ衛護、字ハ玄飛、一字ハ子桐、初メ移山ト號シ、後東洋ト改ム。本姓清水氏、年十三ニシテ能ク文ヲ屬シ、又始メテ醫ヲ學ビ山脇玄修ニ朝夕ス、年十八ノトキ生父東軒歿ス。玄修老テ子ナシ、享保十一年先生ヲ養フテ嗣トス、明年七月玄修歿ス、翌日其業ヲ嗣グ、時ニ年二十三。先生專ラ古醫道ヲ唱道セリ。

寶暦四年二月七日、刑ヲ洛ノ西郊ニ行フアリ、官ニ請フテ之ヲ解ク、先生就テ其狀ヲ觀、闕志ヲ作リ名ケテ藏志ト曰フ、實ニ觀藏ノ闕志ハ先生ヲ以テ嚆矢トス。當時世醫嘗然トシテ之ヲ維シ、刑囚ノ屍ト雖屠テ之ヲ觀ルハ慘酷トセリ、先生敢テ之ヲ意トセズ。更ニ同八年十月再ビ刑屍ヲ解剖セリ。

先生外臺秘要方ヲ校刊セント志シ、延享二年北野天滿宮ニ詣デテ祈リ且ツ誓フ、翌年十月刻成ル。先生ノ名海内ニ溢チ四方來リ學ブモノ數百人、先生規則十條ヲ作リ醫院醫則ヲ著シ之ヲ子弟ニ示セリ。

寶暦十二年八月六日、廳司右府ノ病ヲ療センガ爲メニ其殿ニ宿シ、夜ニ至リ俄ニ病起リ、翌七日奥シテ家ニ歸リ一日ヲ越エテ歿ス、享年五十八。

第四十八　井上稚川

名ハ方正、俊良ト稱ス、幕府醫官法眼杉浦玄德ノ子ナリ、井上文泰說玄德ニ養レテ嗣トナル。寛保元年十二月法眼トナリ、寛延元年十二月法印ニ進ミ、寶曆二年五月四城侍醫トナル。

望月三英博學精通ヲ以テ當時江都醫家ノ巨擘タリ、先生ヲ稱シテ曰ク、俊良素ト英傑、學古義ヲ究メ博覽强記、凡ソ天下ノ經籍事物、一タビ目擊スルニ及ベバ終身遺忘スルコトナシト、亦奇ナル哉。其大人玄德翁夙ニ方術ヲ以テ鳴ル、性秘方ヲ嗜ミ、廣ク世ニ求メ、其經驗ヲ取テ之ヲ試ム、手ニ隨テ應ゼザルモノナシ、是ニ於テ聲名轟著タリ。翁モト眼ヲ失ヒ、終ニ明ヲ失フ、然モ翁攻々トシテ休マズ、卽チ俊良ヲシテ相扶ケ相携ヘテ、病家ニ至リ共ニ俱ニ診視處劑セシム。是故ニ俊良ノ拙摩鍼灸、翁冠ニシテ已ニ遠ク老醫ノ上ニ出ヅト。明和元年八月八日病ンデ歿ス、年六十六、廣尾祥雲寺ニ葬ル。

著ス所ニ、醫方精要アリ、門人尾張醫官竹田恭明刻シテ世ニ行フ。

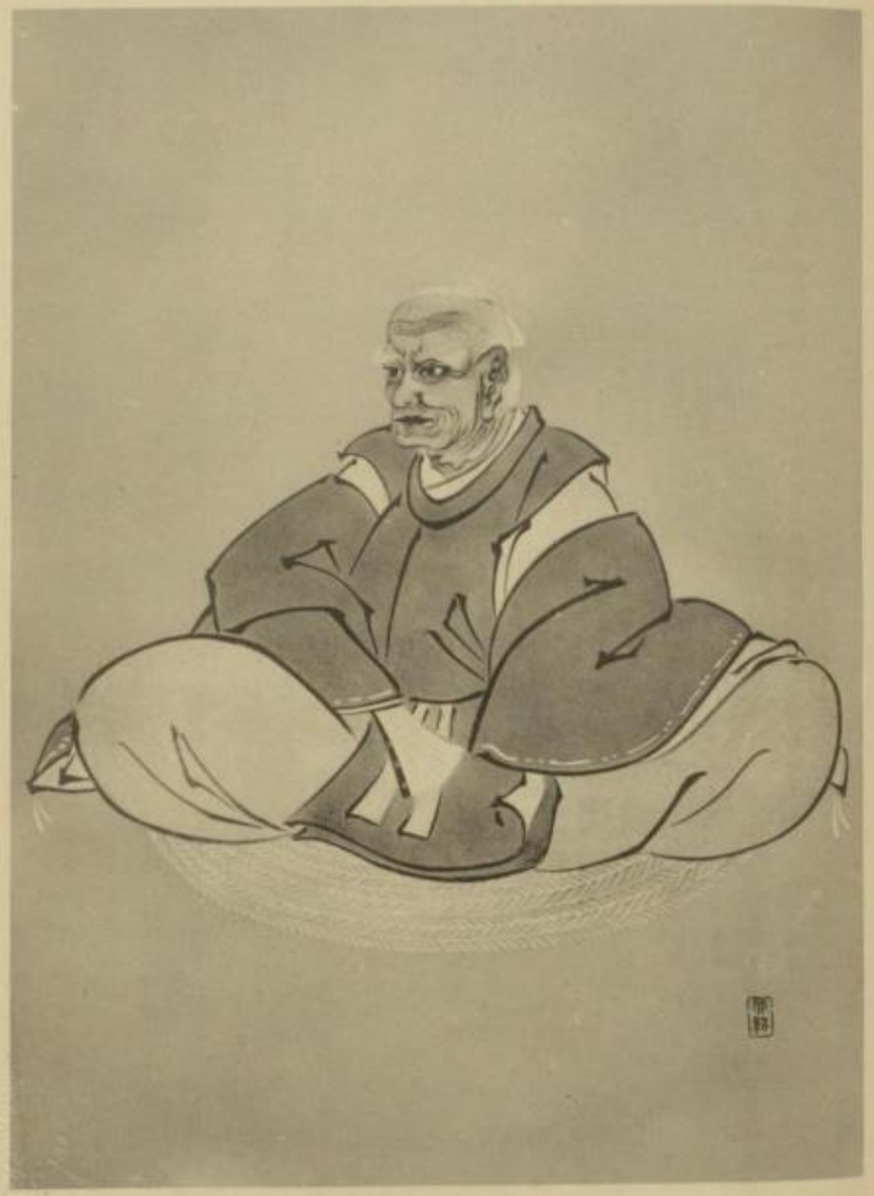
第四十九　御園中渠

名ハ常瑛、字ハ文昭、名ハ中渠ト號ス、惠齊流鍼術當心五世ノ孫ナリ。寶永三年七月十五日京都ニ生マル。醫方ヲ渕井東軒ニ受ケ、鍼法ヲ父常倫ニ學ビ、年二十三歳享保十三年、鍼師六品ヲ拜シ、翌年主計權助トナリ、又偶斐ヲ許サル、朝家醫官偶斐ノ始ナリ。元文四年五品ニ擢ゲラル、寶曆十四年四品ノ位ヲ受ク。明和元年八月八日其家ニ歿ス、享年五十九。

第五十　青木昆陽

名ハ敦書字ハ厚甫昆陽ト號シ、文藏ト通ス。元祿十一年ニ生マレ、享保二十年番薯考ヲ著シ、將軍吉宗ニ知ラレ、元文四年三月八日出仕シテ御書物御用達トナリ、其翌年寺社奉行支配トナレリ、延享元年長崎ニ赴キ、更ニ深ク和蘭學ヲ學ビ之ニ精通セリ。明和六年十一月十二日病ンデ歿ス、時年七十二。

著ス所ニ、和蘭貨幣考、和蘭話譯、和蘭話譯後集、和一角考、和蘭文字略考、和蘭文譯、和蘭動詞變解、密書考アリ。



第五十一　吉益東洞

名ハ爲則、字ハ公實、通稱周助、安藝廣島ノ人、元祿十五年五月某日ヲ以テ生マル。年十九、家ヲ興スコト醫ニアルヲ悟リ、津祐順ニ從ヒ金瘡外科ヲ學ビ、則苦研精日夜已マズ、素問以下百氏ノ書ヲ爛讀セリ。偶隙ノ地ハ志士ノ伏處スベキ所ニ非ラズトテ、父母女弟ヲ從ヘテ京師ニ徙リ、萬里小路春日町南入ニ居リ、古醫方ヲ唱フ。時ニ元文三年春三月年三十七ナリ。姓ヲ吉益氏ニ改ム。先生抱負甚大ナレドモ時流未ダ信ゼズ、弟子ノ籍ニ入ルモノナク、業行ハレズ、加之窶ニ遇ヒテ貧財時ガ盡キ貧困日ニ甚シ、紙泥木ヲ以テ偶人ヲ造リ市ニ鬻ギテ価ニ衣食ヲ給ス、其友村尾氏之ヲ憐ミ佐倉侯ニ薦メントス、先生曰ク窮達ハ命ナリ、何ゾ愛フルニ足ラン、天斯道ヲ衰ハザラントセバ我ヲシテ飢死セシメジ、貧困窮乏スルモ豈ニ吾志ヲ降シテ祖先ヲ汚辱センヤ。年四十三ニ至リ貧益甚シク米櫃屢々空シ、シカモ先生ノ志少シモ悛マラズ、一日憤然決スル所アリ、齋戒斷食スルコト七日、五條ノ少名彦ノ神社ニ詣ヅ。遇其友賈鈔、彼ガ窮ヲ見テ金ヲ贈ル、先生之ヲ辭ス、賈人勃然トシテ色ヲ作シテ曰ク先生ノ爲ニ非ラズ、天下萬人ノ爲ナリト、翁感激之ヲ受ケ家資漸ク給ス、後チ某病家ニ於テ時ノ名醫山脇東洋ニ會シ共ニ處方ヲ論ジテ、大ニ推服セラルル所トナリ、之レヨリ世ニ出ヅ、年四十五。東洞院街ニ移ル、東洞ノ號ハ蓋シ此ニ取リシモノナリ。東洞ハ素靈傷寒ニ其說ヲ選ビ、五行經絡溫補ノ陋說ヲ排シ、萬病一毒論ヲ立テタルモ、其言少シク激徼ニ失シ、當時醫ノ之ヲ評スルモノ多シ。寶曆ノ初メ門人鶴元逸其說ヲ祟メテ醫斷ヲ著ハシテ公ニスルヤ、海內一時之ヲ是非スルモノ昏ネカリキ。寶延四年、年五十、類聚方ヲ選ビ、又方極一卷ヲ作リテ其門ノ方鑑トナシ、又藥徵三卷ヲ出版セリ。東洞ノ醫流天下ニ弘ク行レ奥羽肥薩所トシテ行ハレザルハナカリキ。

安永二年九月病ンデ歿ス、年七十二、京都東福寺內莊嚴院ニ葬ル。先生ノ門ニ俊傑ノ士多シ、村井祐帆、足通橋中西惟忠、岩少翁、瀨丘珽、鶴元逸、田中榮信、山邊常聊、桃井安貞、稻垣無辨、藤ハソノ門ノ高足トス。

第五十二　賀川玄悅

名ハ玄悅、一ノ名ハ光義、字ハ子玄、本姓三浦氏、世ニ彦根侯ニ仕フ。先生庶子ナリ、幕決ニテハ庶子ハ祿ヲ襲グコトヲ得ザルヲ以テ七歳ニシテ、師家賀川氏ニ養ハレテ其姓ヲ冒ス。先生默祐ノ間ニ老死スルヲ欲セズ、去リテ京都ニ往キ、按摩ノ技ヲ賣リテ自給シツツ古醫方ヲ學ブ。年四十餘ニシテ、隣家ノ婦魏シ難キニ遇ヒ、構思反覆忽チ一法ヲ得、卽チ提灯ノ柄ノ鐵鈎ヲ以テ胎ヲ抱ケテ之ヲ挽出シ、姙婦爲ニ免カル、更ニ之ヲ數人ニ試ミ、皆其意ノ如キヲ以テ益之ヲ精思シ、終ニ若干術ヲ創唱シ、回生術トセリ。先生產前七十五難產後百二十五難ヲ著ハシテ一家ノ言ヲ立テ名ケテ產論ト云フ、其說獨創ニシテ親歷セシ所ナリ、時ニ六十七歳ナリ。明和五年、阿波侯ノ聘ニ應ジ士籍ニ入リ、祿百石ヲ食ム。安永六年九月十四日、家ニ卒ス、時ニ年七十八、門人謚シテ貞定先生ト云フ。先生ニ二子アレドモ、事ヲ以テ嫁ヒ、同本玄迪ヲ養ヒテ嗣トス、其子滿貞ニ至リテ大成ス。

先生人トナリ、魁梧ニシテ膂力人ニ過ギ、手指至テ細長之ヲ用フルコト、赤巧ニ、指頭甚力アリ、其術從チ絕妙ナリト稱ス。皇后御產ノ時、難娩ニシテ諸醫治スル能ハズ、遂ニ先生ヲ召ス。先生一診手術スベキヲ云フ、奏者乃チ醫案ヲ徵ス、先生元來目ニ一丁字ナシ、因テ學文技術一ニアラザルヲ論ジ、且ツ曰ク、子宮口僅凡四寸五分、指ヲ其中ニ入レ探究ス、之ヲ手術ト云フ。請フ一竹片、太サ四寸五分、長サ一寸許ノモノヲ與ヘヨト、奏者ヲシテ之ヲ執ラシメ、其指ヲ以テ筒中ヲ過ギ、席上皿中ノ饅頭ヲ撮ミ盡ク之ヲ收ム、衆相顧ミテ肅然タリ、終ニ治ヲ先生ニ托セリト。

先生初メ產論ヲ著ハストキ、其友賀川淇園之ヲ潤色シテ世ニ出シ、大ニ行ハル、先生淇園ヲ見ル毎ニ泣拜シテ謝セリト。

第五十三　賀川玄廸

字ハ子啓秋田ノ人、本姓岡本氏。年二十西遊シテ京都ニ赴キ賀川玄悅ノ門ニ入ル、玄悅其才能ヲ愛シ子養シ、女ヲ以テ之ニ配シ家ヲ嗣シム。玄悅晩年阿波侯ノ徵ニ遇ヒタルトキ、先生ヲシテ己ニ代ラシム。先生能ク家父ノ偉業ヲ繼承シ、別ニ發明補翼スル所多シ。安永四年產論翼ヲ著シ、產論ノ說ヲ詳ニシ、又ソノ言ハザル所ヲ言ヒ、賀川氏ノ學術復タ餘蘊ナシトス。安永八年十月病デ歿ス、年四十一。

第五十四　平賀源内

享保十四年讃岐志度ニ生マル、年十三藩侯三好某ニ從テ醫ヲ學ビ本草ヲ好ム。年十九藩主ノ近侍ニ仕ヘ休蘇ト呼バレ、後チ鳥渓ニ改ム。年二十四長崎ニ至リ蘭學ヲ學ビ年餘ニシテ大阪ニ出デテ戸田旭山ニ就ク、明和七年年四十二再ビ長崎ニ遊ブ、電氣器械ヲ見テ之ヲ模造セリ。時ノ執政田沼意次ニ取リ入リ出身セントセシモ重用セラルルコトナク、久シク市ニ在リテ浪人トナル。安永八年十一月晦ニ其門人ノ一人ヲ斬リ、翌年病ンデ獄中ニ死セリ、享年四十九。友人杉田玄白私財ヲ擲チテ葬フ淺草橋場總泉寺内ニ建ツ。

著ス所ニ物類品隲、火浣布圖說、五百介圖、食物本草、神農本草經圖註、重和名考、本草木石禽獸魚介蟲譜アリ。

第五十五　瀬丘長圭

名ハ瑶字ハ長圭、江戸ノ人、天明元年二月十四日歿ス、年四十九。

良山義キニ按腹候背ノ二法ヲ設キ、香川吉益々々腹候ノ術ヲ恢弘セリ、先生出デテ尊ラカヲ腹診ニ用ヒ、益々其旨ヲ闡明セリ。

著ス所ニ診概圖說アリ。

第五十六　山科厚安

字ハ元遇、甫調ト號ス、享保十四年京都ニ生マル。延享元年、年十六召サレテ宮廷ニ入リ、翌年法橋ノ位ヲ賜ヒ、父宗安ト共ニ朝ニ升ル。寛延元年法眼ニ進ミ、寶暦五年二十七ニシテ法印ニ叙セラル光格天皇ノ侍藥ヲ蒙レリ。天明元年八月病ンデ歿ス、享年五十三。三十ヲ踰ズシテ法印ノ位ニ登ルモノ先生ヲ以テ初メトス。

第五十七　惠美三白

名ハ貞榮字ハ子幹、寒園ハ其號ニシテ、三白ハ通稱ナリ。本姓ハ堤氏、安藝廣島ノ人、幼ニシテ父母ヲ失フ、家貧乏貧ナキヲ以テ伊豫ノ人惠美良玄ニ養ハレテ惠美氏ヲ冒ス。數年後玄良死ス、三白既ニ長ジ遺囑ヲ啓キ偏ク醫書ヲ讀ミ日夜研究ス。當時吉益東洞京都ニ在リ、萬病一毒說ヲ唱フ、三白之レト所論シ往々ニシテ合ス、東洞推シテ一傑人トシ、相共ニ切劘シ得ル所少カラザリキ。三白喜ンデ奥村良筑ノ吐方ヲ用ヒ大ニ行ハレ、安藝侯數々謁見ヲ賜フ、後苞二百俵ヲ下シ世襲トナサシム。天明元年十月八日疾デ卒ス、年七十五、廣島專勝寺ニ葬ル。

第五十八　建部清菴

奥州一ノ關ノ醫官ニシテ、享保十五年江戸ニ出テ小松壽哲ノ門ニ入リ、父祖ノ業ヲ倒テ外科ヲ修メタリ。杉田玄白ノ江戸ニ在リテ蘭書醫譯ヲ創始セシヲ聞キ、其子由水及ビ門人大槻玄澤ヲシテ江戸ニ出ダシ、杉田ノ門ニ入ラシム。玄澤大成シテ其師ノ偉業ヲ恢弘セリ。

天明二年三月八日病デ歿ス、享年七十一。

著ス所ニ、民間備荒錄アリ。

第五十九　松平君山

名ハ秀雲、字ハ士龍、君山ハ其號ナリ、別號ニ龍吟子、富春山人、直藩藩主人アリ、尾張ノ人。元祿十年三月二十七日生マル、本姓千村氏、長ジテ松平久忠ニ養ハレ綱ヲ襲ギ、松平氏ヲ冒ス。先生別ニ學師系ナク、一ニ獨學力行ニ出ヅ。

天明三年四月十八日病ンデ逝ク、享年八十八。

著ス所ニ、本草正譌、孝經直解、三世唱和、帶集初編アリ。

第六十　山脇東門

諱ハ陶字ハ大藏東門ハ其號ナリ、幼名ヲ阿藤ト云フ、後チ玄侃ト改ム、東洋ノ第二子ナリ。延享三年十一歳ノトキ父ニ從ヒ參内シ寶暦十二年十一月父ノ官職ヲ襲ヒ、明和三年六月法眼ニ進ム。明和八年十二月獄舍ニ於テ一婦人屍ヲ解剖シ、更ニ安永四年八月一婦人屍ヲ、其翌年又男子屍ヲ剖キテ大ニ治療ニ裨益セリ。

先生年十七ノトキ父翁ノ命ニヨリ永富獨嘯庵ト共ニ越前府中ニ赴キ、奥村良筑ニ就キ吐方ヲ學ブ。先生後チ刺絡ノ說ヲ唱導セリ。

天明二年七月二十九日、病ヲ以テ其家ニ歿ス享年四十七。

第六十一　淺井圖南

名ハ政直、穎母ト稱ス、字ハ維實、圖南ハ其號ナリ、又幹亭、篤敬齋ト號ス、寶永三年十一月十三日、京都東洞下立賣ノ家ニ生マル。享保十一年先生年二十一、父東軒尾張公ノ聘ニ應ジ名古屋ニ赴カントス、先生隨行ヲ肯ゼズ、曰ク吾祖策庵業ヲ京都ニ起セシヨリ茲ニ百年、海內ノ醫家來リ學バザルハナシ、今父子共ニ東セバ孰カ敢テ其業ヲ承ガンカ、幸ニ一妹アリ婿ヲ撰ビ嗣トナサバ後ヲ承クルニ足ラント。先生是ヨリ獨學勤苦、且ツ弟子ヲ率ユ。年三十ニシテ醫業稍行ハレ、諸公卿ノ家ニ出入シ皆待ツニ儒士ヲ以テス。寶保二年金匱要略ヲ校シ、三年外科正宗ヲ校シ、延享四年山脇東洋ガ校訂セシ外臺秘要ノ誤謬ヲ駁シ從臨錄ヲ著セリ。寶曆三年、東軒病ビ歿ス、東軒ノ養嗣政虎年少ニシテ無頼ナリ、尾張ノ執政竹腰氏先生ヲ召ス、先生辭スルコト能ハズ、其九月名古屋ニ移サレ、父祿四百石ヲ襲グ、醫ニシテ髮ヲ蓄フルコトヲ許サル。明和三年編倉傳割解二卷ヲ著ス。先生又婁ヲ善クス、宮崎筠圃、御園中渠山科宗龍ト共ニ平安四竹ノ稱アリ。明和九年四月、年七十五ナルヲ以テ致仕ヲ乞ヒ、長子正路ヲ京師ヨリ招ク、天明元年正路先ヅ歿ス、十二月嗣俠復タ擧ゲテ醫官トス。二年八月五日竭ヲ病ビ歿ス年七十七。

第六十二　三浦梅園

名ハ晋字ハ安貞、梅園ト號ス、別ニ鏡山・存山・洞山・幸山ノ稱アリ。豊後杵築ノ人、祖父龍山以來醫ヲ家業トス。綾部絅齋ニ學ブ、年十七藩日教所ニ師事ス、年三十玄語十餘萬言ヲ著シ、又費語・敢語ヲ作ル、之ヲ梅園三語ト稱ス。天明三年藩主ヨリ家老ノ禮ヲ以テ迎ヘラル。寛政元年三月十四日病ンデ家ニ歿ス、享年六十七。

第六十三　田中張海

名ハ榮信、字ハ愿仲、播州ノ人、幼ニシテ其父ニ從ヒテ業ヲ修メ、稍長ズルニ及デ吉益東洞ノ門ニ入リ、苦學多年、郷ニ歸テ業ヲ開ク。後チ季子榮忠及ビ門人數名ヲ率テ大阪ニ出ヅ、壁譬日ニ加レリ。寛政四年十一月十六日病ンデ浪華客館ニ歿ス、享年六十一。

著ス所ニ、錯斧醫辨、溯古紫醫譚、長沙證疏、傷寒論逢原、引經斷古、醫語幕要アリ。

第六十四　賀川有齋

玄吾ト稱シ、諱ハ溝明、字ハ德夫、有齋ハ其號ナリ、父子玄ノ次子ナリ。倜儻ニシテ任俠奇節ヲ好ムコト酷ダ父翁ニ肖タリ、職母ト和セザルノ故ヲ以テ出デテ別ニ家ヲ成ス。有齋先生初メ家貧ニシテ術亦未ダ行レズ、一日某家ノ縊死産クリ、家醫手ヲ束ネテ爲ス所ヲ知ラズ、先生ヲ招ク。先生乃チ藥醫ヲ排脫シテ大ニ救護ノ術ヲ論ズ、時ニ官醫藤井丹波守亦坐ニアリ、先生ノ言ヲ聞テ大ニ服シ推奬措カズト。寛政五年三月二十一日病ヲ以テ其家ニ歿ス、享年六十歳。著ス所ニ産科記聞アリ。

第六十五　本木仁太夫

名ハ良永、字ハ士清、初メ榮之進ト稱ス、蘭車ト號ス。良意ノ孫ナリ。寛延元年年十四、通詞見習トナリ、傍ラ俳諧雛甸語ヲ能クス。延享元年幕府西書ヲ許セシヨリ、天文・地理・醫學・本草ニ亙リテ研究測察盡サザルハナシ。安永三年幕命ニヨリ天地二球用法ヲ譯ス、當時蘭語初期ニ屬シ譯解ニ苦ダ苦ムモ遂ニ之ヲ大成セリ。寛政六年七月十七日歿ス、享年六十。

第六十六　楢林鎮山

名ハ高茂、字ハ伯由、通稱榮哲、鎮山ハ其號ナリ、元文二年長崎ニ生マル、九歲ニシテ父ヲ喪フ。天明四年佐賀侯ノ醫官トナリ、寛政八年老ヲ以テ其官ヲ辭シ、剃髮蹤ヲシテ剃ガシム。九年六月二十六日病デ歿ス、年六十一、浦上村聚德寺先塋ノ次ニ葬ル。

第六十七　宇田川玄隨

名ハ貞字ハ明卿槐園ト號ス、津山侯ノ侍醫ナリ。年十三未ダ書ヲ讀マズ、毎其時ニ及バザランコトヲ恐ル、子嘗日ク男子書ヲ讀バ自ラ奮起スベシ、强ユルニ學問ヲ以テスルハ乃着ノ心ニ在ラズト、幾モナクシテ玄隨請テ李經ノ句讀ヲ受ケ、精思日徙ス、年十五已ニ詩文ヲ以テ輒ヲ社友ノ間ニ露ス。年二十五甫メテ和蘭ノ學ニ從フ、玄隨ノ家三世儒醫ヲ以テ君ニ仕フ、既ニ儒學醫方ニ精シク、又和蘭ノ學ニ通ジ、業ヲ務ムルコト益々篤ク、書ヲ著スコト益々多シ、名聲大ニ起レリ。晚年日本橋茅場町ニ僑居ス、宅中槐樹アリ藍ヲナス、故ニ門人相稱スルニ槐園先生ヲ以テセリ。桂川甫周、玄隨ノ才ヲ愛シ、壁奬シテ曰ク、遠西ノ學今ニシテ傳フルニ足ルト、又蘭人某所撰ノ內科書ヲ取テ之ヲ玄隨ニ授ケテ曰ク、之ヲ譯シテ公行セバ、則チ東方未曾有ノ業ナリト、玄隨此言ヲ聽テ大ニ然リトナシ、鑽研習讀、殆ンド十年ヲ經テ西說內科選要ヲ著ス、之レヲ和蘭內科書ノ嚆矢トス。晚年此書ニ重訂ヲ加ヘ平直ヲ旨トシ、務メテ治療ノ準則ヲ揭示セントシ、既ニ稿ヲ起セシモ、未ダ脫セズシテ溘焉トシテ寶ヲ易タ。其嗣玄眞遺緒ヲ嗣ギ、增補重訂內科選要ヲ世ニ公セリ。

寛政九年十二月十八日病ンデ歿ス、享年四十三。著ス所ニ、遠西名物考、東西病考、遠西草木略、西洋醫官蘭煎似較蘭譯鰒鮑文、槐園文集アリ。

第六十八　吉雄耕牛

名ハ永章、俗稱幸左衛門、後幸作ト改ム、耕牛ハソノ號ナリ。長崎通事ノ穿ラ外科ノ業ヲ好ミ、西醫ニ就テ其方術ヲ受ケ、以テ名アリ。能ク子弟ヲ教導シ、四方ヨリ笈ヲ負フテ其門ニ入ル者數十百人ニ及ブ。毎歲江戸來聘ノ和蘭使節ニ從ヒテ都下ニ來レリ。明和ノ初メ前野良澤、長崎ニ至リ專ラ西學ノ一端ヲ質問シテ其學ノ端ヲ啓ケタリ。晩年職ヲ辭シ薙髮シテ耕牛ヲ以テ隱居ノ常ノ稱トセリ。寛政十二年庚申八月十六日、年七十七病ヲ以テ家ニ終リ、禪林寺ニ葬ル。

著ス所ニ因液發微二卷アリ。

第六十九　本居宣長

鈴屋ト號ス、始メ小津宮之助ト云ヒ、彌四郎、健藏、春庵ト稱シ、後チ中衛ト改ム、伊勢松阪ノ人。享保十五年六月七日ニ生マレ、京都ニ留學シテ堀景山ニ師事シ、更ニ醫學ヲ武川法眼ニ受ク、業成リ歸鄉、治ヲ施シ、併セテ子弟ヲ教授ス。

享和元年九月二十九日病ンデ歿ス、享年七十二、山室妙樂寺ニ葬ル。

第七十　前野蘭化

名ハ寫、通稱良澤、字ヲ子悅ト云ヒ、樂山ト號セリ。家世々醫ヲ以テ中津侯ニ仕ヘテ二百石ヲ領セリ。幼ニシテ父母ヲ失ヒ外舅淀侯宮田全澤ニ養ハレテ成長セリ。一日同藩ノ謹坂江鷗蘭書ノ殘篇ヲ先生ニ示シタルニ發憤シテ、青木昆陽ノ塾ニ入リ、日夜孜々其書ヲ學ビタリ、時明和六年ニシテ其齡四十七ナリ。其翌年藩侯ニ從ヒ中津ニ赴クコトアリシカバ、百日ノ暇ヲ得テ長崎ニ遊ビ、昆陽ヨリ傳ヘラレタル五百餘言ノ外ニ又二百餘言ヲ誦シテ江戸ニ歸レリ。其翌年明和八年三月四日、杉田玄白等ト小塚原腑分ヲ觀テ、同志ト力ヲ戮セ解體新書ヲ大成セリ。

先生蘭學ヲ以テ終身ノ業トナシ、彼邦ノ言語ニ通ジ其力ヲ以テ西洋ノ事態ヲ知ラントノ大望アリシ故ニ、世間浮華ノ人ト交ルコトヲ避ケ、戸ヲ閉ヂテ醫學ニ潛ムルコト終始一日ノ如クナリキ。晚年隱居シテ居宅ヲ根岸ノ貝塚ニ築キシガ病起ルニ及ビテ、女婿小島泰庵ノ家ニ移リテ遂ニ歿ス、享年八十一、享和三年十月十七日ナリ。先生出デテ藩侯ニ待セルトキ、藩主先生ヲ目シテ和蘭ノ化物ト云ヒテ、其名ヲ呼ビ難シコトナカリケレバ遂ニ蘭化ト稱セリ。

著ス所ニ蘭譯大成、和蘭譯文略、蘭譯筌助、語參考、蘭語隨筆、古言考、略例考、思々末、遊廬雜管、蘭秘、胃仁、胃私說、八體字考、星考、輿地圖、篇、地學通、魯西亞本紀、略、同大統略記、樂山堂記等アリ。

第七十一　和田東郭

名ハ瑛字ハ韞輝一字泰純東郭ハ其號ニシテ、一ニ含章齋ト號ス。少ウシテ大阪ニ遊ビ戸田旭山ニ業ヲ受ケ、後京都ニ來リ吉益東洞ノ門ニ入リ古方ヲ修ム。寛政九年御醫トナリ、法橋ニ敘セラレ、十一年法眼ニ進ミ、享和三年病デ歿ス。

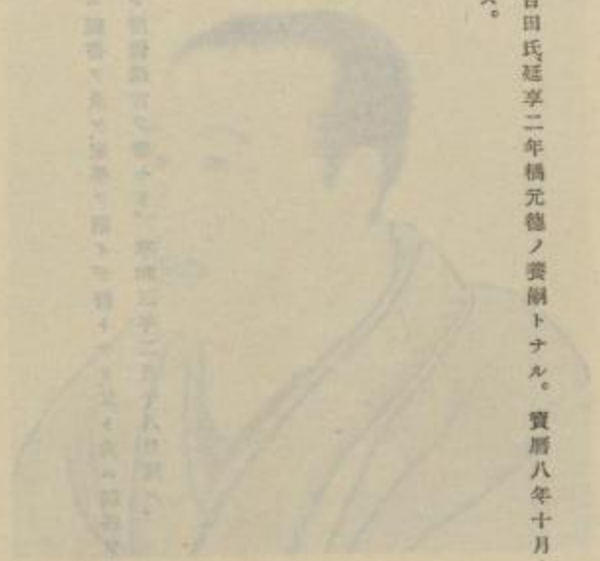
著ス所ニ傷寒正文解蒸恣方意解蒸恣雜話產家須言瘍水腫言瘍家須言幼家須言育義須言弦結一家言東郭雜記アリ。

第七十二　柚木太淳

字ハ仲壽鶴橋ト號ス。江州ノ人、江村北海ニ經書ヲ承ケ、家學ヲ繼イデ醫トナリ、父ト共ニ眼科ヲ以テ立チリ。又荻野臺州ニ就キ內科ヲ修ム。解剖ニ志シ、解體新書ヲ著セリ。享和三年二月十八日歿ス。

第七十三　橘　元周

織蔵ト通稱シ、字ハ元周、梅園ト號ス。本姓吉田氏、延享二年橘元德ノ養嗣トナル。寶暦八年十月十五日法眼ニ進ミ、幕府奥醫師トナル。寛政年間ニ歿ス。著ス所ニ蹄氣說アリ。



第七十二　齡木太朔

第七十四　畑黄山

名ハ惟和、字ハ厚生、黄山ト號ス。平安ノ人、本姓安藤ナリ。醫官畑榊景雲フテ嗣トナス、因テ畑氏ヲ冒ス。弱齢ニシテ醫ヲ以テ京都ニ鳴ル。延享二年十月法橋ニ敍セラレ、寶暦七年十二月法眼ニ進ム、明和四年八月詔ヲ奉ジテ太上天皇ノ病ヲ診シ、遂ニ侍醫トナル。安永五年初メテ御脈ヲ診シ、上皇ノ起居ヲ候フ、天明七年一月尚藥奉御トナリ法印ニ敍シ、醫學院ノ號ヲ賜ハル。近衛殿ニ新ニ學館ヲ營ミ醫學院ト名ケ、弟子ヲ誘進シ、又儒士ヲ延テ六經四書ヲ講ゼシム。天明八年京都火アリ乘輿ニ扈從シ、行宮ニ宿直スルコト三年、享和ノ初メ劇疾ヲ患フ、已ニ愈ルニ及ビ特旨短袴ヲ著セシメ、又杖朝ヲ許サル、且ツ故アルニ非ザレバ召サレズ。文化元年五月十六日歿ス、年八十四。

著ス所ニ、斥醫新學範アリ。

第七十五　橘南蹊（宮川春暉）

字ハ惠風姓ハ橘、因テ自ラ橘南蹊ト號ス、又梅仙ト號ス。伊勢ノ人、產レテ七歳父孟子ヲ讀ム、春暉遙々傍ニ在リ、父羊ヲ以テ牛ニ代ユルノ章ヲ語ル、先生默シテ其義ヲ了ス、人之ヲ奇トス。年十四五歳ニシテ父ヲ失フ、家計豐ナラザレバ醫業ヲ職セント志ス、十九歳京都ニ上ル、母恒ニ戒メテ修業ヲ勵マシム。先生夙ニ香川太冲ニ私淑シ、文質相ツナガラ備リテ淡土ニ愧デザルハ太冲アルノミト謂ヘリ。天明元年母歿シ、今ハ孝養ノ絆モ斷タレ、繫累ノ煩モナキニ至レバ、同年四遊ヲ思ヒタチシガ、未ダ其機ヲ得ザリキ。翌二年秋、門生文藏ヲ伴ヒ九州ニ遊ビ、天明三年秋再ビ京都ニ還リテ西遊ヲ遂ゲタレバ、更ニ天明四年ノ秋、門生雲軒ヲ隨ヘテ東遊シ、翌五年三月仙臺ニ到リ、九月ヨリ五年三月ニ至ルマデ奥羽北端ヨリ北越中越ヲ巡レリ。先生深雪狂途ニ迷フ時ヲ選ビシハ醫術修業ノ爲メナリト、三月越後ヨリ佐渡ニ渡ラントシ颶風ニ遇ヒテ止ミ、加賀ヲ經テ越前近江ヲ經リテ歸洛セリ。

ソノ西遊、東遊合セテ五年、ソノ他南紀ノ歴遊ヲ併セテ漫遊スルコト前後四度ニ及ベリ。ソノ東遊ヲ畢ヘテ歸京セシ後、專ラ醫業ヲ營ミ、又尙藥ニ任ゼラレ、石見介ニ敍セラレタリ、後チ著述ニ心勞セシガ、偶々宿痾ニ苦シミ、遂ニ致仕シテ薙髮セリ、年四十四。文化二年四月十日遂ニ歿ス。其生年ヲ詳セズ。

著ス所ニ、雜病記、閑橘氏醫話、藥量考、讀藥論、方意辨、度量衡考、辨意、漢語律呂考、樂方小陵、痘疹玉環、方痘疹、水鏡錄、傷寒外傳、傷寒論翼、傷寒論文註アリ。

第七十六　小石元俊

名ハ道、字ハ有隣、大馬、又碧霞ト號ス、元俊ハ其通稱ナリ。寶保三年九月十六日ニ生マル、年八歲父ニ從ヒ大阪ニ遷ル、淡輪元潛・永富獨嘯ヲ師トシ醫術ヲ學ブ。年二十一父ヲ失フ、後チ母ノ稱賛ニヨリ西遊六年ニテ歸阪セリ、年三十四、母モ亦病死ス。年四十一小關氏ノ女阿柔ヲ娶ル、越テ二年小關氏病デ歿ス、是歲九月兒ヲ他ニ托シテ江戸ニ遊ビ、翌年ニシテ西歸シ京都ニ復ル、年四十八。再ビ小關氏ノ女ヲ娶ル、年五十二、病アリテ城崎溫泉ニ遊ブ、文化五年十二月二十五日歿ス、年五十四。

第七十七　小野蘭山

名ハ職博、字ハ以文、蘭山又朽翁子ト號ス、通稱喜内ト云フ、後チ蘭山ヲ以テ通稱トス。享保十四年八月二十一日京都ニ生マル、年十六松岡恕庵ニ業ヲ受ク、未ダ二年ナラズシテ恕庵死ス、蘭亭獨學、年二十五、河原町夷川ノ北ニ居ヲトシ帷ヲ下ス。

寛政十一年幕府先生ヲ江戸ニ徵シ、醫學館ニ本草ヲ講ゼシメ、月俸三十圓歲銀二十枚ヲ賜フ。寛政十二年ノ春ヨリ文化三年ノ夏ニ至ルマデ諸國ヲ跋渉シ、五旬或ハ十旬ニシテ歸リ、其採ル所ノ品目ヲ疏シテ綱シテ一書ヲ成シ上進ス。常野採藥志採藥志ノ書コレナリ。

寛政元年八月門人相集マリテ先生ノ六秩ノ祝筵ヲ張ル、同十年古稀ノ賀宴ヲ開ク、此時先生草木十種ノ新考ヲ撰ブ、門人百口傳讀稿寫シテ上梓ス、題シテ十品考ト曰フ。文化五年八秩ノ賀筵ヲ開ク、著筵小讀ノ著アリ。文化七年一月二十七日朝流涕トシテ逝ク、年八十二。

著ス所ニ、本草綱目啓蒙飲膳摘要十品考百品考藥名考藥筵小讀廣參說本草譯說本草會識本草紀聞本草綱目拾遺格物微松軒偶筆衆芳軒雜錄アリ。

第七十八　緒方春朔

名ハ維章、洞雲軒、濟庵、混郷ノ別號アリ。本姓丸林氏、筑前秋月ノ人、長ジテ長崎ニ往キ、吉雄氏ノ門ニ入リ種痘法ヲ修メ、刻苦多年其奇妙ニ達ス。寛政元年、緒方光齋ニ嫁レテ其姓ヲ冒ス、黒田侯ニ仕ヘ、信任厚シ。是ヨリ治ク藩内ニ種痘ヲ實施シテ人命ヲ救濟セリ、ソノ法創始ニ出ヅ。兼ネテ天文推歩ノ學ニ通ジ、天球地球用儀ヲ製シテ人ヲ驚嘆セシム、寛政六年江戸邸ニ祇役セシ以來、種痘術ヲ都ニ傳ヘテ聲名嘖々タリ。

文化七年一月二十一日歿ス、享年六十三。

第七十九　多紀安長

名ハ元簡字ハ廉夫、通稱安長、桂山ハ其號ナリ、別ニ樅窓ト號ス、其書齋ヲ聿修ト名ク。父ノ業ヲ承ケテ苦ダ醫學ヲ嗜ミ、專心力學精勵人ニ過グ。寛政二年侍醫トナリ、法眼ニ敍セラル、同十一年、父藍溪致仕セシヲ以テ其祿秩ヲ襲フテ侍醫兼督醫學事トナル。享和元年上旨ニ悖ヒ侍直ヲ罷ム、文化七年再ビ召サル、其年冬十二月二日俄ニ病ンデ歿ス、享年五十六。

著ス所ニ、素問識、靈樞識、傷寒論輯義、金匱要略輯義、扁倉偉象考、脈學輯要、醫賸、樅窓類抄、挾穴輯要、觀藥方檜中、韓素問解、題、救急選方、聿修堂讀書記、痢疹三書、本朝經驗方、疑脚氣辨惑論、日光親程見聞記、文集アリ。

第八十　海上隨鷗

名ハ領三伯ト稱ス、本姓ヲ稲村ト云フ、因州侯ノ醫員ナリ。嘗テ蘭學階梯ヲ見テ感奮志ヲ立テヽ、江戸ニ來リ、大槻磐水ノ門ニ入リ、能ク其學ノ蘊奥ヲ極ム。先生蘭學辭書ノ據ルモノナキヲ遺憾トシ、蘭人ハルマノ辭書ヲ譯シ、漸ク一部八萬語餘辭ヲ完成シ、寛政八年始メテ活版トナシ、三十餘部ヲ社友ニ頒ツ、江戸ハルマト呼ブモノ之ナリ、後チ門人藤森晋山、同門ノ士小森桃塢ト謀リ、刪補シテ三萬辭トナシ譯鍵ト題シテ世ニ行フ。先生故アリテ任ヲ致シ、下總海上郡ニ浪遊シ、名ヲ海上隨鷗ト更メ、後チ京都ニ來リ、大ニ蘭學ヲ唱道ス、ソノ名大ニ振ヒ從遊スルモノ數百人ニ及ブ。京都ニ蘭學アルハ實ニ先生ヨリ始マル。

宇田川榕菴年壯ナルトキ放蕩不羈、素行修ラズ、既ニシテ窮困自活スルコト能ハズ、先生之ヲ憐ミ、蘭書ヲ傳譯シ以テ口ヲ餬セシム、ハルマ字解ノ著ハ榕菴ノ功多キニ在リトス。

文化八年正月十六日病デ歿ス。

第八十一　竹内新八

諱ハ持規通稱新八、高巖院ト呼ブ。信州諏訪ノ人、世々眼科ヲ以テ聞エ、江戸ノ土生玄碩、尾張馬嶋ノ明眼院、筑前惠美ノ田原嵩伯ト並ビ稱シテ眼科ノ四大家ト謂レタリ。文化八年三月四日ヲ以テ歿ヲ易ユ、享年七十六。

第八十二　山本封山

名ハ有貞字ハ關親一字中郎、封山ト號ス。越中高岡ノ人、寛保二年生マル、本姓日下氏、幼ニシテ業ヲ室鳩巣ノ門人ニ受ク、又曲直瀬道三ノ徒ニ從テ方伎ノ術ヲ學ビ、年冠ヲ踰ヘテ京都ニ來リ、吉益東洞ニ就キ學大ニ進ム。山本亘柳共ニ才ヲ愛シテ關トナス、由テ山本氏ヲ冒ス。諸侯聘スレドモ出デズ。毎旦鷄鳴、乃チ起キ手カラ古書ヲ讀シ、飯後徒弟ヲ集メテ經ヲ講ズ、午後診療ニ從事ス、此ノ如キコト數十年一日ノ如シ。

文化十年三月七日病ヲ以テ家ニ歿ス、年七十三。

第八十二　山本東洞

第八十三　吉益南涯

諱ハ猷、字ハ藝夫、謙齋ト號ス、幼名大功、後周助ト稱ス、東洞ノ長子ナリ。疾醫ノ道ヲ父東洞ニ受ケ大ニ進ム、年二十四ノトキ、父東洞歿ス、乃チ箕裘ノ業ヲ嗣ギ二弟ヲ育テ諸生ヲ教ユ、從遊ノ士多ク、門風大ニ振フ。年二十八ニシテ方機ヲ著シ仲景藥方ノ活用ヲ示ス。天明八年京都親藩ノ災ニ遇ヒ家産ヲ炎焦ス、乃チ移リテ大阪船場伏見町ニ僑居ス、時ニ年三十ナリ。市民ノ來リテ治ヲ乞フモノ日ニ數百人、其業大ニ行ハル。其居ル處ノ大阪ハ京都ノ南ニ位シ水運ナルノ故ヲ以テ南涯ト號ス、年四十三ノトキ大阪ノ僑居ヲ弟辰ニ讓リ、自ラ京都ニ還リ三條東洞院西ニト居セリ。東洞ノ萬病一毒說ノ未ダ全カラザル所アリシヲ以テ更ニ氣血水ノ三物アリ、毒之ニ乘ジテ初メテ證ヲナスノ說ヲ唱ヘ、仲景藥方ヲ說キ、氣血水藥徵ヲ著セリ。

先生ノ子弟ヲ敎フルヤ、鄭寧反復、諄々之ヲ示シ、懇諭倦ム色ナシ。門人ノ籍ニアルモノ凡ソ三千餘人、名ヲ成スモノ尠ラズ、賀屋恭安、中川修亭、大江廣淳、横田元正、森岡青洲、森岡鹿城、山本永吉、武貞夫、和田元庵、賀川玄悦、難波抱節、赤石希鄂等ソノ選ナリ。

文化十年六月十三日病ヲ以テ其家ニ歿ス、享年六十四。著ス所ニ傷寒論精義、輯光傷寒論發微、氣血水藥徵、方機、方廓、方議、辨觀症辨疑アリ。

第八十四　村井椿壽

字ハ椿、又大年、椿壽ト通稱シ、琴山ト號ス、又原診館六清眞人、清脳道人ノ別號アリ。早クヨリ父見朴ニ就キ方術ヲ學ブ、父ノ歿後再春館ノ助講ヲ命ゼラルレドモ辭シテ就カズ、京都ニ出テ吉益東洞ノ塾ニ遊ビ、留マルコト數旬ニシテ還ル、後又往テ數ヲ受ク。東洞其才ヲ偉トシ關西古方ノ任ヲ囑ス、歸ルニ及ビ傷寒論ヲ講ズ、醫名日ニ著ハル、專ラ師說ヲ闡述シ、著書甚ダ富ム、年五十餘ニシテ侍醫トナル、年八十二ニシテ致仕ス、

文化十二年三月一日病ンデ其家ニ歿ス、享年八十三。

著ス所ニ、救藥發藝道二千年問目篇、方極圓定藥徵、圓定類聚方、圓定傷寒、圓定傷寒講義、扁鵲傳考、和方一萬方、方極圓診錄、類聚方講義、琴山雜記、扁鵲年表、診餘漫錄アリ。

第八十五　池田瑞仙

名ハ獨美字ハ善飛錦橋ト號ス。先生八歳ニシテ父ヲ喪ヒ、母ノ爲ニ育ハル、十二歳ノトキ岩國侍醫桑原玄仲ニ從テ大方及ビ痘科ヲ受ケ物ヲ外科ヲ學ビ、又阿蘭ノ方ヲ知レリ。自ラ謂ラク泛ク雜科ヲ學テ衆病ヲ療センヨリモ、寧ロ痘疹一術ニ留メ、家學ヲ百世ニ傳フルニ如カズト、茲ニ於テ戴氏ノ秘訣ヲ修メ大ニ發明スル所アリ。寶暦十二年安藝嚴島ニ移ル、時ニ年二十八、痘疾偶マ流行シ、家術ヲ施シ大ニ效アリ、十三年母死ス。安永六年、播磨二州ニ痘疫大ニ行レ、先生ヲ嚴島ヨリ迎フルモノアリ、乃チ浪華ニ寓ス、時ニ年四十。浪華ノ大醫齋藤幸庫小松久吾節ヲ折テ門ニ入リ學ブ、先生其篤誠ニ感ジテ秘訣ヲ授ク。寛政四年、京都ニ遊ブ、時ニ年五十五ナリ。寛政九年十二月幕命ヲ蒙リ、翌年一月江戸ニ至ル、時ニ六十四、新ニ痘科ヲ建テ先生ヲ以テ之ニ當ラシメ、祿二百俵ヲ受ク、又痘書ヲ醫學館ニ講ズ、在官二十年、文化十三年九月歿ス、年八十三。

著ス所ニ痘科辯要、痘疹或草痘科鑑刪正治驗錄アリ。

第八十六　杉田玄白

名ハ翼、字子鳳、九幸又ハ鶴齋ト號ス。若州ノ人、江戸ニ生マル、年十七八歳ノ頃四玄哲ニ就テ外科ヲ學ビ、又宮瀧龍門ニ從テ經史ヲ學ブ。年三十七、蘭學創始ノ業アリ、前野蘭化ト共ニ蘭醫パブル及ビ通詞西吉雄ニ親炙シ益々和蘭醫學ヲ修ム。明和八年三月四日一婦人ノ屍ヲ千住驛外小塚原ニ解キ、續イテ、同志ト共ニタルムスノ解剖圖譜ヲ翻譯セントシ、年ヲ經ルコト四年、稿ヲ易ユルコト十回、安永三年秋八月ニ至リテ解體新書ヲ刊行セリ。

文化十四年四月十七日沒ス、享年八十五。

著ス所ニ、蔦家大成、蘭學事始、形影夜話、狂簫之舞、野叟獨言アリ。

第八十七　杉田玄白（木像）

史傳前ニ出ヅ。

第八十八　三輪東朔

名ハ東朔字ハ望蹠漣草庵ト號ス。山城ノ人醫ヲ志シ、諸邦ヲ遊歷ス、北總銚子ニ足ヲ停メ、慶人ヲ治セリ。後江戸ニ移リ門戸ヲ張リ業大ニ行ル。

嫡男大神能明ガ文政二年ニ圖像ニ書シタル所ニヨレバ、大神醫明ハ大和國三輪大明神之社務高宮主水ノ一族、山城國宇治郡南山科勸修寺住人ニテ、勸修寺宮觀寶法親王ニ仕奉シタル植田佐渡法橋ノ嫡男三輪彈ト云フ人ナリ。齡八十ヲ越ユ、著ス所ニ刺絡開見錄アリ。

第八十九　原南陽

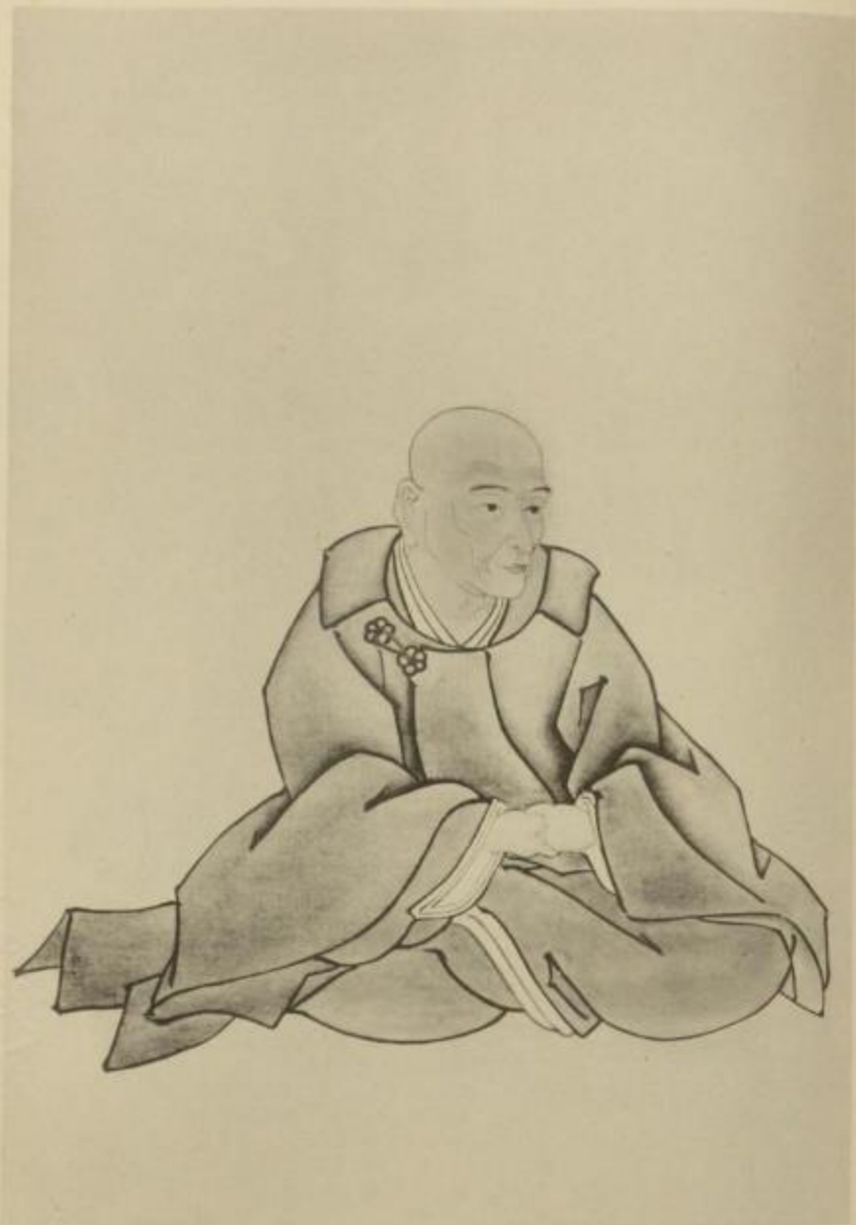
名ハ昌克字ハ子柔、通稱玄碩、南陽ト號ス。先生年壯ニシテ京都ニ遊ビ、山脇東門ニ醫方ヲ受ケ、又產術ヲ賀川氏ニ修ム。後チ江戸小石川ニ僑居ス、業未ダ行レズ、窮乏ノ餘、按摩針治ヲ以テ生業トス。先生性酒ヲ嗜ムコト甚シ。時ニ水戸侯、魯ニ中クリ藥ニ病ム、侍醫舉ゲテ診療スルモ效ナシ、侍臣其先生ヲ薦ム、先生診シテ侯ノ病狀ニ、遂ニ拔擢シテ侍醫トナシ、五百石ヲ賜フ。先生ノ醫經ヲ治ムルヤ、章句ヲ事トセズ、專ラ適用ヲ主トセリ、先生侍醫ノ職ニ在ルコト三十餘年、文政三年八月十六日病デ歿ス、享年六十八。

先生、其先昌俊甲斐ノ名稱タルヲ以テ、其後ヲ承ケ方伎ニ食スルヲ耻ヅ、其子昌綏祿ヲ襲フニ及ビ、侯命ジテ改メテ諸士ノ班ニ就カシメ以テ其志ヲ成ス、昌綏遂ニ軍師ト成ル。

著ス所ニ、醫事小言、經穴彙解、養桂偶記、痴狗傷寒、傷寒夜話、痘瘡策、脚氣編、養記、藥語、西遊雜記、解毒奇功方、等々方記、碧草アリ。

第九十　本木蘭汀

名ハ正榮、字ハ子光、蘭汀ト號シ、又聯芳軒ノ別號アリ、庄左衛門ト呼ブ、仁太夫良永ノ子ニシテ、明和七年ニ生マル。安永七年稽古通詞、寛政五年小通詞並トナリ、翌五年同助役トナリ、文化二年大通詞ニ進ミ、同五年ヅ|フト共ニ江戸ニ來リ、天文臺ニ出仕シ、十二月歸崎ス。同六年露語英語ノ修學ヲ命ゼラル。文政五年三月十五日歿ス、享年五十六。



第九十一　片倉鶴陵

字ハ深甫、元周ト通稱ス、相州藤井縣ノ人ナリ、世々醫ヲ以テ業トス。年十二江戸ニ來リ、多紀玉池、及ビ多紀藍溪ニ學ビ、ソノ子康夫ト共ニ文ヲ井上金峨ニ學ブ。年二十五居ヲ白金街ニトシ業ヲ開ク、治ヲ請フモノ頗ル多ク、家事頗ル饒ナリ。天明八年火災ニ罹リ、家産落盡ス、發憤シテ京都ニ遊ビ、産科ヲ賀川氏ニ學ビ、其蘊奥ヲ窺フ。東歸ノ後、其術ヲ精究シ以テ後生ヲ誘掖ス、生徒ノ業ヲ受クルモノ、病者ノ治ヲ請フモノ共ニ戸外ニ溢ツ。後庭姙婦アルニ當リ、鶴陵ヲ召シテ按腹セシメ、期ニ及ビテ速生ス、乃チ白銀若干ヲ賜ハル。鶴陵年六十ニ近キトキ發脊未ダ潰セザルニ、相模門人某ノ病ヲ聞キ强行ス、家人之ヲ諫ムレドモ聞カズ、之ヲ治シテ歸ル。會津少將ノ疾ムヤ、之ヲ治シテ浹旬ニシテ瘥ユ、後少將又國ニ在リテ疾ム、來治ヲ乞フ、時正ニ嚴冬ニ屬シ、江邊積雪殆ンド堵ユベカラズ、鶴陵病已ニ篤キモ、然モ猶能ク命ニ應ズ、門人皆故皆之ヲ危マザルハナシ、怡然トシテ行ク。ソノ會津ニアルヤ、簡過優渥皆異數ニ出ヅ、人皆之ヲ艷羨セリト。文政五年九月十一日病デ、其家ニ歿ス、年七十二。

著ス所ニ、産科發蒙、癰瘍新書、傷寒啓微アリ。

第九十二　片倉鶴陵（木像）

史傳前ニ出ヅ。

第九十三　大槻玄澤

名ハ茂質字ハ子煕陸奥ノ人、家世々磐井川上ニ居ルヲ以テ自ラ磐水ト號ス。先生年十三、一ノ關藩建部清庵ニ從テ醫ヲ學ブ、後杉田玄白ノ門ニ入ル、又長崎ニ遊ビ蘭學ヲ修ム。時ニ前野良澤ノ名一時ニ譁シ、玄澤亦從テ業ヲ受ケ、大ニ此學ヲ闡ク。著ス所ノ蘭學階梯出ルニ及ビテ、世ノ蟹行文ニ志ス者之ヲ宗トセザルハナシ。天明六年仙臺侯聘シテ侍醫トナス、文化八年幕府命ジテ蘭書ヲ譯セシム、歲毎ニ銀二十錠ヲ受ク、九年俸又祿ヲ加ヘテ三百石トナス。文政五年幕府又其譯述ノ勤勞ヲ錄シテ俸五口ヲ與フ。文政十年三月晦日、疾ヲ以テ歿ス、享年七十一。

著ス所ニ、蘭學階梯、重訂解體新書、瘍醫新書、蘭東事始、蘭學逕、環海異聞アリ。

第九十四　多紀柳洸

名ハ元胤、通稱安元、幼名ハ彌生之助、又安良、又安長、字ハ紹翁、柳洸ハ其號ナリ。桂山多紀元簡ノ第三子ニシテ、多紀氏第八世トナレリ。文化二年十二月二十二日初メテ將軍文藝公ニ謁ス、八年正月父元簡遽ニ病ミテ歿セシヨリ、三月ソノ職ヲ嗣ギテ醫學督事トナリ、醫學會ノ事務ヲ總攬シ、外班ニ列シ、俸三十人口ヲ賜フ。文政五年十二月十六日法眼ニ敍セラレ、六年八月法親王ニ隨從シテ日光ニ詣ル、同十年六月三日病ヲ歿ス、年僅三十九、平塚城官寺先塋ノ次ニ葬ムル、長子元昕後ヲ承ク、醒湖先生之レナリ。先生學問該博、著述等身ニ及ブ、家人ノ生業ヲ以テ意トナサズ、雨フレバ傘シテ机ニ憑レリト云フ。

著ス所ニ、八十一經經疏證、體證藥證、疾證、名醫公案、醫籍考、柳洸文集アリ。醫籍考ハ朱錫鬯ノ經義ニ倣ヒ、先ヅ書名ヲ擧ゲ、次グニ卷數、著作刊行ノ年代、及ビ其存佚ヲ以テシ、次グニ諸家ノ序跋及ビ例目錄ヲ以テシテ其書ノ由來及ビ書中ノ內容ヲ詳細セリ。全部百卷未ダ梓ニ上ラザルヲ以テ世間ニ傳ハルモノ少シト雖、甚ダ吾人ニ有益ナリ。

第九十五　華岡鹿城

名ハ文麟字ハ子徵鹿城ト號ス、青洲ノ弟ナリ。兄ト共ニ吉益氏ノ門ニ在リ、後チ大阪ニ居リ盛名アリ。華岡氏紀州大阪ノ二家アリ、並ニ醫ヲ以テ樹立ス。

第九十六　川越衡山

諱ハ正淑字ハ君明一字ハ大亮衡山ト號ス、京都ノ人。中西深齋ノ門ニ入リ、更ニ師說ヲ數術修飾シテ一新面ヲ開キタリ。文化六年十二月典藥寮醫師ニ補セラレ、文政六年正月從五位下佐渡守ニ至ル、文政九年冬中風ヲ患フ、同十一年秋舊疾再發同八月九日家ニ卒ス、年七十一、鳥部山實報寺ニ葬ル。

著ス所ニ傷寒辰證式、傷寒藥品證用傷寒奥旨古方拔萃、說方拔萃傷寒論正文、金匱要略正文アリ。

第九十七　伊澤信恬

字ハ澹甫、通稱驛安、蘭軒ト號ス、其他蓋齋都梁笑仙遠姑射山人ノ數號アリ。堂ヲ酌源堂、又三養堂ト號ス、福山ノ人ナリ。文化ノ初年、柳原主計頭ノ長崎巡行ニ隨行シテ翌年長崎ニ遊ビ、程赤城、胡兆新ト風交ス。醫ハ目黒道琢、木草ハ赤荻由儀、大田長元ニ學ビ、又多紀桂山ニ師酬ス。儒學ハ糸豐洲ニ學ブ。長崎ヨリ歸リテ福山侯ノ侍醫トナル。後足痛ヲ患ヒ、遂ニ療養ヲナス。因テ直醫ノ列ニ加ハリ、儒官ヲ兼ス。編選序跋等ノ作文ニ至リテハ君侯自ラ刪正ヲ命ズ。病用ノ節ハ療養ノマヽニテ君前ニ出ブ。信恬短軀ニシテ且ツ鄙ヲ嫌ヒ、帶ビザルノ癖アリ、或時君前ニテ盥漱ヲ現ス。依テ自ラ被ル所ノ肩掛ヲ賜リシコトアリ、出格ノ恩ナリ。文政十二年三月十七日歿ス、年五十三。

第九十八　各務文獻

字ハ子喬、通稱相二、大阪ノ人。先生嘗テ慨シテ曰ク古ニ未ダ有ラズシテ、今亦未ダ行レザルモノハ整骨科ナリト、思フ該術ニ亨シ、研鑽數年、大ニ得ル所アリ、斯科ノ泰斗ヲ以テ稱セラル。先生以爲ラク、骨節ノ理ヲ發明スルニ在ラズンバ、此術ノ秘訣ヲ得ベカラズト、乃チ自カラ刑屍ニ就テ剖キテ親ルコト數十回、以テ其運轉機能ノ理ヲ推究シ、更ニ或ハ器械ヲ製シテ治方ニ便シ、或ハ繃帶ヲ裁シテ搖動ヲ護ル、何レモ皆創意ニ出テ、古來治シ難シトセシモノ治セズト云フコトナキニ至レリ。文政十二年十月十四日病ンデ歿ス、年六十五。

先生整骨ノ術ヲ授クルニハ眞骨ニ就テ深ク按撫スルニ非ラザレバ則チ得テ知ルベカラザルモノアリ、然レドモ眞骨ヲ求ムルコトノ難キヲ以テ、良匠ニ命ジ木ヲ以テ全骨ヲ造ラシメ、之ヲ坐側ニ置キテ諸生ヲ教授セリ。幕府醫官石坂竿齋之ヲ見テ工妙眞ニ逼マレリト歎稱シ、骨經ト題スル一書ヲ著セリ。

先生整骨新書ヲ著シ、文化七年五月ニ成リ、其年十二月刊行ス、發明ノ論說治術皆此中ニ在リ。別ニ各骨眞形圖一卷ヲ附ス凡ソ三十三圖皆骨骸ノ實景ヲ寫セリ。婦人內景圖一卷アリ。

第九十九　畑柳泰

名ハ維嶺、字ハ世貞、橘洲ト號ス。本姓ハ上林、宇治ノ人、年十三自ラ奮テ曰ク男子名ヲ成サント欲セバ、何ゾ鄙郷ニ蟄居スベケンヤト、江戸ニ出デテ儒學ヲ修ムルコト數年、已ニシテ以爲ラク、栖々覊旅久シク温情ヲ奉ゼズ、京都ハ父母ノ居ニ近シ、是レ吾ガ身ヲ投ズルノ地ナリト、遂ニ意ヲ決シテ京都ニ歸住ス。時ニ京都、人文濟々互ニ雄視ス、柳泰猶少壯ニシテ其間ニ馳騁シ、諸子ノ推重スル所トナレリ。時ニ醫學院畑黄山醫學精妙ヲ以テ尚藥奉御トナル、子ナシ柳泰ノ人トナリヲ愛シ養テ嗣トス、時ニ年二十一、享和三年八月十日法橋ニ敍シ、文政十年十月二十九日法眼ニ進ム、天保三年三月十日歿ス、年六十二。

著ス所ニ、素問槩畧、傷寒論詮註、心醫方考方便アリ。

第百　中神琴渓

名ハ孚、通稱右内、字ハ以國、琴渓又ハ生々堂ト號ス。近江ノ人、出デテ大津醫家中神家ヲ嗣グ、居常貧困ナリ、年三十餘ニシテ發憤、醫ヲ以テ名ヲ立テントス、偶々古方便覽ヲ獲、大意ヲ得。後チ京都ニ移住ス、時ニ寛政三年、先生年四十九、堺町通四條南入ニト居シ門戸ヲ張リ、古方家ノ説ヲ唱ズルモ纖塵ヲ守ラザリキ。後江戸ニ遊ビ、又諸國ヲ遊歷シ、遂ニ近江ノ田上ニ隱ル。更ニ故里山田ニ歸リ、天保四年八月四日病ンデ歿ス、年九十一。著ス所ニ、生々堂醫談、生々堂傷寒約言、生々堂養生論、生々堂治驗、生々堂雜記アリ。

第百一　賀川蘭齋

名ハ瀋定、字ハ子清、蘭齋ト號ス、有齋ノ次男ナリ。安永元年十一月生マル、父ノ術ヲ傳ヘテ其名大ニ彰ハル。文化十二年十一月典藥寮醫員ニ擬デラレ正七位下ニ敍シ、武藏大掾ニ任セラル、翌年二月女醫博士ニ補セラレ攝津介ニ遷任シ、從六位下ニ敍セラレ、後累進シテ正六位下ニ至ル。蓋シ女醫博士ノ官闕ルコト久シ、是ニ至リテ之ヲ復セルナリ。天保四年十月十九日病デ歿ス、享年六十三。探領器ヲ發明ス。

第百二　宇田川榛齋

舊姓安岡、名ハ璃、字ハ玄眞、榛齋ハ其號ナリ。伊勢ノ人、明和六年十二月廿八日生ル、後チ江戸ニ出デテ津山藩醫宇田川玄隨ノ門ニ入リ、後チ大槻玄澤ニ就テ蘭醫方ヲ學ブ、又嘗テ弟春泰ノ家ニ寓シ、次デ桂川甫周ノ家ニ移ル、杉田玄白先生ヲ養フテ子トナシ、女ヲ以テ之ニ配ス、後故アリテ去ル。之レヨリ、困厄太甚ナリ、玄白ノ子伯元、稲村三伯等憐テ之ヲ庇シ備フテ蘭書ヲ譯セシム。寛政九年宇田川玄隨歿シテ嗣ナシ、乃チ親故集リ議シテ先生ヲシテ其後ヲ承ケシメ、宇田川氏ヲ冒ス。先生ノ門ニ來リ學ブモノ常ニ數百人、名ヲナセルモノ甚グ多シ、坪井信道、藤井方亭、箕作阮甫、青木周弼、戸塚靜海等世ニ鳴レリ。

稲村三伯、嘗テ蘭學辭書ノ後進ニ便ズベキモノナキヲ憂ヒ、ハルマノ辭書ヲ譯セントス、先生乃チ同田甫說ト力ヲ戮セテ三伯ヲ助ケ、拮据數年ニシテ書成ル、世ニ所謂江戸ハルマ之レナリ。

天保五年十二月四日病デ歿ス、享年六十六。弘道院昔濟潤生ト謚ス。

著ス所ニ、遠西醫範、醫範提綱、和蘭藥鏡、遠西名物考アリ。

第百三　山脇東海

名ハ之釣字ハ子鋒、東海ト號ス、後チ玄冲ト改ム、山脇第五世道作ナリ。寶暦七年九月二十二日ニ生マル、寛政三年三月十一日法眼ニ叙セラル。數度解剖ヲ行ヘリ。天保五年四月一日夜俄ニ卒中シ、同二日卒ス、享年七十八歳。

第百四　奥劣齋

名ハ之英字ハ子薫劣齋ト號ス。醫ヲ山脇東門ニ學ビ、産術ヲ賀川子玄ニ受ケ、遂ニ家ヲ興ス。先生世ノ横産ヲ理ムルモノノ鈎ヲ用ヒ生ヲ傷ツクルヲ痛ム、深慮辟思、別ニ一法ヲ創作シ、名ケテ雙全術ト云ヒ、母子ノ横夭ヲ救ヘリ。文政甲申法橋ニ敍ス、己丑ノ歳准三后、産后屎閉、先生カテーテル(ヲ用ヒテ效ヲ奏シ法眼ニ進ム。安永九年五月二十八日ヲ以テ生マレ、天保六年九月四日疾ヲ以テ歿ス。

著ス所ニ、産論校註女科證治、嬰孩生育産科外科秘錄、産科内術、産科圖記、胎生鉤胞秘訣アリ。又校スル所ニ婦人大全良方、保産心法アリ。

第百五　華岡青洲

名ハ震字ハ伯行、通稱隆賢、青洲ト號ス。紀州加賀郡西野山村ノ人、出デテ京都ニ遊ビ、吉益南涯ニ從ヒ、又大和見水ニ就キテ外治ヲ修メ、其他諸家ノ說ヲ參酌シテ常師ナシ、刻苦碎礪スルコト數年、去テ紀伊ニ歸リ、內外合一活物窮理ノ說ヲ唱ヘ、古今漢醫ヲ折衷シテ活用シ、外治術ニ大手腕ヲ揮フ、醫生來リ敎ヲ請フモノ千百三十餘人ナリ。文政二年、紀州侯ニ聘サレテ其醫員トナリ、侍醫ニ準ジ、其邑ニ居ルコトヲ許サル、蓋シ破例ノ特典ナリ、天保六年十月二日病デ家ニ歿ス、年七十六。

青洲大手術ヲ施スノ前ニ一種ノ麻醉劑ヲ發明シ、麻沸湯ト稱セリ。リストンガ佐的兒麻醉ヲ用シニ比セバ三十六年前ノコトナリ。

著ス所ニ、瘍科瑣言、瘍科神書、疔瘡辨明、乳癌辨、天刑秘錄、傷寒精義、青洲醫談、瘍科方筌、腎方便寮、丸散方、青囊秘錄等アリ。

第百六　華岡青洲（還暦賀像）

史傳前ニ出ヅ。

第百七　橋本宗吉

宗吉ハ初名直敬後ニ郎ト改ム、字ハ伯紘、伯軒ト號ス。大阪ノ人、北堀江ニ住ム、小石元俊、間五郎兵衛ノ援助ニヨリ家資學費共ニ辦ゼラレ、東遊シテ大槻磐水ノ門ニ學ブ、實ニ寛政二年ニシテ、宗吉時ニ年二十八ナリ、斯年ナラズシテ學大ニ進ミテ大阪ニ還ル。同七年宗吉始メテ醫業ヲ平坂ニ開キ、且ツ蘭語ヲ教授ス、大阪ニテ蘭學ヲ教授セシハ宗吉ヲ以テ嚆矢トス。明年嘱蘭新譯地球全圖ヲ刊行ス、享和二年ウツムデルハンリース藥劑書ヲ譯シテ蘭科內外三法方典ヲ著シ、文化ノ初遂ニ全部六卷ヲ上梓セリ。

文政十二年豐田貫ノ巫女ガ妖術ヲ行フ、人呼ンデ切支丹婆ト云フ、大坂町與力大鹽平八郎捕ヘテ死刑ニ處ス、宗吉モ與黨ナリトノ嫌疑ヲ受ケ獄ニ下サル、後免レテ舊業ヲ執ル、天保七年五月一日沒ス、年七十四。

著ス所ニ、西洋醫事集成實函二十四卷華蠻通志二卷遠西雜俎三卷、西洋產育全書十卷解體書七卷、シヨメールノ奇才圖卷內景洞觀二卷アリ。

第百八　竹中南峰

諱ハ潤字ハ子良通稱文則後文輔ト改ム、南峰ハ其號ナリ。紀州田邊ノ人明和三年十二月十二日ニ生マル、弱冠ニシテ京都ニ出デ和田東郭ノ門ニ入リ術ヲ修ム、又治痘ノ術ヲ池田錦橋ニ受ク。天保七年七月八日歿ス、年七十一。其墓ハ京都鳥邊山延年寺ニアリ。

第百九　最上德内

名ハ常矩、字ハ子員、號山又ハ白虹齋ト號シ、德内ト通稱ス。出羽最上ノ人、寶暦四年ニ生マル、家業農ヲ營ム、年十四、武士ヲ以テ立身セント志セリ、年二十六、江戸ニ出テ幕府醫官山田立良ノ僕トナリ、傍ラ醫業ヲ學ビ、本田利明ノ塾ニ入リ、天文曆算ヲ學ブ。天明四年、利明ニ代リ、蝦夷視察使ノ一行ニ隨フ、先生夙ニ蝦夷開拓ノ志アリキ、其ヲシテ蝦夷ノ地理風俗ヲ究メ、自ラ各地ヲ踏調セリ。

天保七年九月五日、歿ス、享年八十三。本郷駒込蓮來町蓮光寺ニ葬ル。

著ス所ニ、度量衡說論、語彙訓、蝦夷草紙、同後編、蝦夷島言葉、來經古今文、異同考、赤人問答、八線眞數表、八線對數表、調殖秘書、松前史略、大調表解アリ。

第百十　江馬蘭齋

名ハ春瑛、字ハ元蕚、通稱春齡、蘭齋ト號ス。本姓鷲見、美濃大垣ノ人、幼ニシテ大垣醫官江馬元澄ニ養ハル、由テ江馬氏ヲ冒ス。前野、杉田ノ江戸ニ和蘭醫學ヲ唱フルヲ聞キ、憤然トシテ驟起シ、江戸ニ赴キ蘭化ノ門ニ入ル時ニ年四十七、居ルコト年餘、歸郷シテ業ヲ開ク。諺此相告ゲテ曰ク亂參醫術ヲ以テ疾病ヲ醫スト、蓋シ亂暴蘭方ト國音相近シ、故ニ之ニ託シテ彼ヲ罵レリ。一人ノ治ヲ乞フモノナシ、偶々京都西本願寺法主疾篤シ、先生ヲ召ス、先生診シテ尚治スベシト、卽チ藥ヲ進メテ治驗アリ、先生ノ名大ニ天下ニ顯ル。天保九年病デ歿ス、年九十二。

著ス所ニ、五液診法、泰西熱病集譯、水腫全書アリ。先生嘗テ蒸氣浴ヲ造リ、霍亂病者ヲ療セリ、遺法今尙遺リ、大垣ニ行フモノアリ。

第百十一　百々漢陰

諱ハ俊德、字ハ克明、通稱内藏太、確齋ト號ス。京都ノ人、安永三年京都ニ生マル、少シテ醫學ヲ父ヨリ受ケ、傍ラ皆川淇園ノ門ニ遊ブ。年二十九、父ノ命ニ從ヒ、別ニ一家ヲナシテ刀圭ノ業ヲ修ム、業大ニ行ハル。

天保十年四月十三日病デ歿ス、享年六十六。洛西祐正教寺ニ葬ル。

著ス所ニ醫粹類纂、本草綱目類抄、奇效方、未病藥編、醫粹約範、校定温疫論、疫論、直疫論、翼訣、演疫論、藥田問方、醫案、學步、確齋叢筆、醫粹方、雨漢陰存稿アリ。

第百十二　山脇東圃

字ハ子建名ハ玄悦蒙督後道作ト改ム。天明元年ニ生マル。天保十三年歿ス享年六十二。

第百十三　岩崎灌園

名ハ常正、一ニ萬字ハ士友通稱源藏灌園ト號ス、一ニ玄堂ト別號ス。江戸ノ人、天明六年六月二十六日下谷三枚橋ニ生マル、小野蘭山ノ門ニ入リ最モ植物ニ通ジ、自ラ後園ヲ拓キテ多クノ草木ヲ栽培接灌シ、積年工夫練熟シ其發明スル所多シ。天明十三年一月二十九日歿ス、享年五十七。

著ス所ニ、本草圖譜、本草窒要救荒圖譜、續救荒野譜、通解梅花寫生、草木育種アリ。

第百十四　小森桃塢

名ハ初メ吉貞、後チ任ト改ム、桃塢又鶴齋ト號ス。美濃外淵ノ人、天明二年四月三日生マル、本姓大橋氏、伏見ニ開業スル小森吉晴ニ乞ハレテ寛政三年九月其養子トナル。夙ニ醫學及ビ內外學ニ通ジ、蘭學ニ熟ス。寛政十一年江馬春齡ニ接見シ西洋醫學ノ精微ヲ知リ、海上隨鴎ニ從ヒ蘭方ヲ學ビ、後チ長崎ニ遊學シテ益々獲ル所アリ。文化十一年京都ニ還リ、藤林晉山ト交リ相共ニ協心戮力シテ斯道ヲ起サントノ約セリ。文政三年二月召サレテ侍醫トナリ、從六位下肥後介ニ任官シ、同十一年雜殿助ニ進ミ、轉テ正六位下ニ敍セラル。天保十四年三月二十三日病歿ス、享年六十二。變發セズ、五月十二日從五位下信濃守ニ敍セラル。京都禪林寺ニ葬ル。

葬ス所ニ、蘭方樞機、病因精義、泰西方鑑、病診要訣アリ。

第百十五　平田篤胤

通稱大角又大藏ト云フ、氣吹舍合ト號ス。安永五年八月羽後久保田ニ生マル、本姓大和田氏、幼ニシテ經書ヲ中山榮茂ニ學ブ、又醫ヲ叔父大和田祐胤ニ修ム。年二十始メテ江戸ニ出デテ學事ニ親シム、偶々備中松山藩士平田篤穩ニ知ラレ、請ハレテ其嗣トナル。文化元年惟フ所アリ、徒弟ヲ調ヘ、天保元年佐竹侯ニ仕フ。天保十四年九月十一日病歿ス、享年六十八。

第百十六　宇田川榕菴

諱ハ榕榕庵ト號ス。大垣ノ醫江澤養樹ノ長子ナリ、出デテ宇田川榛齋ノ養子トナリ姓ヲ冒グ。君少クシテ物產學ヲ好ミ、長ズルニ及ビ馬場貞由ニ就テ洋學ヲ受ク、和蘭人入貢スル毎ニ、其客館ヲ訪ネ得ル所多シ。文政九年幕府ノ命ニヨリテ蘭書ヲ翻譯ス。天保四年植物啓原ヲ著ス、同七年月侔五口ヲ受ク、同十年舍密開宗ノ刻成ル、弘化三年六月二十二日江戸治橋邸ニ於テ歿ス、年四十九。配足立氏、筑山醫員足立長雋ノ娘ナリ、子ナシ、大垣藩沼氏第三子興齊ヲ養フテ嗣トス。

第百十七　高良齋

名ハ渓字ハ子清良齋ト號ス。本姓山崎氏、寛政十一年五月十九日阿波德島ニ生マル、高錦國ニ養ハレテ子トナル。年十三錦國ニ侍シテ眼科ヲ學ビ、乾純水ニ本草學ヲ受ク、年十九父ニ請フテ長崎ニ至ル、時ニ文化十四年十月ナリ。シーボルトニ從ヒ學ブコト八年、刻苦研鑽ス、文政十一年シーボルトノ冤獄起リ、先生モ亦連坐獄ニ下ル、後許サレテ天保二年德島ニ歸リ、更ニ大阪ニ移ル、天保十一年明石侯ノ醫員ニ擧ゲラル。

弘化三年九月十三日疾暴ヲ發シテ歿ス。享年四十八。

譯スル所ニ、西醫新書、內科捷徑、外科精義、鎖海秘餘、藥品撮要、飲食要訣、醫則、女科精選、眼科便用、藥能識、蘭藥語用辨、論梅毒法アリ。

第百十八　小川汶庵

名ハ忠實、字ハ意公、通稱文菫、後避クル所アリテ汶庵ニ改ム、竹場ハ別號ナリ。世々幕府醫官ニ列リ法眼ニ敍セラル。汶庵年七歳ニシテ父母ヲ失フ、伯母圓覺愛撫シテ嗜育ス。年十六讀傷寒論十卷ヲ著シ、又老子ヲ注ス、文化二年擢セラレテ侍醫トナリ、醫學助教ヲ兼ス、同七年西城侍醫ニ轉ジ法眼トナリ、醫學教諭ヲ兼ネ、天保九年法印ニ敍シ、龍仙院ト號ス。

文化元年、蘇州ノ醫胡兆新長崎ニ來ル、先生即チ千賀柳外、吉田菊潭ト共ニ、命ヲ奉ジテ長崎ニ赴キ、胡兆新ト醫ヲ談ズ、弘化二年傷寒貫珠集ヲ醫校ニ梓ム、本邦ニ尤氏傷寒ノ書アルハ是ヲ以テ始トナス。

弘化二年秋上書骸骨ヲ乞フ幕府厚ク贈ス。四年四月六日ヲ以テ終ル、享年六十六。男鳳出ヅテ岡氏ヲ冒ス。

第百十九　岡　節齋

名ハ虔、節齋ト號シ、良節ト稱ス。明和元年十二月朔日江戸ニ生マル、本姓北川氏、同道生ニ養レテ嗣トナル。醫ヲ山田圓南ニ學ビ、書ヲ山本北山ニ習フ。天明九年法眼ニ敍セラレ、奉職五十一年法印ニ進ミ、櫻仙院ト號ス。弘化二五年二月二日曳然トシテ逝ク、時年八十五。

第百二十　宇津木昆臺

名ハ益夫、字ハ天敬、俗稱太一郎、昆臺ハ其號ナリ。尾張ノ人、醫ヲ淺井貞庵・平野龍門ニ學ビ、十八歳ノトキ笈ヲ負ヒテ京都ニ出デ諸大家ノ門ニ出入シ、益スル所甚多シ。古醫方ヲ以テ一世ニ鳴ル。嘉永元年五月八日家ニ歿ス、年七十。

著ス所ニ、古訓醫傳・日本醫譜・解莊詩文集・和歌集アリ。

第百二十一　宇津木昆臺（木像）

史傳前ニ出ヅ。

第百二十二　小石元瑞

名ハ瑞健園ト號ス、小石元俊ノ子ナリ。年十六父ニ從ヒ江戸ニ出デテ和蘭醫方ヲ、杉田・宇田川・大槻ノ諸家ニ學ブ。後チ西歸シテ箕裘ノ業ヲ繼ギ、術業大ニ行ハル。年五十家事ヲ兒紹ニ附シ、別居シ著書自ラ娛ミ其居ニ題シテ用拙居ト云ヒ、自ラ拙翁ト稱ス。年六十四ノ冬中風ニ罹リ、嘉永二年二月十日歿ス、享年六十六。著ス所ニ、究理堂方府、究理堂藥義、博采錄、藥性摘要、蘭藥分量考、東西醫說折衷、梅毒祕說、健園隨筆、詩文集アリ。

第百二十三　齋藤方策

名ハ淳、又順字ハ素行、通稱方策ト呼ブ、九和中山、孤松軒ノ號アリ。周防一本松ノ人、明和八年ニ生マル、長ジテ醫學ヲ學ビ、年十九大阪ニ出デテ小石元俊ノ門ニ入リ、後チ江戸ニ赴キ大槻玄澤ニ師事シテ蘭醫方ヲ修メ學成リテ大阪ニ業ヲ開ク、高良齋・賴方洪庵ト相鼎立シテ名譽著シ。シーボルトノ大阪ニ來リシトキ、ゾノ誤診ヲ論難シテ遂ニ彼ヲ屈服セシメタリ。

嘉永二年十月八日病ンデ歿ス、享年七十九。天王寺ロ歸阪梅酒詩ニ詳ル。

著ス所ニ巴蜀弘解剖圖譜・船中備要方・痘疹紀聞・師病要生心得・孤松軒隨筆・浦部加見都アリ。

第百二十四　高野長英

名ハ譲、瑞皐ト號ス。文化元年五月五日陸奥ノ水澤ニ生マル、本姓後藤氏、年十四外叔父高野玄齋ニ養ハル。父ニ類請シテ江戸ニ來ル時ニ文政三年秋、年十七ナリ、堀留町藥舗鈴崎源造ニ寓ス、源造吉田長叔ノ門ニ入ラシム、翌年三年大ニ進ム、長叔ソノ才ヲ愛シ偏字ヲ與ヘテ長英ト改ム、留マルコト二年、又駒留正見ノ門ニ遊ブ。後チ長崎ニ遊ビシーボルトノ校舍ニ在リテ、挺然等輩ヲ拔ク。天保元年江戸ニ出テ醫譯ニ從事ス、年二十七。先生嘗テ渡邊崋山等ト結ビテ尚齒會ヲ作リ、時勢ヲ談ジテ幕府ノ忌避ニ觸レ、獄ニ下ル、天保十二年四月獄火アリ、先生還ゲテ、西方ニ走ル、後三年捜求稍弛ムト聞キ、再ビ江戸ニ歸リ澤三伯ト變シ、青山ニ寓ス、嘉永三年五月幕吏ソノ所在ヲ知リ捕ヘントス、先生刀ヲ拔キ二人ヲ傷ケ、自ラ頸ヲ貫テ死ス、年四十七。

第百二十五　高野長英

史傳前ニ出ヅ。本像ハ渡邊崋山ノ筆ナリ、最近ノ發見ニ係レリ。

第百二十四　高橋是清

第百二十六　中川修亭

名ハ故又定故、字ハ其德、修亭ハ其號ナリ、又霞山、又抱神堂主人ト號ス、通稱周貞ト云フ。紀州橋本ノ人、明和七年ニ生マル、鈴木蘭陵ノ門ニ在リシガ、天明八年火災後京都ヲ去リ、華岡青洲ノ門ニ入リ外科學ヲ修ム、青洲ガ最初ノ門人ナリ。寛政十五年十月再ビ京都ニ來リ吉益南涯ヲ師トス。文化三年九月、海上隨鷗ノ門ニ入リ、蘭學ヲ研究シ、後チ大阪ニ徙レリ。嘉永三年二月六日其家ニ歿ス、享年七十八。

著ス所ニ、瘍科答師、傷寒發微、醫道古今醫精、考醫方新古、辨東西醫談、雜說、尙齋記、同後記、藥方錄、同拾錄、貞生載記、旁論醫談アリ。

第百二十七　石坂蕙圃

名ハ良民、字ハ蕙圃、通稱篤太、晩ニ桑龜ト改ム。天明六年、美作ニ生マル、年十三、刀圭ノ事ニ志シ、吉益南涯、藤岡青洲ニ醫事シ、郷ニ歸ル。一日醫範提綱ヲ讀ミ悟ル所アリ、長崎ニ遊ビ、シーボルトニ就キ其術ヲ學ブコト數年、歸郷其業大ニ行ハル。嘉永四年六月九日歿ス、齢年六十四。

第百二十八　帆足万里

字ハ鵬輝、通稱里吉、文簡ト號ス。豐後日出ノ人、三浦梅園、廣瀬淡窓ト共ニ九州三偉人ト稱セラル。晩年專ラ文藝學術ニ從事ス。

嘉永五年六月十四日歿ス、享年七十五歳。

著ス所ニ、假字考、修辭通、窮理通、四書標注、五經標注、國語標注、皇學餘論、東潛夫論、入學新論、井構篤問、西崎遺稿アリ。

第百二十九　河津省庵

名ハ卓、字ハ子立、省庵ハ其號ナリ。相州相原ノ人、嘗テ芳川波山ニ從フ、波山忍城侯ニ聘ルルヤ先生往テ之ヲ訪フ、遂ニ侍醫ニ召サル。

先生初メ長沙ノ法ヲ修メ、後西洋ノ學ヲ攻メ、數々人體ヲ解剖シテ需然大ニ悟ル所アリテ醫則發揮ヲ著述ス、古醫方ノ生理、書ト見ルモ可ナリ。蘭說ノ妄誕ヲ攻ム、所說ノ精々奇怪ニ涉ルハ、多クハ時勢ノ罪ニシテ先生ノ識見ヲ左右スルニ足ラザルナリ。嘉永五年八月病デ其家ニ歿ス、年五十三、武州忍城蓮華寺ニ葬ル。

著ス所ニ、醫則發揮五卷、內景圖一卷、解原眼論五卷、治療大全十卷、眼科方規三卷、胎育全書三卷、動物質論二卷、稱物性論五卷アリ。

第百三十　楢林宗建

名ハ高房、字ハ濟通、稱宗建、和山ハ其號ナリ。榮哲ノ第二子ナリ、享和二年生マル、文政十年四月父ノ後ヲ襲フテ佐賀侯ニ仕フ、弘化三年二月豐後町ニ塾舍ヲ設ケ大成館トシ、諸生ヲ寄宿セシメテ醫學ヲ教授ス。鍋島閑叟侯西洋牛痘苗ヲ求ムルニ當リ、天保二年七月蘭船ノ之ヲ齎スニ及ビ、先生ソノ子建三郎ニ種痘術ヲ受ケセシメンニ善感ス、是ヲ西洋醫學傳來ノ嚆矢トス。茲ニ於テ先生佐賀ニ歸リ侯ニ謁シ、更ニ公子等ニ種接スルニ何レモ能ク成生セリ。先生知識スル所ヲ錄シテ牛痘小考ヲ著ス、種痘ノ祖トス。嘉永五年十月歿ス、年五十一。

第百三十一　堀内忠亮

名ハ忠亮、字ハ君栗、一字忠藏、素堂ト號ス。米澤ノ人、世醫ヲ以テ仕フ、年十一父ヲ喪ヒ、獨リ母ト居ル、辛苦ヲ嘗メテ志操倍潔シ、常ニ江戸ニ遊バント欲スルモ家貧シキヲ以テ果サズ、既ニシテ役都ノ命アリ、乃チ父祖ノ墳ニ謁シテ誓テ曰ク、藩中泰西ノ學ヲナスモノナシ、某之ヲ創メントス、若シ成ラザレバ敢テ再ビ謁セズト。是ニ於テ四上シ官暇ヲ以テ古賀穀堂ニ從テ古文ヲ學ビ、杉田立卿青地芳齋ニ就テ泰西醫術ヲ修ム、越テ二年擢デラレテ侍醫トナル、後大夫人侍醫ニ轉ジ、祿若干ヲ賜フ。嘉永六年瘡ヲ患ヒ髑骨ヲ乞フテ瘡ニ還ル、壓七年三月寳ニ起タズ、年五十四。

著ス所ニ幼々精義保嬰預言外科諸書アリ。

第百三十二　土生玄碩

名ハ義壽桑翁ト號ス。安藝ノ人十七歲京都ニ出テ和田泰純ニ學ビ、五年ヲ經テ鄉ニ還リ、業素ノ業ヲ嗣グ。文化五年四月廣島侯ノ女、江戸ノ邸ニアリ眼ヲ病ム、侯之ヲ憂ヒ先生ヲ召シテ治ヲ托ス、未ダ幾モナラズシテ全癒ス、恩賞太グ厚シ。居ヲ芝田町ニトス其業益々盛ナリ。文化七年七月擢デテ侍醫トナル、十三年十二月法眼ニ敍セラル。文政十二年シーボルトニ敎ヲ問ク。先生醫ニルニ奏寮服ヲ贈ル、其年十一月シーボルトノ獄起ルニ當リ、連坐シ官祿ヲ奪カラレ、獄ニ下ル、時ニ十二月十六日ナリ。是ヨリ先、先生ノ子玄昌侍醫ニ擢クレ、西丸ニ勤仕セシガ、先生ノ官ヲ奪ハルルニ際シ玄昌赤官ヲ辭メラル。天保八年將軍家慶眼疾ヲ發ス、玄昌ヲシテ之ヲ治セシム、其年七月二十七日玄昌侍醫法眼ニ進ミ祿二百石ヲ受ク、將軍玄碩ノ近狀ヲ聞キ之ヲ許ス。先生獄ヲ出デテ深川木場ニ家居シ、大ニ門戸ヲ張レリ。

嘉永七年八月十七日病ンデ其家ニ沒ス、享年八十七。築地本願寺內ニ葬ル。

著ス所ニ、瘟疫錄、師語錄、迎翠堂漫錄アリ。

第百三十三　新宮涼庭

名ハ碩、幼名織瑳、通稱涼亭、後涼庭ト改ム、蒐國山人ハ其號ナリ、別ニ蘭豎齋ト號ス。天明七年三月十三日丹後由良村ニ生マル、年甫メテ十一、從兄有馬丹山ニ就テ醫ヲ學ビ、年十八、業ヲ由良ニ開ク、一日丹波檜山近藤氏ノ宅ニ在リテ宇田川氏撰內科選要實值篇ヲ讀ミ、大ニ發憤シ、文化七年八月六日鄉ヲ發シ、長崎ニ赴ク、途次廣島ニ至リ惠美三白ノ門ニ入ル。長崎ニ至ルヤ吉雄如淵ニ贄ヲ執リ大ニ苦學ス、後チ蘭醫ヘールケニ接シ、益ヨリ學術大ニ進ム。文政元年長崎ヲ去リテ鄉里ニ歸ル。翌二年先生年三十三ニシテ始メテ業ヲ京都ニ開ク、名聲遠邇ニ聞ハレ、診ヲ乞フモノ門ニ滿ツ。

先生、東山南禪寺畔ニ費合ヲ建テ順正書院ト曰ヒ、軒岐交宜ヲ祭リ、傍者及ビ漢蘭醫書ヲ貯ヘ、且ツ附スルニ學田及ビ資金若干ヲ附シテ四方志學ノ徒ヲ延ク。

安政元年正月九日病デ歿ス、享年六十八。南禪寺塔中天授庵ニ葬ル。

第百三十四　新宮涼庭（木像）

史傳　前ニ出ツ。

第百三十五　原　老柳

名ハ健字ハ天行、通稱佐一郎ト呼ビ、老柳ト號ス。攝津四宮ノ人、天明三年二月生マル、村上玄齡ニ就キ醫學ヲ修メ業成リ伊丹ニ歸ル。偶々一篤疾者アリ、先生ニ治ヲ乞ヒ、又新宮涼庭ヲ招キ來診セシメテ主治醫ト面議ヲ請フ、涼庭傳地ノ庸醫共ニ譏ルニ足ラズトセリ、會々先生入リ席ニ就キ備サニ其診案處方ヲ述ブ、涼庭之ヲ聞キ、乃チ主人ニ說シテ專ラ其治ヲ受ケシム、先生後チ大阪ニ移リ、諸醫ノ間ニ崛起シ別ニ一機ヲ樹チリ。

安政元年六月熱病ヲ得テ歿ス、時年七十二。大阪生玉町龍泉寺ニ葬リ觀音像ヲ建テリ、俗ニ老柳觀音ト呼ベリ。

第百三十六　水原三折

名ハ義博、字ハ齊卿、三折ハ其號ナリ。本姓最上氏、近江八幡ノ人ナリ、先生兄弟六アリ、季子ナルヲ以テ本姓ヲ避ケテ水原ト稱ス、少クシテ京都ニ出テ、奥劣齋ヲ師トシ、產術ヲ學ビ、後チ鉏小路東洞院ニ住ミテ醫業ヲ開ク。產術ハ賀川子玄嵎ノ鐵鉤圓生術ニヨリテ從來ノ舊臭ヲ一洗シタルモ、ソノ術ノ漸ク粗暴ニ流レ、却テ兒腦ヲ碎擦スルノ弊アリ、先生之ヲ見テ酷獄措カズ、草思搆巧、幾ンド二十年ニシテ鯨鬚ヲ以テ探領器ヲ作リ、產鉗ニ試ミ、悉ク奇功ヲ奏セリ。產術之レヨリ一變ス、先生功績大ナリ。

先生海上隨鷄翁ニ從ヒ人身內景ヲ學究シ、刑屍ニ就テ親試シ、殊ニ臺ヲ陰器ノ解剖ニ注グ陰器解剖圖說アリ。先生天明二年ニ生レ、安政元年七十ニシテ歿ス。

著ス所ニ、探領圖訣三卷、醇生庵產育全書十一卷アリ。

第百三十七　多紀元堅

名ハ元堅、字ハ亦柔、渋江抽斎ト號シ、安叔ト通稱ス、元簡ノ二子ナリ。天保六年内班ニ擧ゲラレ、醫學館教授トナル、翌年法印ニ敍シ、樂春院ト號ス。安政四年二月十四日病歿ス、時年六十三。著ス所ニ、傷寒論述義、金匱要略述義、素問紹識、雜病廣要、藥治通義、脱診奇恢アリ。

第百三十八　吉益北洲

諱ハ修夫、北洲ハ其號ナリ、通稱道立、後チ正親ト改ム。本姓青沼氏出デテ吉益南涯ノ家ヲ嗣ギ、年二十二ニシテ吉益南涯ニ從フ、南涯老テ子ナシ諸フテ娶子トス。文化十年六月南涯歿セントキ、先生年二十六ナリ、業務ノ業ヲ繼ギ生徒ヲ授業ス。

弘化元年北越地方ニ浸難シ、翌二年再ビ金澤ニ赴キ、弘化四年三月金澤藩侍醫トナリ、居ヲ金澤ニ定ム。後チ數年中風ニ罹リ、安政四年八月遂ニ歿ス、享年七十二、金澤寺町國泰寺ニ葬ル。

著ス所ニ、金匱要略精義傷寒論紀聞、金匱要略記聞、續々藥徵、傷寒論系譜、丸散方、北洲遺稿、北洲遺草アリ、

第百三十九　賀來佐一郎

名ハ佐之字ハ公輔佐一郎ト通稱ス。寛政十二年ニ生マル、年少シテ父ノ醫業ヲ學ビ、十四歳、帆足萬里ヨリ學業ヲ受ケ、年二十四杵築ニ醫業ヲ開ク。ソノ後、長崎ニ遊ビ、蘭學ヲ吉雄如淵及ビシーボルトニ就キテ學ブコト四年業成リテ杵築ニ歸ル。天保十四年島原侯ノ醫員トナリ常ニ麻上下ヲ著シ、袴ヲ穿テ往來セリ。嘉永二年牛痘法ヲ蘭醫ニ受ケ傍ラ國中ニ行フ、安政四年致仕シテ、ソノ十一月十八日島原ニ歿ス、享年五十九。著ス所ニ、多識圖譜醫原救世方意解治痘新書救荒本草詩文集家譜系譜記アリ。

第百四十　杉田梅里

譯ハ信字ハ成卿、梅里ハ其號ナリ。文化十四年十一月十一日江戸濱町山伏井戸ノ邸ニ生マル、二十歲ノ時坪井信道ノ門ニ入リ醫學ヲ修メ、和蘭學ヲ修ム。天保十一年天文臺ノ譯員ニ補セラル、宇田川榕菴、箕作阮甫等ト共ニ命ヲ奉ジテ海上砲術全書譯述ノ業成ル、時ニ天保十四年ナリ。弘化二年十一月父立卿歿ス、先生其祿ヲ襲ギテ、藩公ノ侍醫ニ任ゼラル。

嘉永二年濟生三方ノ書ヲ出版シ、大ニ公ニ行ハレタリ。安政元年譯員ヲ罷シ、鐵砲洲ニ移リ、蘭葉散人ト號シ、專ラ砲術訓蒙ヲ譯ス、同三年幕府蕃書調所ヲ設クルニ當リ、先生ヲ擧ゲテ教授職トシ、俸米三十口、金二十兩ヲ給セラレ、此歲十二月將軍家定公ニ見ユルコトヲ許サル、藩臣ニシテ謁スルハ特典ナリ。藩侯特ニ格ヲ進メテ祿五十石ヲ加フ、同六年心疾ノ證加リ、二月十九日歿ス、僅ニ四十三歲。

先生ハ獨リ詩文ヲ善クスルコトノミナラズ、又蘭文ヲ綴ルコト自在ニシテ玉川紀行二篇ハ最モ名文ナリ。著ス所ニ、濟生三方醫或、濟生備考治痘眞訣、海上砲術全書增補、海軍砲術全書、砲術訓蒙、山砲略說、野砲演習式、萬寶王手箱、內醫手術、解剖刀式、理家必讀アリ。

第百四十一　難波立愿

名ハ經蔚字ハ子蔚抱節ハ其號ナリ、又鳩巣柯巣庵ノ別號アリ。立愿ハ其通稱ナリ。備前金川村ノ人、寛政三年ニ生マル、文化二年京都ニ出デ、八年三月吉益南涯ノ門ニ入リテ内科ヲ學ビ、又賀川蘭齋ニ就キテ產科ヲ學ブ、文化十一年四月華岡ノ門ニ入リ、大阪ニ於テ華岡鹿城ヲ師トシテ外科學ヲ修メ歸鄉シテ開業ス。文政十二年再ビ京都ニ出デテ古益北洲ニ從遊ス。門人來リ學ブモノ千五百人ニ及ブ。

安政六年八月二十三日病デ歿ス、享年六十九。

著ス所ニ、類聚集方、續類聚集方、補正類聚集方、醫林類英、瑣末叢談、鳩窠雜選、傷寒論、談炙提要、散花新書、抱節醫書、同後集、方彙集覽、觀證辨疑、補正拾遺、新書、胎產餘篇、敗毒小錄、橘黃漫筆、醫林拘學、神道方、傍註思誠堂方、標瘡編、新書、醫學紬珠、醫家粹玉、軌中館記アリ。

第百四十二　山本亡羊

名ハ世稱字ハ仲直、亡羊ト號ス。京都ノ人、安永七年六月十六日生ル、年十六小野蘭山ニ從ヒ本艸學ヲ受ク、其醫術一家ノ說ニ局セズ、又廣ク藥艸ヲ探リテ培養セリ、

安政六年十月十六日舊疾發シテ十一月二十七日卒ス、享年八十二。

著ス所ニ、助字註釋備考藥名考、片言錄、百品考、格致類編アリ。

第百四十三　館　玄龍

名ハ成章、字ハ君慶、北洋ト號ス、玄龍ハ通稱ナリ。越中射水郡三十三箇村ノ人、寛政七年ニ生マレ、十四歲ニシテ醫道ニ志シ、年十九柴岡青洲ノ門ニ入ル、時ニ文化十一年十一月二十二日ナリ。居ルコト八年ニシテ其秘奥ヲ受ケ京都ニ遊ビ更ニ江戸ニ僑居セリ、年三十喪父英陵ノ病ニヨリ歸省シ、復出デズ。安政六年十一月十日病ンデ歿ス、時年六十五。

著ス所ニ、瘍科鑑、內科鑑、傷寒論活義、孔崇秘訣、葬非醫談、北洋漫筆アリ。

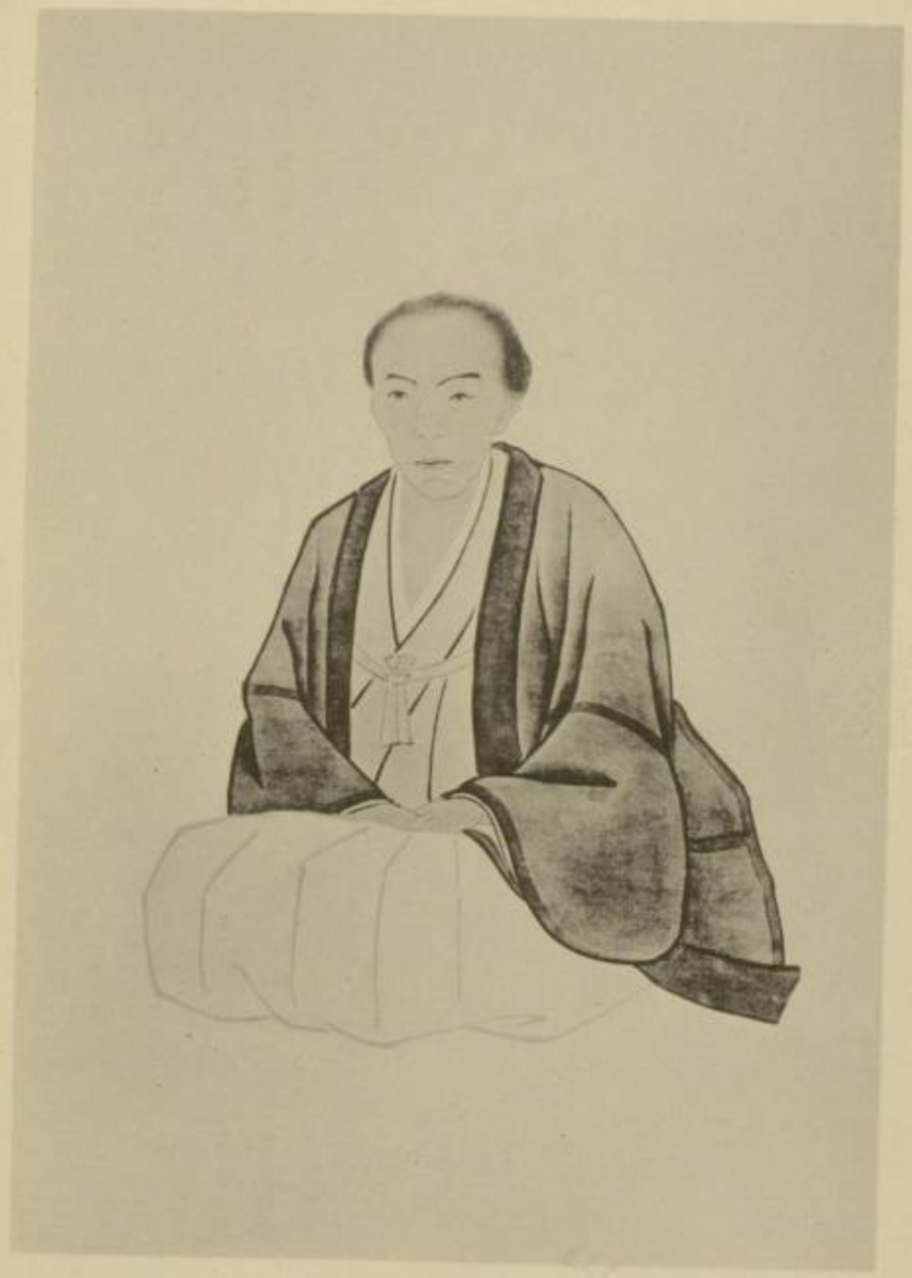
第百四十四　緒方洪庵

名ハ章、字ハ公裁、備中足守藩ノ人、先生身體羸弱武技ニ勝ヘズ、常ニ方伎ノ志アリ、文政七年、年十五父ニ從ヒテ大阪藩邸ニ在リ、中天游ニ就テ西洋醫術ヲ學ブ。天保二年東遊シテ坪井信道ノ門ニ入リ研讀怠ラズ、學大ニ進ム、又宇田川玄眞ニ就テ教ヲ受ケ、後七年長崎ニ出デテ蘭人ニ親炙シ、凡ソ三年ニシテ業ヲ大阪ニ開ク、時ニ年二十七。生徒日ニ衆シ、藩侯擢デテ侍醫トナシ俸八口ヲ受ク。文久二年幕府徵ス、由ヲ江戸ニ來リ侍醫トナリ、醫學所頭取トナル、文久三年六月十日病デ歿ス、年五十四。

第百四十五　大槻俊齋

名ハ藤宇ハ伸藏、弘道ト號ス、豫前桃生郡赤井村ノ人、出デテ沸谷氏ヲ嗣ギ醫タラシム、時ニ年十六ナリ。先生窃ニ天下ノ名醫タラント期シ、父ニ其志ヲ告グ、父之ヲ許サマリシヲ以テ兄龍之進私カニ江戸ニ奔ラシメ川越侯ノ醫官高橋尚齋ノ家ニ仕ヘテ僕傳トナリ、閑ヲ偸ミテ書ヲ讀ム、尚齋其志ヲ感ジ門生トナシ、更ニ手塚良仙ニツカシム、後數年良仙資ヲ給シテ天保八年長崎ニ遊學セシメタリ。緒方洪庵モ亦越ニアリ相俱ニ研磨セリ、長崎ニ在ルコト數年、江戸ニ歸リ、天保十一年長沼侯ニ終セラレテ醫官トナレリ。良仙女ヲ以テ之ニ妻シ、下谷練塀小路ニ業ヲ開カシム。弘化二年三月神田ニ火災アリ、獄舍ノ四近ニ迫リタルヲ以テ囚人ヲ開放ス、時ニ高野長英捕レテ永囚ノ身トナリシガ、長英獄ヲ出デテ歸ル意ナク、俊齋ノ家ニ入リ强テ衣服金錢ヲ借リ、其往ク所ヲ知ラズ、此事終ニ警吏ノ知ル所トナリ、百日閉門ノ刑ニ處セラル。

俊齋セリウス及モストノ外科書ヨリ鋭創療治ノ要領ヲ抄譯シテ銃創瑣言一冊ヲ著セリ、江川太郎左衛門英龍此書ヲ見テ當今ノ急務ナルヲ嘆稱シ、自ラ官ノ允許ヲ乞ヒ上梓セリ、時ニ安政元年八月ナリ。天保十二年痘痂ヲ施シ良好ヲ得タリ、之ヲ都下種痘ノ濫觴トス。安政四年八月神田於玉池ニ同志ト共ニ種痘所ヲ建ツ、萬延元年十月徽サレテ官醫トナリ、種痘所號取ニ補セラル、翌年西洋醫學所ト改ム、之ヲ西洋醫學公行ノ始トス。文久元年十一月十一日胃硬結腫ニ罹レリ、自ラ知ザルヲ知リ、家人ニ告グ、文久二年四月九日終ニ溘焉トシテ逝ク、享年五十七、本郷區駒込千駄木町總禪寺ニ葬ル。



第百四十六　箕作阮甫

名ハ虔字ハ序四、紫川又ハ遠谷ト號ス。津山ノ人、寛政十一年九月六日生マル、長ズルニ及ビテ京都ニ遊ビ、醫書ヲ研究シ、文政五年津山藩侍醫ニ擢セラレ、後藩公ニ從ヒ江戸ニ祇役ス。此時宇田川榕菴ノ西洋醫學ノ說ヲ聽キ、改メテ專ラ洋學ヲ攻ム、數年ナラズシテ業大ニ進ム、天保十年幕府天文臺譯員ニ補セラレ、安政三年洋書調所教授ニ擧ゲラレ、文久二年幕籍ニ列ナル、西洋學者ノ士籍ニ列スルモノヽ初メナリ。文久三年六月十七日病ンデ終ル、得年六十五、白山淨土寺ニ葬ル。

第百四十七　鳩野宗巴（七代）

幼名藤二郎ト云ヒ、諱ハ宗俊、字ハ明甫、霞井ト號ス。文化十二年二月二日熊本ニ生マル、肥後醫家ノ名アリ、年十二藩校時習館ニ入ル、年十六ニシテ其父病アリ儒學ヲ廢テ、醫學ヲ修ム、後チ豊後竹田ノ植村文鑑ニ就キ華岡流外科ヲ學ビ、其術ニ熟シ、伊豫ノ鎌田、大阪ノ華岡ト並稱シテ關西ノ三外科大家ト呼バル。又家塾ヲ興シ、生徒ヲ教育シ、半瘧ノ接種ヲ藩内ニ奬勵ス。

文久三年十一月十四日歿ス、享年四十九。

第百四十八　賀川蘭臺

名ハ滿壽子ハ子蘭蘭臺ト號ス。文政六年三月年二十八ニシテ典藥寮醫生ニ補セラレ、正七位下ニ敍シ上總大掾ニ任ゼラル。嘉永五年三月典藥寮醫員ニ補セラレ、尋テ文醫博士トナリ、從五位下ニ敍シ、筑前守ニ任ス。文久四年二月一日歿ス、享年六十九。錦頭絹ノ發明アリ。

第百四十九　花野井有年

父吉五郎晴博遊俠ヲ以テ事トシ、わん吉ト呼ブ、先生ハ其第一子ニシテ寛政十年三月廿一日駿府ニ生マル、先生年二十一、家ヲ弟ニ讓リ、江戸ニ出テ和蘭醫方ヲ學ブ、貧苦ニ堪エ精勤ス。一時病ヲ以テ家ニ歸リ、二十四歲再ビ江戸ニ來リ小篠先生ニ醫ヲ問ヒ傍ラ開業ス。二十六歲家ニ歸リ業ヲ開ク、文政六年二月ナリ。明年又江戸ニ出テ轉ジテ大阪ニ行キ、橋本養齋ニ醫事ヲ問ヒ、翌八年鄕ニ歸リ駿府安西ニ居住ス。天保七年十二月七日腐熱トシテ皇國醫方ニ志シ、醫方正傳初篇二卷ヲ著ス、文中漢方家ヲ斥クル太甚シキヲ以テ官間校ヲ許サズ。慶應元年十一月二十四日病ヲ以テ歿ス、享年六十七。靜岡市安西一丁目瑞光寺ニ葬ル。

著ス所ニ西學便覽、西學斷診候精要、內景一覽、經驗大同類聚方、藥品名會、經過藥鍊、疫疾先防、群方雜記、藥名譜、本草類聚、證辨、道明辨、圖錄アリ。

第百五十　飯沼慾齋

名ハ長順、慾齋ハ其號ナリ、幼名本平、後專吾ト改ム、伊勢龜山ノ西村新右衛門ノ二男ナリ。七八歳ノトキ出デテ大都ニ學バンコトヲ乞フ父母之ヲ許サズ、十二歳ノトキ意ヲ決シテ單身出デテ叔父美濃大垣飯沼長意ニ投ズ、後チ同姓飯沼長順ノ家ニ依食シ、孜々精勵、比年ニシテ學業大ニ進ム。十四五歳頃小野蘭山翁ノ濃州ニ來ルニ際シ、翁ノ門ニ入リ本草學ヲ修メ隨所常ニ從ツテ跋渉採藥シ、其學頓ニ進ム。十八九歳ニシテ京都ニ遊ビ、福井丹波守ノ門ニ入リ醫ヲ學ビ、日夜勉勵、學成リテ大垣ニ歸ル。次デ長順ノ嫡女ト婚シ、其箕裘ヲ繼ギ名ヲ龍夫ト改ム。先生ノ友吉安三菊蘭醫ノ治術過ニ漢方ニ傾ルコトヲ說ク、先生之ヲ聞キ悟ル所アリ、斷然意ヲ決シ家財什具ヲ賣リ、又友人ニ謀リ書籍講ヲ作リテ學資ヲ募リ、妻子ヲ親族ニ托シテ江戸ニ出デ宇田川榕齋ニ就テ蘭學ヲ修ム、時ニ年二十八歳ナリキ。又彷ラ藤井方亭ニ就キテ學ブ、方亭ノ家ハ下谷ニ在リ、宇田川塾ヲ距ルコト里餘、朝ニ出デテ夕ニ歸ル、暴雨風雪曾テ一日モ通學ヲ怠リシコトナシ、又勉テ他ノ娯樂ニ神思ヲ費タズ、淺草觀音ノ如キモ師家藤井通學ノ日、雷門前ヲ過ギシコト幾十回ナルモ、終ニ賽詣ヲ果サザリシト。學大ニ進ミ郷ニ歸リテ蘭學ヲ唱ヘ、更ニ醫業ヲ始ム、藤名四方ニ聽セタリ。

先生年五十ニシテ令弟健介ニ讓リ、自ラ隱退シテ城西長松村ニ別業ヲ築キテ移リ、盆菊草木園覺寺先塋ノ次ニ葬ル。著ハス、時ニ七十餘歳ナリ。

慶應元年五月五日家ニ歿ス、享年八十四、大垣本街圓覺寺先塋ノ次ニ葬ル。

第百五十一　三宅艮齋

名ハ温字ハ子厚、肥前國南高來郡北有馬村ノ人ナリ。十四歲ニシテ父ヲ喪ヒ長崎ニ出デテ橙林榮建ノ門ニ入リ醫ヲ學ブコト八年。天保十二年歲二十二、江戸ニ來リ藥研編ニト居シ、父ノ名ヲ襲ヒテ英齋ト稱シ、醫ヲ以テ行ハル。明年十月下總銚子港ニ移リ、弘化元年三月堀田侯ニ聘セラレ下總ノ佐倉ニ赴ク。安政五年江戸西洋醫家五十餘人ト相共ニ社ヲ結ビテ種痘館ヲ建ツ。英醫合信ノ著ス西醫略論、內科新說、婦嬰新說ヲ翻刻シテ世ニ行ル。六年土佐侯ニ召サル。文久年醫學所教授トナレリ。慶應四年七月三日病デ本所ノ家ニ歿ス。本郷區駒込願行寺ニ葬ル。年五十二。今ノ秀先生ハソノ子ナリ。後チ葛ヲ谷中天主寺墓地ニ移ス。

第百五十二　桑田立齋

名ハ和字ハ好賢、越後新發田村松正祝ノ第二子ナリ。年十八、江戸ニ來リ坪井誠軒ノ門ニ入リ居ルコト多年、學大ニ進ム、天保十二年正月誠軒ノ媒ニテ桑田玄眞ノ嗣トナリ、深川高年橋畔ニ別居シ醫業ヲ開ク。養父玄眞ノ人痘種法ヲ得テ施スコト數百人ニ及ブ、後チ牛痘種法ヲ知ル、偶々嘉永二年麗齋モーニツタノ靈ラセシ牛痘苗ノ長崎ニ於テ奏效シ、ソノ傳フル所ノ苗ヲ得テ子兒ニ接種セシ以來、連綿保續シ、二十年間一日ノ如ク痘苗ノ小兒ヲ見レバ則チ其家ニ於テ施術シ、一心十萬兒ニ及サンコトヲ期セリ。

天保年間疱瘡流行ヲ遂リ狂瀾患者ニ施シ、又沃陳浴ヲ作リ疱瘡患者ニ施ス。安政四年蝦夷地痘瘡流行ス、官命アリ先生、蝦夷ニ赴キ屢々危難ヲ冒シ全蝦夷ヲ跋渉シ、三ケ月間ニ六千餘人ニ種痘ヲ施シ、十一月四日江戸ニ歸レリ。官其功ヲ賞シ、金二百五十兩ヲ賜フ。

文久三年七月都下麻疹大ニ流行シ、加フルニ虎列刺大ニ猖獗ヲ究メ、痘苗將ニ絶エントス、先生ノ困苦極メテ甚シ、日夜思慮ヲ勞シ辛ジテ其苗ヲ維持スルコトヲ得タリ。慶應三年六月偶々中風症ニ罹リ半身不隨ニシテ治セズ、翌四年七月廿七日遂ニ沒ス、享年五十八。此時マデ自ラ下シタル種痘兒既ニ七萬餘人ニ及ビタレドモ、十萬兒ヲ期セシ素志ヲ遂ゲザルヲ憾トシ、種痘針ヲ手ニシテ瞑目セリト、淺草橋場決源寺ニ葬ル。

先生嘗テ濟幼院育兒院ノ設立ヲ企テ、安政三年上野門主ニヨリ之ヲ官ニ請ヒシモ、遂ニ實施スルニ至ラザリキ。著ス所ニ牛痘發蒙、引痘要略、解惑、養育案、譚三濟、私話、濟幼問答、濟幼院建設意見書アリ。

第百五十三　日高涼臺

名ハ精又愉一字ハ子精六々堂玄花散人遜叟ト號ス。安藝新庄ノ人寛政九年十二月十日生マル幼ニシテ俳門ニ入リシガ出テ他郷ニ奔リ文化四年新宮涼庭ノ廣島ニ淹留スルヲ聞キ醫ニ志セリ時ニ年十一。文化十三年大阪ニ出テ十四年涼庭ニ面接シ藤井樣園ニ師事シ文政六年歸郷シテ醫業ヲ開ク同八年長崎ニ赴キシーボルト及ビ吉雄稙之助ニ從ヒテ蘭醫學ヲ修メ同十一年伊豫ニ遊バントシ海路船難破シ漸クニシテ宇和島ノ漁夫ニ救ハレ途ニ其地ニ留マリテ醫療ヲ施セリ。十一月大阪ニ出デ天保十三年十一月安藝竹原ニ歸リ遜叟ト號シ再ビ出デズ。

明治元年九月十七日病ンデ歿ス年七十二。竹原町不老長生寺ニ葬ル。

著ス所ニ用藥便覽變通三十方種痘新書種痘實驗錄藥草藝法瘍科精義眞法產論分離學律處方傳西洋醫事辨惑三十六方口訣六々堂藥例六々堂療法家言方意口訣眼療提耳蘭書訣記たれをかも辨惑篇類繁篇アリ。

第百五十四　鹽田順庵

名ハ榮、字ハ順庵、松園ト號ス。金澤ノ人、本姓宮河、江戸ニ來リ、增島蘭園ノ門ニ入リ經史ヲ講習シ、家ニ歸リ醫ヲ業トス。父歿ス、幕府醫官鹽田宗温嗣ナキヲ以テ松園ヲ强テ養子トス。安政二年幕府ノ命ニ應ジテ函館ニ居ルコト六年、學校ヲ興シ、病院ヲ建テ其他經營スル所多シ。文久二年召レテ江戸ニ歸リ壽命ニ進ミ、醫學教諭ヲ兼ス、後處士トナリ、再ビ函館ニ干渉ス、幾モナク東京ニ歸リ、明治二年二月七日病デ家ニ沒ス、享年六十七。

第百五十五　廣瀨元恭

名ハ元裕、字ハ禮卿、藤圃、又天目山人ト號ス。甲斐藤田村ノ人ナリ、年十五江戸ニ出テ坪井誠軒ノ門ニ入リ蘭醫方ヲ修ム、又野田笛浦ニ從テ詩文ヲ學ブ、居ルコト十餘年ニシテ京畿ニ遊ブ、後留テ業ヲ開ク、諸生集マルモノ日ニ多シ。藩侯ノ聘ニ應ジ醫員トナリ京ニ居テ二十四口ヲ食ム。兵書ヲ譯シ、遂ニ之ヲ侯ニ獻ズ、慶應初年砲藝ヲ八幡山崎ニ築ク。明治維新ノ際、京都病院ノ長タリ。明治三年十一月十七日終ニ其家ニ歿ス、享年五十、堀河本國寺ニ葬ムル。

著ス所ニ、理學提要、知生論、西醫眼鏡三卷、刀圭餘事一卷、新訂牛痘奇法一卷、人身窮理三十帝、解剖詳説八卷、病證正解、窮理對問、三物名義、築城新法、諸器圖解、地理志、砲術新書、時習堂實試説アリ。

第百五十六　伊東玄朴

名ハ潤字ハ伯藏冲齋ト號ス。肥前神崎郡仁比山村ノ人、本姓執行、寛政十二年十二月二十八日生マル、年十六、醫學ニ志シ、年廿三ニシテ佐賀ニ出テ醫書ヲ學ブ、二十四歳ノトキ長崎ニ出テ、和蘭通詞猪股傳右衛門及ビシーボルトニ就キ醫學及ビ醫學ヲ傳習ス。文政九年猪股妻娘用人ノ出府ニ附添ヒ江戸ニ出デ、本所番場町ニ住ミ後チ同十二年下谷長者町ニ轉住シ、天保四年三タビ下谷和泉橋通徒士町ニ移リ醫業ヲ開ク。同十一年伊東家ニ由緒アルニヨリ伊東ト改ム。同十二年鍋島家ニ召サレ禄七人口ヲ受ク、弘化二年鍋島閑叟公和蘭ヨリ始メテ牛痘苗ヲ取寄ス、玄朴嫡春子ニ接種シテ後チ同公嫡貢子ニ種シニ兩人トモ良結果ヲ得タリ。爾來該苗ヲ以テ自宅ニ於テ一般人民ニ接種ス。後チ和泉橋通徒士町ニ廣大ナル種痘所ヲ建設スルニ至レリ。

安政五年七月二日將軍家定公ヨリ召サレ高三十人扶持下サレ、奥醫師仰付ラル。同年十一月二十三日法橋ニ敍シ同日法眼ニ敍セラル、萬延二年十二月十六日法印ニ敍セラレ長春院ト稱フ。文久二年三月三日醫學所取締ヲ命ゼラレ、慶應四年二月十七日眼ノ通疎居間肩ケラル。明治四年一月二日死亡ス享年七十二歳。

第百五十七　川本幸民

名ハ裕、裕軒ト號ス、通稱幸民、攝津三田ノ人、年十八醫ヲ學ビ、後チ江戸ニ出デテ足立長雋ノ塾ニ寓シ、蘭學ヲ修ム、後坪井誠軒ノ門ニ入リ切磋四年學大ニ進ミ、京阪ニ遊ブ。天保五年九鬼侯ノ醫官トナリ、侯ニ從テ再ビ江戸ニ來リ、芝露月町ニト居シテ醫業ヲ開ク。安政三年幕府洋書調所教授トナリ、文久二年幕籍ニ列ス、明治元年三田ニ歸リ、明治三年又東京ニ來リ、翌四年六月一日病ヲ以テ其家ニ歿ス。

著ス所ニ氣海觀瀾廣義遠西奇器述理學原始、地球理說、合密譯本、合密眞言化學初敎、化學通依百乙、人身窮理、藥治通則、厚礎石考、暴風說、汽船說アリ。

第百五十八　本間棗軒

初ノ名ハ賚章、後チ救ト改ム、字ハ和期、通稱ハ玄調、棗軒ハ其號ナリ。母本間氏、宗家本間資成子ナシ先生ヲ養子トス。年十七文政三年、初メテ醫學ニ志シ、原南陽ニ師事シ、更ニ笈ヲ負ヒテ江戸ニ出テ杉田立卿ニ從ヒ、西洋醫術ヲ學ビ、傍ラ大田錦城ニ經學ヲ問フ時ニ年十八ナリ、居ルコト三四年未ダ之ニ滿足セズ、長崎ニ遊ビ、蘭人シーボルトニ贄ヲ執ル。先生ノ志、漢洋ヲ博綜シ、其長所ヲ擇デ以テ一家ヲナスニ在リ、而シテ專ラ心ヲ外科ニ用フ。遂ニ京都ニ來リ高階枳園ヲ師トシ、紀伊ニ赴キテ華岡青洲ヲ師トス、時ニ年二十、其門ニ止マルコト數年ノ後、再ビ江戸ニ來リ、日本橋檜正町ニ於テ治術ヲ施ス。召サレテ水戸侯ノ侍醫トナリ水戸ニ赴ク、醫學校教授トナリ名聲駸發ス。天保八年十二月瘍科秘錄ヲ著ハシ、安政六年續瘍科秘錄成ル。學說治術ノ人世ニ鴻益スル所多シ、之ヨリ先キ水戸ニ正好園當アリテ互ニ相聞グアリ、先生正當ニ聞スルヲ以テ之ニ坐セラレ幽禁ヲ受ク。元治元年先生年六十一ニシテ內科秘錄ノ著アリ、明治五年二月八日年六十九疾ヲ卒ス。著ス所ニ右三書ノ他、傷寒論類聚醫方纂要、療治知要、經穴撮要、藥寶雜錄、保嬰須知、乳癌新割圖賦、膠漆說、結石治驗、皇朝醫林談、日新醫談、詩文集等アリ。

第百五十九　竹内玄同

名ハ幹字ハ玄同、西坡ト號ス。賀州大聖寺ノ人、叔父玄秀ノ家ヲ嗣グ、玄秀世々越前丸岡侯ノ醫官タリ。先生壯年京都ニ遊ビ藤林晋山ニ從ヒテ醫學ヲ攻メ、後長崎ニ至リシーボルトニ就ク學成リテ郷ニ歸リ侍醫トナル。天保六年江戸ニ移リ、十三年蘭書翻譯手傳ヲ命ゼラル。安政五年將軍家定公病アリ、乃チ先生及ビ伊東玄朴・戸塚靜海ヲ擧ゲテ侍醫トナス、實ニ是レ幕府ノ西洋內科醫ヲ採用セルノ始メナリ。後チ進ミテ法印ニ敍セラレ潤川院ト號ス、西洋醫學所長ヲ兼ス。文久三年將軍家茂公ニ從テ京都ニ入ル、既ニシテ公病篤シ、先生夙夜侍率側ヲ離レズ、時ニ適マ眼ヲ病メルモ治スルノ暇ナク遂ニ明ヲ失フ。慶應二年一月家茂公遂ニ薨ズ、是ニ於テ仕ヲ致シ、懷ヲ風月ニ寄セテ、復タ世事ヲ問ズ。明治十三年家ニ歿ス、享年七十六、青山梅窠院ニ葬ル。

第百六十　森　立之

字ハ立夫、名ハ立之、枳園ト號シ、通稱養眞ト呼ブ。文化四年十一月江戸ニ生マル、世々醫ヲ以テ福山侯ニ仕フ、文政四年年十五父ヲ喪ヒ、養竹ト改ム。天保八年二月故アリテ祿ヲ失ヒ、相州ニ落魄スルコト十二年、ソノ間半バ儒トナリ、半バ醫トナリテ辛苦セリ。弘化五年五月許サレテ再ビ江戸ニ住ム、嘉永七年醫學館講師トナリ、醫心方ヲ校正セリ、慶應四年備後福山ニ移リ、明治五年五月東京ニ來リ文部省ノ小吏トナリ、十二年大藏省ニ入ル。明治十八年十二月六日歿ス、享年七十九、池袋丸山洞雲寺ニ葬ス。

著ス所ニ藥相醫話素問攷註千金方筆記、外臺秘要筆記、玉機微義筆錄五讀六鍼和名攷、温和樂寶、陶藏圖譜、新編本草經義註、桂川醫話、魚譜釋魚譜アリ。

第百六十一　權田直助

名越廼舍ト號ス、武藏毛呂本郷ノ人。年十九、幕府醫官野間廣春院ニ就キ修學三年、後チ歸郷シテ開業ス。年二十三平田篤胤ノ門ニ入リ治療ヲ門人ニ、家事ヲ妻ニ托シ一室ニ籠リ著述ニ從事ス。文久三年上洛シ醫紳ト交リ勤王ノ道ヲ說ク、維新ノ後監察司知事大學中博士醫道御用掛ニ任セラル。明治四年四月峰岸ノ事アリ官ヲ罷メラレ前田邸ニ幽閉セラル。明治六年相模ノ阿夫利神社ニ奉仕ス。明治二十年六月八日歿ス、時年七十九。

著ス所ニ、古醫方經驗略、大同類聚方考、古醫道治則、古醫方藥方略、古醫道沿革考、くすしめ一言、心ノ柱、名越廼舍老後集アリ。

第百六十二　今村了庵

名ハ亮、祇郷、又ハ復庵ト號ス、山縣少貳ノ裔ナリ。天保元年佐藤一齋ニ就キ經學ヲ修メ同三年多紀安叔ニ從ヒテ醫學ヲ修メ、安政五年江戸瀬戸物街ニ開業ス。幾モナク醫學館講師ニ補セラレ、明治二年大學ニ於テ漢醫學ヲ講授ス、十二年八月明宮邦診醫ニ擧ゲラル。明治二十三年一月十三日歿ス、年七十七谷中天王寺墓地ニ葬ル。

著ス所ニ、醫事啓蒙、脚氣鈎要、脚氣新論、鍼灸指掌、三綱考、洋方醫傳、脚氣鍼要、日本醫道沿革考、醫事問答、杏林餘興、西醫指要、麻疹論、梅毒醫案、類篇、癖疾新論、醫教了庵遺稿アリ。

第百六十三　林　洞海

名ハ獎字ハ健卿、洞海ハ其號ナリ、後チ通稱トス、別ニ春識齋梅仙茶農ノ號アリ。文化十年三月三日豊前筑崎村ニ生マル、年十三、軒岐ノ術ヲ修メ、天保三年年二十、江戸ニ來リ足立長高ノ門ニ入リ蘭醫方ヲ學ブ。佐藤泰然長崎ニ到ルトキ伴フテ同行ス、二年ヲ經テ再ビ共ニ江戸ニ歸レリ、時ニ天保十三年、年三十一ナリ。泰然佐倉侯ニ召サルヽトキ、其長女子ヲ先生ニ嫁シ、泰然ノ舊廬ニ業ヲ開カシム。

萬延元年幕府ニ召サレ奥詰醫師トナリ翌二年法眼ニ敍セラル。明治三年大學中博士トナリ、大阪府醫學校長トナル、後チ權大典醫トナリ、皇太后附ヲ命ゼラレ、陸軍々醫總監トナル。明治二十八年一月二十三日偶偶肺炎ニ罹リ、二月二日遂ニ歿ス、享年八十三、本郷區駒込吉祥寺ニ葬ル。

著ス所ニ、弦篤兒藥性論、內科簡明、成就齋歌集、自代斥代茶農浸錦衣裳私說アリ。

第百六十四　淺田宗伯

名ハ惟常字ハ職此通稱宗伯栗園ハ其號ナリ、文化十二年生マル。年十三、松本藩儒臣木澤天倪ニ詩文ヲ受ケ、後出デテ高遠藩ニ遊ビ中村中信ニ就テ儒醫ノ要義ヲ問フ、年十八、京都ニ行キ中西吉益川越ノ諸門ヲ叩キ、年二十二江戸ニ來リ、本康宗圓ノ門ニ入ル、宗圓多紀直庭小島學古喜多村栲窓ト親炙ス、安政五年疫病流行ス、先生此疫病ヲ診スル凡ソ二千九百九十三人ナリキ。六年幕命ニヨリ醫心方ヲ校訂シ、文久元年微士ニ列セラル。慶應元年八月佛國公使レヲン・ロセツ病アリ榮治效ナシ、先生招カレ治療ヲ施シテ效ヲ奏ス、幕府賞スルニ白銀二十錠ヲ以テシ、佛帝亦賞ヲ賜レリ。慶應二年世祿三十口扶米二百苞ヲ受ケ、法眼ニ敘セラル。明治四年職ヲ辭シ牛込ニト居ス、明治十二年明宮侍藥醫トナレリ、二十一年五月東宮侍醫ヲ辭ス、時ニ年七十四。二十七年二月病家ヨリ歸リ忽チ病ヲ獲、三月十六日家ニ歿ス、享年八十二。

著ス所ニ、皇國名醫傳、春林風月、先哲醫話、傷寒綱要、傷寒論識、絲病論識、古方藥註、病窓書影、牛渚漫錄、醫學典型、桑潟須知、傷寒翼方、雜症翼方、讀史閒話、治痘綱要、醫紀、事原、醫西醫指要、脚氣提要アリ。

第百六十五　小島尙質

字ハ學古名ハ尙質通稱喜庵、後チ春庵ト改ム、寶素ハソノ號ナリ。寛政九年生マル、母ハ前野蘭化ノ娘ナリ。享保三年九月家督ヲ嗣ギ、文化十年十月醫學館藥調合役ヲ命ゼラレ、文政四年四月二日番醫師トナリ、天保六年八月十六日奥詰ニ進ミ、同七年十二月十六日法眼ニ敍セラル、同十一年三月二十四日奥醫師ニ進ム、弘化三年五月十二日醫學館世話役ヲ命ゼラレ、嘉永元年十二月七日歿ス、享年五十二。

寶素一日伊東三溪ヲ訪フ、三溪倆々浴ヲ進ム、寶素浴畢リ燈前ニ佇立ス、ソノ眞影紙窓ノ間ニ映ス、三溪直チニ筆ヲ下シテ此圖ヲ作レリ。

ア

青木昆陽〔五〇〕
安藝守定〔一〇〕
淺田宗伯〔一六四〕
淺井圓南〔六一〕
嵐山甫安〔二九〕

イ

池田瑞仙〔八五〕
伊澤信估〔九七〕
石坂蕙圃〔一二七〕
出雲廣貞〔七〕
伊東玄朴〔一五六〕
稲生若水〔三八〕
飯沼慾齋〔一五〇〕
今大路玄淵〔二八〕
今村了庵〔一六二〕
岩崎濂園〔一一三〕

ウ

宇田川玄隨〔六七〕
宇田川榕齋〔一〇二〕
宇田川榕菴〔一一六〕
宇津木昆臺〔一二〇〕
宇津木昆臺（木像）〔一二一〕
海上隨鴎〔八〇〕

エ

越後丹介〔九〕
江馬蘭齋〔一一〇〕
惠美三白〔五七〕
井上玄徹〔二六〕
同　玄徹（木像）〔二七〕
井上稚川〔四八〕

オ

大槻玄澤〔九三〕
大槻俊齋〔一四五〕
岡節齋〔一一九〕
緒方洪庵〔一四四〕
緒方春朔〔七八〕
小川玫庵〔一一八〕
岡本玄冶〔一〇〕
奥劣齋〔一〇四〕
奥村良竹〔四六〕
越智平庵〔三九〕
小野蘭山〔七七〕

カ

貝原益軒〔三七〕

高良齋〔一一七〕
賀川玄迪〔五三〕
賀川玄悅〔五二〕
賀川有齋〔六四〕
賀川蘭齋〔一〇一〕
賀川蘭臺〔一四八〕
香川修庵〔四四〕
各務文獻〔九八〕
賀來佐一郎〔一三九〕
片倉鶴陵〔九一〕
片倉鶴陵（木像）〔九二〕
香月牛山〔四二〕
河津省庵〔一二九〕
川越衞山〔九六〕
川本幸民〔一五七〕
僧慶眞〔三〕

キ

僧行基〔一〕

ク

桑田立齋〔一五二〕
僧觀勒〔二〕

コ

小石元俊〔七六〕
小石元瑞〔一二二〕
後藤艮山〔四一〕
小島尙質〔一六五〕
小森桃塢〔一一四〕
櫨田直助〔一六一〕

サ

齋藤方策〔一二三〕

シ

鹽田順庵〔一五四〕
新宮涼庭〔一三三〕
新宮涼庭（木像）〔一三四〕

ス

杉田玄白〔八六〕
杉田玄白（木像）〔八七〕
杉田梅里〔一四〇〕
杉山和一〔三〇〕

セ

瀨丘長圭〔五五〕
施藥院全宗〔一四〕
施藥院宗伯〔二一〕

ソ

曾谷慶點〔一二〕
橘元周〔七三〕
越部清菴〔五八〕
田中張海〔六三〕
丹波雅忠〔六〕
丹波康賴〔四〕
丹波康賴（同）〔五〕

タ

藏曼公〔一三〕
高野長英〔一二四〕
高野長英〔一三五〕
多紀元堅〔一三七〕
多紀柳洗〔九四〕
多紀安長〔七九〕
竹內新八〔八一〕
竹內玄同〔一五九〕
田代三喜〔一一〕
竹中南峰〔一〇八〕
館玄龍〔一四三〕
橘南谿（宮川春暉）〔七五〕

テ

寺井玄渓〔三五〕

ナ

中川修亭〔一二六〕
中神琴溪〔一〇〇〕
櫛林鎭山〔三四〕
櫛林鎭山〔六六〕
櫛林鎭山〔一三〇〕
難波立愿〔一四一〕

ニ

僧忍性〔八〕

ノ

野間三竹〔一二一〕
野呂元丈〔四五〕

ハ

橋本宗吉〔一〇七〕
畑黃山〔七四〕
畑柳泰〔九九〕
幡野宗巴（初代）〔三二〕
幡野宗巴（七代）〔一四七〕
華岡青洲〔一〇五〕
華岡青洲（還曆賀像）〔一〇六〕
華岡鹿城〔九五〕

花野井有年〔一四九〕
土生玄碩〔一三二〕
原南陽〔八九〕
原老柳〔一三五〕
林洞海〔一六三〕

ヒ

平賀源内〔五四〕
平田篤胤〔一一五〕
日高涼臺〔一五三〕
廣瀬元恭〔一五五〕

ホ

堀杏庵〔一九〕
帆足万里〔一二八〕
堀内忠亮〔一三一〕
本間棗軒〔一五八〕

マ

前野蘭化〔七〇〕
松岡恕庵〔四三〕
松平君山〔五九〕
松下見林〔三三〕
曲直瀬道三〔一三〕
曲直瀬正琳〔一五〕
曲直瀬正純〔一六〕
曲直瀬玄朔〔一八〕

ミ

三浦梅園〔六二〕
御園意齋〔一七〕
御園中藥〔四九〕
水原三折〔一三六〕
箕作阮甫〔一四六〕
三宅艮齋〔一五一〕
三輪東朔〔八八〕

ム

向井靈蘭〔二四〕
村井椿壽〔八四〕

モ

最上德内〔一〇九〕
本居宣長〔六九〕
本木仁太夫〔六五〕
本木蘭汀〔九〇〕
本木良意〔三一〕
百々漢陰〔一一〕
森立之〔一六〇〕

ヤ

山科厚安〔五六〕
山本封山〔八二〕
山木亡羊〔一四二〕
山脇玄心〔二五〕
山脇玄脩〔四〇〕
山脇東海〔一〇三〕
山脇東圃〔一一二〕
山脇東門〔六〇〕
山脇東洋〔四七〕

ユ

柚木太淳〔七二〕

ヨ

吉雄耕牛〔六八〕
吉田自庵〔三六〕
吉益東洞〔五一〕
吉益南涯〔八三〕
吉益北洲〔一三八〕

ワ

和田東郭〔七一〕

昭和十一年七月十日印刷
昭和十一年七月二十日發行

定價十圓

醫家先哲肖像集

著者　藤浪剛一

發行者　東京市神田區錦町三丁目六番地　關根喜太郎

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　白井赫太郎

發行所　東京市神田區錦町三丁目六番地　刀江書院
電話神田（三二）八一七一
振替東京七二一一八